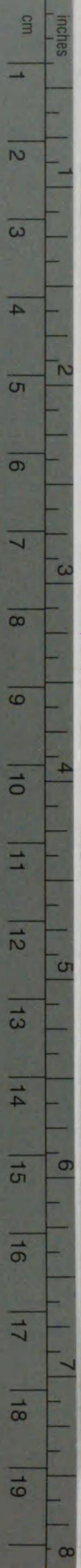


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

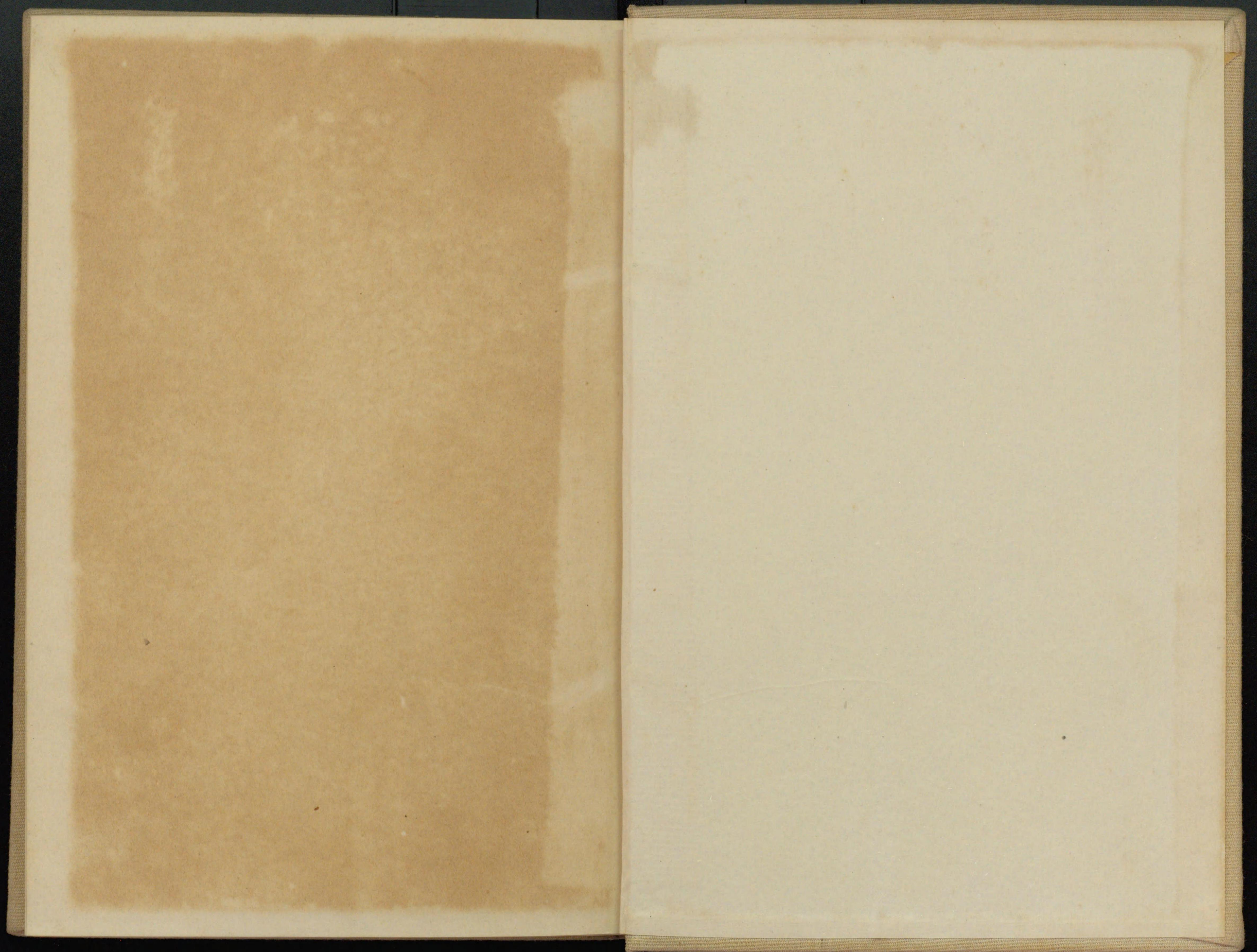
© Kodak, 2007 TM: Kodak



512-227



1200700065503



河合榮治郎著

社會思想史研究 第一卷



岩波書店發行

河合榮治郎著

社會思想史研究

第一卷



岩波書店刊行

512

227



序

大正九年の秋著者の官を辭したる時、痛切に感じたることは、自己の眼を以て社會を視、自己の信念を以て社會に臨むべく、獨自の思想を作らんことであつた。此の希望は頭を回らして、先人の踏みたる道を辿らしむるに至つた。先人の社會思想はその全思想體系に於て如何なる地位を占むるか、彼は如何にしてかくの如き社會思想に到達したるか、彼の逢着せし難問は果して何なりしか、如何なる點に於て後人の改訂を必要となしたるか、すべて之等の問題を提げ、先師の門を敲くの心を以て、先人の跡を追うたのであつた。本書は以上の如き志を以て試みたる研究の一部を割き、順を追ふて、最近、世に公にせる數篇を集めたるものである。即ち、各篇の間には、自ら一個の系統が存するのであつて、従つて各篇は相集つて本書の各章をなすのである。

既に著者の研究にして、上述の如き趣旨を以てするものなる以上、其の目的は先人を知り、やがて之によつて自己を知らんとするにあつて、自己を以て先

1

序



I種
W



1200700065503

人を論評せんとするにあるのではない。故に本書に於ては、努めて批評を次代の人の言に籍つて、著者の主観を以てせざるやう心掛けた。著者自身の意見の如きは、此の種の研究の一應完了せる後に於て、始めて許さるべしと思ふからである。

本書を以て「社會思想研究第一卷」となしたるは、著者の計畫にして變ぜざる限り、三卷又は四卷に至るまで、本書續刊の志を有するからである。従つて本書は本來連絡せる研究の一部を割きたるもので、アダム・スミスに關するものは、續稿ヒュームに關するものと一體をなすべく、ベンサムに關しては更に功利主義を詳論したい積である。殊にミルに接してトーマス・ヒル・グリーンを掲ぐる事は、極めて必要なりしに拘はらず、渡歐の爲志を果さなかつたのは、著者の頗る遺憾とする所である。

本書の刊行に際しては、友人蠟山政道及び久留間二郎兩氏の助力に負ふ所が尠くない。著者の日本を去りし後に於て、本書が刊行の運に至れるは、實に兩氏の賜物である。茲に厚く兩氏に謝意を表す。

大正十二年一月

倫敦に於て

著

者

社會思想史研究 第一卷 目次

第一章	アダム・スミスと自由主義經濟學	一
第一節	緒論	一
第二節	スミスに於ける經濟學の地位	五
第三節	スミスの時代	一四
第四節	スミスの經濟學史上に於ける貢獻	二三
第五節	スミスの經濟思想の根柢	三五
第六節	スミスの影響と残したる問題	四三
第二章	ジェレミー・ベンサムと功利主義經濟學	五二
第一節	緒論	五二
第二節	ベンサムの時代	六一
第三節	倫理說としての功利主義	七七

目次

第一章 緒論……………七七

第二款 心理學的快樂說……………八三

第三款 公衆的快樂說……………一〇二

第四章 社會思想としての功利主義……………一二一

第五節 結論……………一五一

第三章 英國思想史の過渡時代……………一七三

第一節 緒論……………一七三

第二節 社會主義……………一七九

第三節 勞働組合……………一九三

第四節 勞働立法……………二〇四

第五節 理想主義……………二一六

第六節 オックスフォード運動と基督教社會主義……………二三五

第七節 結論……………二四五

第四章 過渡的思想家としてのジョン・スチュアート……………

目次終

目次

ミル……………二四六

第一節 緒論……………二四六

第二節 思想……………二六六

第一款 總論……………二六六

第二款 各論……………二九六

第一項 自然主義より理想主義へ……………二九六

第二項 靜的觀より動的觀へ……………三三〇

第三項 個人主義より團體主義へ……………三四七

第三節 結論……………三八三

目次

内容細目

第一章 アダム・スミスと自由主義経済学

第一節 緒論

スミス研究の各対象——本章の目的

第二節 スミスに於ける経済学の地位

彼の學問研究の目的——エヂンバラ及びグラスゴー大學に於ける講義の内容——特に経済学を研究せる所以——文化史に於ける富に對する觀念の差異——人生の手段としての富の研究

第三節 スミスの時代

時代の影響の意義——特殊の影響を與へし人々——(1)フランシス・ハチソン——自然秩序に對する樂觀的見解——スミスと経済学との結合——(2)ヒューム——人間性の研究を出發點とする経済学と歴史的研究方法——自由主義——(3)マンデヴィル——人間性の不徳と分業論——(4)トリーパー黨學者の自由貿易說——(5)フランス重農學派——自然秩序を論據とする自由放任論——分配に關する學說——スミスの綜合と獨創

社會思想史研究内容細目

社會思想史研究内容細目

第四節 スミスの經濟學史上に於ける貢獻……………三三—三五頁

租稅徵收の目的より出發する富國策と重商主義——經濟學より政治的色彩を除く
除去せんとする彼の努力——彼の所謂自由放任主義——重商主義團體主義に於ける政府の干渉の相違とスミス——分配論を重んぜざる理由——唯物史觀的傾向——重商主義の經濟論——重農主義の富の循環に關する説明——スミスの利己心による統一と秩序——經濟學の科學的體系——人間性の研究より出發せる經濟現象の研究

第五節 スミスの經濟思想の根柢……………三五—四三頁

目的觀と機械觀——重農學派の目的觀と *Insuper-finito et Insuper-passivo*——經濟制度の自然と好結果の同一視——利己心即自然的努力——自由放任論と機械觀の重要視——彼の目的觀と *deism*——目的觀より機械觀への推移と利己心

第六節 スミスの影響と残したる問題……………四三—五一頁

富國論の聲價を博せる所以——(1)書物の内容——(2)外界の實際事情——學說の影響——*Jean-Baptiste Say*、*Adam Smith*、*David Ricardo* に依る彼の學說の布及——*Ricardo*—*Smith* と先人の影響——分配論に疎なりし最大缺點——學者の思想と時代による制限

第二章 ジレミー・ベンサムと功利主義經濟學

第一節 緒論……………五二—六一頁

十九世紀英國思想史に於けるベンサムの地位——彼の性格と門弟所謂 *Philosophical Radicals*——業績——本章の目的——正統派經濟學の根本思想——個人主義以外に及ぼせる影響

第二節 ベンサムの時代……………六一—七七頁

時代なる語の二つの内容——十八世紀英國の沈滯時代なる理由——英人の保守論と社會制度の實情——産業革命に因る社會狀態の變革——新道德、新哲學に對する要求——*Evangelical Revival* と其社會的意義——政治界に於ける改革

第三節 倫理說としての功利主義

第一款 總說……………七七—八三頁

功利主義の意義——政府の施設並びに個人の行爲に對する功利主義の適用——倫理說としての功利主義と社會思想としての功利主義を分つ所以——善惡に關する二つの反對せる考方と彼の倫理說としての功利主義——功利主義の淵源とベンサム

社會思想史研究内容細目

第二款 心理學的快樂說

八三—一〇二頁

人間性の研究に關する中世の神學的色彩と自然科學の發達——ホッブスと自己保存の衝動——Cambridge-Platonists——ロック——自然主義と人間性の利己的斷定——ベンサムの少時思想上の影響——心理學的快樂說と其解釋——彼の所謂人間心理の説明に對する反對——(1)快樂に反する事を行ふ場合尠なからず——(2)快樂自身を目的とせず——(3)人間性の高調は氣高き感激を起さしめず——道徳的創意の存在無視——心理學的快樂說の政治、法律學特に經濟學に對する影響——社會科學に於て自然科學と等しく法則を發見せんとする努力——彼の人間觀の二傾向——(1)無意識界の存在否定——(2)自然科學的研究方法と道徳意識の矛盾——正統派經濟學の基調と反對說——社會心理學者——理想主義者——科學的社會主義者——マルクスとベンサムの關係——彼の人間性の見方に對する批評

第三款 公衆的快樂說

一〇二—一二頁

心理學的快樂說を根據とする善惡に關する二つの倫理說——利己的及心理學的快樂說の關係——ベンサムと公衆的快樂說——最大多數の最大幸福の計量に關する彼の標準——公衆的及心理學的快樂說の矛盾——自然的、政治的、道徳的及宗教的制裁と其不完全——彼の倫理說の他の缺點——(1)最大多數の最大幸福の實際上測定困難——(2)結果說としての倫理說——(3)自己建設に對する指針の

欠缺——功利主義の功績——(1)倫理說の通俗化——(2)改造熱の鼓吹——經濟思想史に對する影響——(1)利己的思想の彼の名に於ける普及——(2)唯物的傾向——經濟學に對する結果——(1)富の爲めの學問としての經濟學——(2)價格研究の重要視——彼以後の經濟學者に及ぼせる影響——リカルドとベンサム——功利主義の思想史上に於ける意義——(1)内心に於ける善惡の批判——(2)利己主義利他主義、個人主義團體主義の過渡的思想表現

第四節 社會思想としての功利主義

一一—一五二頁

倫理思想としての功利主義に對する非難と社會思想としての功利主義——結果說、唯物的及び最大多數の最大幸福計量の困難に對する非難——社會思想としての功利主義を先づ用ふ——沈滯、保守の時代——制度批判の必要——フランス革命の思想家——科學的立論による彼の反對——社會制度に對する影響——人間平等說の鼓吹——私有財産制度に關する彼の觀察——生計、餘裕、平等、安全——安全保障の重要視と理由——社會思想としての功利主義の影響と社會制度批判の標準——法律制度批判——立法議會の推獎——政治組織の研究——自由放任論——具體的結論としての契約自由の原則——スミス、自由放任論との差異——個人主義に於ける彼の思想と團體主義——リカルド派社會主義と功利主義——彼の思想の恒久的影響——(1)時代に批判の眼を開かしむ——(2)社會思想史上より形而

社會思想史研究内容細目

上學的思想の驅逐—彼の社會思想に於ける快樂的人生觀

第五節 結論……………一五一—一七二頁

彼の影響と門弟の功利主義宣傳—彼の大なる勢力を有せし理由—(1)社會改革者としての特長—(2)最大多數の最大幸福なる語による明白なる表現と英國國民性適合—特殊的原因—(1)改革的人道主義的傾向投合—(2)進歩派の要求を満すと共に保守派の沮止なき事—彼の思想發展の順序と倫理說の普及—政派的立場の變化—人間性の利己的斷定と彼の性格との矛盾の説明—矛盾の原因としての自然科學的研究法—個人主義社會主義の自然科學的論據—吾人の義務は無意識界及び意識界に於ける我の調和—ベンサム時代及び現今社會事情の類似と彼の功績

第三章 英國思想史の過渡時代

第一節 緒論……………一七三—一七九頁

過渡時代の意義—個人主義の出現と其發展—労働問題の出現と新思想、新運動の勃興—本章の目的

第二節 社會主義……………一七九—一九二頁

社會主義的思想の淵源とフランス革命—革命思想の所有權に關する見解と

社會主義を産む可き萌芽—空想的社會主義—科學的社會主義との相違—革命思想の淵源と目的觀及び機械觀—リカルド派社會主義—空想的社會主義との差異—チャーチスト運動—運動の原因と選舉法改正の要求—労働者の自己境遇改善の三方法とチャーチスト運動の議會改造の方法によりし所以—運動の經過と效果—運動消滅の原因

第三節 労働組合……………一九三—二〇四頁

London Core ponding Society と結社禁止法—労働運動の目標—(1)結社禁止法の廢止—労働組合に對する個人主義の態度の不統一—一八二四年及び一八二五年の法律—組合公認と個人主義より團體主義への推移—New Unionism—(2)組合の名實上の自由—Royal Commission 設置法令の制定—Trade Union Congress と組合の活動—賃銀基金說による個人主義者の懷疑的態度—組合活動自體並びに結果による個人主義の打撃

第四節 労働立法……………二〇四—二二五頁

未成年及女子労働者の保護必要—個人主義者と契約自由の原則—労働立法の歴史—個人主義と労働立法の對立—個人主義者の労働立法反對の論據—トリーパー黨と労働立法—Young English Party—一八三二年議會調査委員會設置—十時間法成立及び株式會社の流行と個人主義の勃落

社會思想史研究内容細目

第五節 理想主義……………二一六—二三五頁

個人主義と自然主義——個人主義と功利主義——自然主義反對者としてのスコットランド學派及びコールリツヂ——功利主義反對者としてのカーライル、ラスキン——個人主義と理想主義の關係——理想主義の淵源——リチャード・プライス——トーマス・リード——ウイリアム・ハミルトン——ウイリアム・ウイエル——コールリツヂ——カーライル——ジョン・ラスキン——十八世紀理想主義者の過渡的思想家たる所以

第六節 オックスフォード運動と基督教社會主義……………二三五—二四四頁

十八九世紀の無神論的傾向——コールリツヂ及びオックスフォールド大學を中心とする宗教家——愛蘭僧職廢止とオックスフォールド運動の勃發——運動の結果——(1)宗教の復活——(2)教會内に於ける團體主義主唱——(3)國家と教會との關係研究——Broad Church Party——コールリツヂの影響——オックスフォールド運動との相違——基督教社會主義の人々——運動の經過——オックスフォールド運動及び社會主義との相違——影響

第七節 結論……………二四五頁

第四章 過渡的思想家としてのジョン・スチュアート・ミル

第一節 緒論……………二四六—二四五頁

社會思想の三階段——個人と團體の對立——社會思想の前提としての哲學思想と其三階段——自然主義と理想主義の對立——十九世紀英國思想史の狀態——經驗哲學と個人主義社會思想——個人主義、自然主義に對する反對思想——過渡期思想の研究と一人格者の内的歴史——個人主義より團體主義への推移を辿れる人々——自然主義より理想主義への推移を示せる人々——最良の代表者としてジョン・スチュアート・ミルを擧ぐる所以——(1)哲學者並びに社會思想家たること——(2)彼の經歷——(3)伸縮力と順應力——(4)自叙傳——本章の目的

第二節 思想

第一款 總論……………二六六—二九六頁

ミル生涯の思想史的三期——第一期——父の思想、性格の影響——教育——佛蘭西旅行——(1)父の壓迫よりの離脱——(2)佛國及び佛國語との親和——自學の時代——ベンサムと「立法論」——其の他彼に影響を與へし人々——Utilitarian Society——東印度商會の書記奉職の影響——ベンサム心酔の時代——第二期——憂愁の時代——社會改良の必然的難關とミル——マルモンテルの追憶記と内的歴史に於ける體驗——(1)裏に於ける利他心の發見——(2)精神界の存在認識——詩歌藝術の重要視——大陸に於ける十八世紀思想に對する新運動とミル——蘇國哲學者の影響——

社會思想史研究内容細目

— テーラー夫人との交遊 — 交遊自體並びに夫人の言、性格の影響 — 新思想を豊に受入れし時代 — 根本思想としての自然主義、個人主義 — 結論に於ける舊套離脱 — 第三期 — ベンサム思想への復歸 — 夫人の影響 — 彼の過渡的思想家たる所以 — (1) 再歸反動誇大視の不可 — (2) 彼の功利主義、個人主義の特色

第二款 各論

第一項 自然主義より理想主義へ……………二九六—三三〇頁

自然主義及び直覺主義 — 自然主義とロツクの「人間悟性論」 — ベンサム及びコムトとミル — 彼の自然主義に歸依せし理由 — (1) 直覺説の打破 — バークレーの主観々念論と聯想心理説 — (2) 社會科學の自然科學的研究 — ベンサム — 研究に對する二個の反對とミルの答辯 — 研究に對する彼の構案 — 第一段精神の哲學 — 第二段「人性構成學」 — 第三段社會科學 — 彼の倫理説とベンサムの功利主義 — 直覺派倫理説との差異 — (1) 功利主義と心理學的快樂説 — (2) 善なる行爲の指示 — (3) 幸福なる觀念の物質的 — 彼が過渡的思想家たる所以 — 理想主義への轉回 — (1) 人間内の活動の肯定 — (2) 功利主義の改訂 — (3) 人生觀の變化 — 彼の文章及び生涯に現はれし傾向 — 自然主義より蟬脱せず

第二項 靜的觀より動的觀へ……………三三〇—三四七頁

靜的觀及び動的觀の意義 — 社會思想と物理學、化學及び生物學 — ミルの時代

と靜的觀 — 歴史研究の無視 — 十八世紀に於ける歴史學上の傑作に富む理由 — 十九世紀の動的觀 — (1) ヘーゲルの哲學 — (2) ダーウキンの進化論 — 歴史學派の勃興 — ミルの動的觀とサン・シモン、コムト及びゲルマン・コールリツヂ派の歴史哲學 — 彼の歴史研究の三階段 — 彼の社會現象扱方に對する動的觀の影響 — (1) 過去文化の尊重 — (2) 物の價値の絶對性否定 — 人間性の不易なる事の否定 — 私有財産、相續制度に對する批判 — 彼の過渡的思想家たる所

第三項 個人主義より團體主義へ……………三四七—三八三頁

個人主義の二義 — (1) 個人と生活の目的 — (2) 自由放任主義 — 兩者の關係 — ミルと個人主義 — 自由放任主張の論據 — 重商主義政策に對する攻撃 — 勞働問題とマルサス人口論 — 貨銀基金説 — 團體主義への推移と其原因 — (1) 實際社會の事情 — (2) 思想上に於ける影響 — 實蹟 — (1) 經濟學原論の題目 — (2) 分配論に對する態度 — (3) 社會主義に對する態度 — (4) 私有財産更に土地所有權に對する態度 — (5) 地代論 — (6) 慣習の重要視 — (7) 勞働組合の意義承認 — (8) 國家干渉の承認 — 團體主義への推移は必然の過程を経ず — 個人主義への復歸 — 貨銀基金説の抛棄 — 過渡的思想家たる所以 — 個人主義への復歸と團體主義への促進 — 個人主義の理想主義化と團體主義への推移

第三節 結

社會思想史研究内容細目

……………三八三—三九三頁

社會思想史研究内容細目

彼の當代に及ぼせる功績——過渡的思想家としての使命を果せし事——恒久的
 功績——(1)第一義の個人主義宣明——(2)自己完成方法としての自由放任の意義
 釋明——彼の感化——努力勤勉の生涯

社會思想史研究

第一卷

第一章 アダム・スミスと自由主義經濟學

第一節 緒論

アダム・スミスが經濟學建設の父であり、彼の經濟學が始めて自由放任主義を鼓吹したものであることは何人も知る所である。彼の地位がかく偉大である丈、彼に關しては述ぶべき事多く、其の研究は各種の方面から試みられて居る。しかし此の一文の語らんとするのは、彼に關する研究の全部ではない。第一にスミスの思想の根柢をなす基調は果して何であるか、此の研究は從來ハスバハの爲した所であつた¹⁾。私は彼の思想の基調は十七八世紀に於ける

1) Wilhelm Hasbach: Die allgemeinen philosophischen Grundlagen der von Francois Quesnay und Adam Smith begründeten politischen Oekonomie 1890. 及び Untersuchungen über Adam Smith, 1891.

自然科学的見方と、ストイックより流れ出た自然法の思想であると思ふ。此の二つは夫れ自身に於て全く別個の系統を有するものたるに拘はらず、不思議に經となり、緯となつて、十八世紀の啓蒙思想の基調をなし、スミスの中にも流れて居る。此の二つの思想の淵源を辿り、其の性質を検することは甚だ興味ある研究たるを失はない、しかし本文は之に觸れんとするものではない。私は別の機會に之を試みたいと思ふ。

第二にスミスが道德情操論の中に云ふ同情と富國論の中に云ふ利己心とは、果して如何なる關係に立つものであるか。此の事はスミスが明白に觸れることなくして残した問題であつて、幾多の哲學史家倫理學史家が之を説明せんとして、今も尙確定した説なきに苦しんで居る様である。經濟學の方面からもクニース、スカールチンスキ等を試みた所であつた¹⁾。之が研究は思ふに十八世紀英國倫理學史の殆全部を背景として頗る意義あるものであるが、本文は之に答へんとするものではない。

第三に彼の富國論の内容を分析して、各個の問題に對するスミスの經濟學

1) Karl Kries: Die politische Ökonomie von Geschichtlichen Standpunkte, 1883.
W. Skarzynsky: Adam Smith als Moralphilosoph und Schöpfer der Nationalökonomie, 1885
藤井俊次郎氏「アダム・スミスの根本思想に就て」(哲學雜誌第三百七十七號)

説と前代及後代の學説との關係を一々語ることも亦彼に付てなすべきことの一である。此の如き經濟學説史の一節としてスミスを見るとは、例へばキヤナンの試みた所であつた¹⁾。しかし之も亦本文以外の問題である。第四に残るものは彼と當時の産業事情との關係である。彼の思想も亦時代の産んだもので、産業革命の開始に當つて自由に手腕を振はんとする新興階級が憧憬して止まなかつたものは彼の如き思想であつた。彼を求むる時代は何であつたか、彼の眼前に展開した經濟事情は果して如何なるものであつたか。之を述ぶることは興味ある一題目たるを失はないであらう。

然し之等の問題はすべて此の一文の企つる所ではない。本文の主として答へんとするものは、第一にスミスの經濟學は彼の一般思想體系の中に如何なる地位を占むるものであつたか、彼は如何にして經濟學の研究に到達したかである。第二に彼の思想に及ぼした影響は何處より來りしか。第三に彼の經濟學は如何なる點に於て前時代の經濟學より飛躍したか。第四に彼の經濟思想の根柢を流るゝ見方は果して何であるか。第五に彼の主張は當代

1) Edwin Cannan: A History of the Theories of Production and Distribution in English Economy from 1776 to 1848, 1917.

に如何なる影響を及ぼしたか、更に彼によりて爲し了へずして、後人の手に残された問題は、何であるか。之等の題目に對する簡單なる答が本文の目的である(註一)。

註一 アダム・スミスの生涯を論じたる傳記書として、本文の参照したるものは次の如くである。

Dugald Stewart: Account of the Life and Writings of Adam Smith, 1793.

John Rae: Life of Adam Smith, 1885.

R. B. Haldane: Life of Adam Smith, 1887.

Francis W. Hirst: Adam Smith, 1904.

スチュアートはスミスの死後間もなく即ち、千七百九十三年エヂンバラ王立協會に於てスミスに就て講演したので之れが最初のスミス傳である。レイのスミスは其の分量に於て其の内容に於て白眉と稱せられる。ホルデーンは寧ろスミスに對して同情少く、ハリストはホルデーンに反對してスミスに對して同情を持ち、兼ねてレイの傳記以後千八百九十六年に後述するスミスの講義が出版せられたので之を付け加へんとて書かれたものである。尙スミスに關する参考書、論文等はホルデーンの傳記の巻尾に詳細なる調査がある。又 James Bonar の Catalogue of the Library of Adam Smith, 1874. はスミスの藏書を調べたものでスミスに如何なる書物の

影響があつたかを云ふ時に屢々参考にせられる。尙大體レイの傳記を中心として高橋誠一郎氏が三田學會雜誌大正十一年二月號以後に「アダム・スミスの生涯」を書いて居られる。就て参照すべき好論文である。

第二節 スミスに於ける經濟學の地位

經濟學は彼の一般思想體系の中に於て、如何なる地位を占むるものであるか。從來スミスの經濟學を研究するに際しては、富國論のみを對象として採るのが慣例で、富國論と彼の一般思想との間に、如何なる密接の交渉あることを注意しなかつた。此の事は彼以後の正統派經濟學者が陥つた失敗であつたのである。しかしスミスの經濟思想を解するに富國論のみを採るは、決して眞髓を捉ふる所以でない。彼の思想全體を不可分の有機的一體として取り扱ひ、其の中に於ける經濟學の地位を検討せねばならない。之れ彼が如何なる態度で經濟學を見、彼の經濟學の色調が奈邊にあるかを知るに必要缺くべからざることである¹⁾。

1) Cliffe Leslie: Essays in Political and Moral Philosophy, 1888, p. 23.
Albion W. Small: Adam Smith and Modern Sociology, 1907. pp. 4-5 10-11.

彼が生涯を一貫せる學問研究の目的は、如何にして人類が野蠻時代より文化の時代に至るまで變遷し來れるかを考察し、之が爲めに學問法律政治その他此の變遷に與れる一切の要素を研究せんとするにあつたのである。此の偉大なる計畫を遂行するが爲めに、彼の採りたる研究は頗る多方面に亘り、人をして其の博學に一驚を喫せしむるものがある。彼の道德情操論に附録とせる言語の發達史を始めとして、未定稿なる天文學史あり、之と關聯せる古代物理學史あり、古代の論理學哲學に關するものあり、繪畫音樂舞踊詩劇の本質及發達に關するものがある(註一)。此等一切の材料を提げて一篇の人類文化史を編まんとすることが、彼の畢生の目的であつたので、此の點に於て、後年バウクル Buckle が非常に大規模なる文明史の著述に着手せると頗る類似せる所がある。而してスミスがエヂンバラ及びグラスゴウの兩大學に於て爲したる講義も亦、此の研究課程中の一片に位するものである。

彼のエヂンバラ大學の講義は美辭學及び美文學に關するもので、後千七百五十一年グラスゴウ大學に移るや、其の地位は、始めは論理學の講坐で、後には

1) Walter Bagehot: Biographical Studies, 1881, pp. 218-250.

道德哲學に關するものであつた。前者に於ては、論理學其のものよりも主として美辭學及美文學を教授し、後者に關する講義は、三部門より成つて居る。即ち第一は自然神學 Natural Theology に關するもので、第二は倫理學 Ethics 第三は法律學 Jurisprudence に關するものである(註二)。其中自然神學に關する講義に於ては、神の存在と屬性とを論じ、又宗教心理とも云ふべきものを述べて居つた様である。スミスの信仰はヒュームよりも保守的であつて、ヒュームの「自然宗教に關する對話」(Dialogues Concerning Natural Religion)中の主人公クリアンセスに類似するものがある(註三)。此の部分の講義は、さまざまスミスの心血を注げるものではなく、後人之を語るものが無い。

註一 之等の論文はツガルド・スチュアートのスミス傳を付して千七百九十五年に Essays on Philosophical Subjects と題して發行せられて居る。

註二 此の事に付てはスミスの講義を聞いた門弟の一人で後にグラスゴウの大學の法律學教授となつたミラーの語れるものをスチュアートが述べたものを参照した。Account of the Life and Writings of Adam Smith by Dugald Stewart, prefixed to The Theory of Moral Sentiments (Pohn's Library), pp. XVI—XVIII.

1) Cannan's Introduction to Adam Smith's Lecture, XIV.

註三 Harold Höfling: History of Modern Philosophy, Vol. I, p. 442.

尙スミスはヒュームより「自然神學に關する對話」の公刊を依托せられても容易に之を諾しなかつた。此の一文ヒュームの信仰に對する懷疑的態度を語つたもので後に公表せられて問題になつた。之に對するスミスの態度は會々彼の信仰を語るもので、其の間の消息に付ては *Essays: Moral, Political, and Literary*, by David Hume, edited by Green and Grose, pp. 77-81.

第二の倫理學に關するものが即ち後に *Theory of Moral Sentiments* として千七百五十九年に出版せられたものである。此の書は道德の起源を同情 (*sympathy*) に歸するの趣意を述べたるものであつて、道德官の内在を主張することに於て直覺説に傾き、此の官能の説明を同情に求めたる點に於て功利説に類似して居る。此の點に於て彼の地位は直覺説と功利説との中間にあつて二者の仲介をなすが如きものである。¹⁾ 彼の倫理説は敢て卓見と稱すべからざるも、彼は此の一卷を残して逝くも、尙英國哲學史上に第二流の名聲を博することが出来たであらう。

第三の法律學に關する部分が即ち千八百九十六年 *Cannan* に依りて出版せ

られたる部分にして(註四)、又スミスが道德情操論の卷尾に於て『余は續稿に於て法律及政治に關する一般原則に關し、及び正義、行政、歳入及軍備其の他一切の法律の對象に付て、之等の原則が各時代の異なるに従ひて經過し來れる變遷に關して敘述を爲さんとす、故に今は法律學の歴史に關しては敢て委曲を盡さざるべし』と云ひ、來るべき著書の豫約を爲したるものが即ち、此の部分に當るのである。

法律學に關する部分は、彼の豫告にあるが如く、*Justice, police, revenue, arms* 及 *Laws of nations* の五章より成るもので、其の中 *Justice* 及 *Laws of nations* の二章は、大體彼の先師フランシス・ハチソン *Francois Hutcheson* の講義の *Law of nature* 中の *private rights* 及 *politics* に其の出所を求むることを得るも、行政、歳入及軍備に關する章は、之に相當するものを求むることが出来ない。唯ハチソンの私權に關する部分に『財貨の價值即ち價格に關する』“*concerning the Values or Prices of Goods*” 節があり、ここで物價高低の原因を論じ、良貨の特質に付て述べて居る。*Cannan* の謂ふ所に依れば、スミスは始めはハチソンの此の部分を捉へて *Police*

1) Leslie Stephen: History of English Thought in the Eighteenth Century, II, pp. 79-80.

なる新題目を付して講義をした、之が彼の經濟學との交渉が開かれた最初で、やがて此の方向の研究が加はり、此の章が漸次擴張せられ、人類の欲望を論じ分業を述べ、利子、交易を語るに至り、更に歳入軍備の二章を増加して、此の三章が後年の *Wealth of Nations* の根本となつたのである。即ち彼は法律學中の行政、歳入及軍備の三章の擴張をなして遂に富國論に到達したのである。¹⁾

註四

アダム・スミス研究者として有名なキャナンは千八百九十五年四月二十一日チャールズ・マコノチー (Charles C. Maconochie) なる人より此の講義の學生の筆記を手に入れることが出来た。法律家たりし同氏の先祖が所持して居たものが同氏の手に入つたもので、キャナンは多分千七百六十二年より六十四年に至る學年の講義であらうと云つてゐる、之が千八百九十六年 *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms* と題して公刊せられたのである。詳細は同書のキャナンの序文參照。

然らば何が故に道德哲學者たる彼は經濟に興味を懷き之に深入りしたのであるか。彼が一貫せる生涯の目的は前述せるが如く人類の文化發達史を作らんとするにあつた、而して彼が社會進化の事實を研究せる内に、富に對する觀念が古代と近代とに於て著しく差異あるを發見したのであつた。希臘

1) 上述のキャナンの序文二十六頁乃至二十七頁參照。

羅馬に於ては、富は國民の品性を墮落せしむるものとして極力之を排斥したのであつて、例へばリカルガスがスパルタより貴金屬を排斥したる立法の如きは、古代立法の最も完全なるものとして推奨せられたのである。然るに近代國家の政策は全然之と正反對で、啻に貧困を歓迎せざるのみならず、如何にして富を國內に豊ならしむるかを圖つて唯及ばざるを恐れつゝあるのである。而して近世に於ける人民生活の向上は、一は富の豊なるに依らざるなく、民衆の自由獨立の要求は固より印刷術の發明により智識の普及したるに因るのである。けれども印刷物を手にするを得たのは、彼等の經濟的境遇に餘裕を有するに至つたが爲である。此に於て、彼は富の生産が如何に人民の生活の向上に必要なかを痛切に感じたのであつて、人民にとり重大なる問題は立法に参加するか否かにあらず、國權の構成に與るや否やにあらずして實に立法夫れ自身の内容である。空虚なる政治論より、富を豊ならしむべき方策が一層人民の幸福の爲めに直接の關係あるを觀破したのである。即ち彼は文化研究の課程に於て富が人類文化の發達に及ぼす影響の大なるを認め

て、此に彼の興味は經濟學の研究に向つたのである。¹⁾

之を要するにスミスの經濟學に對するや、始より經濟學を研究せんとしたのではなくて、彼の生涯の目的は別にあつた。然も偶然の運命は彼をして經濟學に至らしめ、此に不朽の生命を托せしめたのである。即ち使徒パウロがダマスクに赴くや敢てクリストの光に接せんが爲ではなかつた、而も偶然の光に打たれて此に神の王國を見出したるが如く、彼も亦自ら知らざる運命に導かれて富國論を大成するに至つたのである。²⁾

以上の事實は果して何を語るか、經濟學がスミスの一般思想體系中に於ける地位以上の如しとして、又彼が經濟學に到達するに至りし徑路以上の如しとして、是は果して彼の經濟學の色調に對して何を語るものであるか。即ち彼にとりて富は富其ものとして目的ではなかつた、人間の生活を目的として之が手段としてのみ富が考へられたのである。富が如何に人間の文化生活に及ぼす影響の大なるかを認めて、彼の眼光は富の研究に及んだのである。之れ人類文化史の計劃者として、自然神學、倫理學、法律學の研究者としての學

1) Dugald Stewart: Account of the Life and Writings of Adam Smith, pp. I—II.

2) Walter Bagehot: Biographical Studies, p. 277.
: Economic Studies, p. 133.

究に相應せる研究と云つて毫も不思議はないのである。正統派經濟學が富そのものを以て目的たるかの如く認むるに至つたのは、ベンサム功利主義の浸入を受けて後始めて起つた現象である。即ちスモールがスミスにとつて富は life に對する means たるに過ぎずして life が終局の目的であると云ひ¹⁾、スチュアートが此の如くして始めてスミスの經濟學が道德學者にとりて興味あり、損得の計算が哲學者にとつて意義ある所以であると云ひ²⁾、フエッターがスミスに於て經濟學は未だ價格經濟學ならずして福利經濟學であつたと云ふ所以は實に此に在る。³⁾ スカールチンスキーがフランスに赴く前のスミスは理想主義者たりしも、フランスより還れる後のスミスは物質主義者なりしと云へるは、假令氏自身が云つた意味に於ては誤つて居るにしても、彼は理想主義者であつた、而して理想主義として富の必要を認めたと云ふ意味に解すれば、此の語はスミスの經濟學に對する立場をよく語るものと云ふことが出来るであらう。之れ十九世紀の後半に於て經濟學が唯物的なりとの批難を理想主義者から受けた場合に於てスミスに還れと叫ばれて新しき方向を導く感

1) Small: Adam Smith and Modern Sociology, pp. 2—3.

2) Stewart: Account of the Life and Writings of Adam Smith, p. L IV.

3) F. A. Fetter: Price Economics versus Welfare Economics, nomu nau ou A Economic Review, Sep. 1920.

激の源泉が彼より湧き出た所以であらう。

第三節 スミスの時代

如何なる學者の思想も、時代から孤立して出現するものではない。學者の學說も時代の影響を受くるものである。此に所謂時代の影響とは之を二様に考ふることが出来る。一は當面の實際事情より來るもので、他は其の時代を一貫せる思想の傾向で、スミスに就て云へば十八世紀の物の考方が即ち之である。此の二つに就ては何れも此の小文の觸れないものであることは第一節に於て述べた。此の如き意味の時代の影響は暫く別として、スミスと云ふ人に特殊の影響を及ぼした人々の思想を擧ぐれば、次の如きものである。

第一にはフランシス・ハチソン (Francis Hutcheson, 1694—1747) を擧げねばならない。彼は千七百二十九年より千七百四十六年迄の間、グラスゴー大學の道徳哲學の教授であつたが、此の間にスミスは學生として彼の指導を受けたのである。若き修養の時代に於て彼がハチソンの教に接したことは、すべての方向に彼の眼を開いたので、¹⁾ 彼がグラスゴー大學時代を云ふ毎に、言ハチソンに及ぶに徴しても明である。^{註一} ハチソンの感化の内特に後年の彼の人生觀に其の痕跡を發見し得べきものは、自然の爲した秩序に對する樂觀的見解であらう。此思想は希臘のストアックより來れるものであるが、ハチソンは之をシャフツベリより受け更に之をスミスに傳へたのである。^{註二} しかしハチソンは經濟研究者としては重商主義に屬する人で、自然法主義を經濟に適用して自由放任主義を唱へはしなかつた、之を爲したのはスミスである。^{註三} 更にスミスと經濟學とを結合せしめたのはハチソンで、スミスが後年グラスゴーに於て爲せる講義の項目は、ハチソンの講義に類似し、彼の學問はハチソンの講義を根本として大成したと云ふも不可なきが如く、^{註四} キャナンがスミスはハチソンの間歇遺傳を受くるものであると云へるは、當を得た説明と云ひ得るのである。^{註四} 唯スミスはハチソンの倫理說には感服しなかつた、利己心に對するハチソンの説明には不満であつたので、此點は之を他から得たのである。

1) Francis W. Hirst: Adam Smith, p. 5.

2) Cannan: Introduction to "Wealth of Nations," pp. XXXV—XLII

註一 Dugald Stewart: *Trait*, p. IXVI. 彼は後年グラスゴー大學の總長の就任を乞はれたとき、大學に送つた手紙の中で、*The abilities and virtues of the never-to-be-forgotten Dr. Hutcheson* と云つて居る。

註二 W. R. Scott: *Introduction to "Wealth of Nations"* (Bohn's Library), 1921. pp. XXI—XXIV. ネットは現にグラスゴー大學のアダム・スミス經濟學講座の教授で、氏の著 *Francis Hutcheson, 1900* は又ハチソンとスミスとの關係を知るに便利である。此に参照したのは昨年富國論がボーン文庫の中に出版されたとき付けた序文である。

註四 Cannan: *Introduction to Smith's Lectures*, pp. XXIV—XXVI. ハチソンが千七百四十六年大學を退くや、之に代はつて道徳哲學の教授となつたのはクレイジー博士 (Dr. Craigie) である。スミスは千七百五十年グラスゴーの論理學の教授となつたが翌五十一年クレイジーは病の爲め暫くスミスに講義を代はつて貰ひ次で氏の逝くやスミスが道徳哲學の教授となつたのでクレイジーを中間に置いて先師ハチソンと相次いで居る。故にキャナンは之を間歇遺傳と呼んだのである。

第二に擧ぐべきものはデヴィット・ヒューム (David Hume, 1711—1776) である。彼等の友情はスミスのグラスゴー在學時代より始まりたるものの如く(註五)、爾來千七百七十六年ヒュームの死に至る迄、交遊頗る密かで、互に著述を批評し合

ふを常とし、スミスは富國論の中に於て屢彼の言を引用し、彼を述ぶるに現代の最も有名なる哲學者にして歴史家 (by far the most illustrious philosopher and historian of the present age) と稱した¹⁾。彼がヒュームより受けた所は、一般の哲學に亘つて頗る廣い様であるが、特に顯著なるものは、經濟學の研究に際して *Human nature* の研究を出發點とすべきこと、及學問の研究に歴史的研究方法を用ふることに暗示を受けたことに在る。更にヒュームは労働が富の産出に重要な所以を力説し、又極力重商主義を攻撃し、自由貿易を主張したのであるが、スミスの自由主義はヒュームに負ふ所多く、而してヒュームに於ては尙重商主義の餘臭を存したが、スミスに至つて始めて餘臭を一洗して、徹底的に自由放任を主張するを得たのである(註六)。

註五 ハリストに依ればハチソンは千七百三十九年ヒュームの *Treatise of Human Nature* の著はるゝやスミスをして其の拔萃を作らしめ之をヒュームに送つた所がヒュームは其禮として一本をスミスに贈つたと云ふことである (Adam Smith, p. 6)

註六 此に云ふヒュームの經濟論は主として *Political Discourse*, 1752 に收められて居る、尙ヒュームの影響に付てはキャナンは之を比較的重要視し (Cannan's *Introduction to W. of*

1) *Wealth of Nations*, vol. II p. 275.

N., pp. XLVI—XLXII)之に反してスコットは之を重要視して居なく (Scott's Introduction to W. of N., pp. XVIII note).

第三にはマンデヴィル (Bernard de Mandeville, 1670—1733) を挙げねばならぬ。彼は元和蘭に生れて後英國に渡り、醫師を業とした。彼が千七百五年始めて出版した蜜蜂物語 (註七) は、其の後版を改むる毎に内容を改めて、千七百五十五年には第九版を出し、道徳上の喧しき論争の中心となつた。彼は當時シャフツベリ等の思想家が人間の性善の方面を力説するに對して忌憚なく露骨に人間性の暗黒面を摘發し、人がすべて不道徳によりて動くものなるを述べて、之等の不徳が却て社會繁榮の原動力にして、若し利他誠實の念のみ普及せば、社會に刺戟なく沈滞し滅亡するの外なしと云つて居る。此の書はバークレーによつて空前の最大悪書 (The wickedest book that ever was) と稱せられ、スミスによつても完膚なく攻撃せられたけれども、スミスはマンデヴィルが不徳と稱するものに利己心を以て之に代へ、利己心によりて爲されたる行爲が結局公衆の幸福と調和すとの見方はマンデヴィルより暗示を受けたものの如く、²⁾ マンデヴィルは更に不徳の結果が、分業を起さしむるものなることを述べて、時計の例を引用し、既に Divided, Division 等の語を使用して居る。¹⁾

註七 千七百五年には The Gumbling Hive: or Knares Turn'd Honest と題する詩であつたのを増訂して千七百十四年に The Fable of the Bees or Private Vices, Public Benefits と題して出版せられたのである。

第四にはトリーパー黨に屬する學者より出でたる自由貿易説を挙げねばならない。トリーパー黨は黨派的の關係より外國王室との親交を希望し、其の爲めに外國殊にフランスとの貿易の圓滑を圖らうとして、此の派に屬する Ditley North, Charles Davenant, Josiah Child, Nicholas Barbon 等は重商主義を攻撃し自由貿易説を唱道した (註八)。然し乍ら、自由放任論は本來の性質上保守的思想と調和すべからざるものであつて、トリーパー黨が之を唱道したのは即ち一時の行き掛りより來れるものに外ならない。スミスの自由放任説は彼等に負ふ所大なるものがあるが (註九)、彼の功績は自由貿易論を夫れ自體の性質上元來調和すべからざるトリーパー黨より奪ひて之をホイッグに與へた所に在る。

1) Wealth of Nations, vol. I. p. 5., note.

1) Theory of Moral Sentiments (Bohn's Library), pp. 458-459.
2) Cannan's Introduction to W. of N., pp. XLIII—XLVI.

註八

W. J. Ashley: The Tory Origin of Free Trade, in 'Surveys, Economic and Historic', 1900.

E. A. Seligman: Introduction to W. of N. (Everyman's Library), p. XIV.

G. P. Gooch: Political Thought from Bacon to Halifax, pp. 237—238.

自由貿易を最初に唱へたものがトリーリーの學者であつたことは恰も十九世紀に於て勞働立法の必要を最先に唱へたのが、デズレリー等のトリーリー黨に屬する Young England Party であつたことと共に、ある社會的主張が一時の往きばかりから本來性質上は反對なるべき黨派によつてなされる事ある好例證である。

註九

スコットは彼等の影響がないことを主張する。(Scott's Introduction, pp. XXIV—XXVI)

第五にはフランスの重農學派を擧げねばならない。スミスが千七百六十四年より六十六年に亘つてフランスに在つて此派の學者たるケネー、チュルゴ一等と親しく交遊し、得る所頗る多かつたことは、若しケネーが千七百七十四年に死ななかつたならば、富國論はケネーに捧げられたであらうと云はるるに徴して明である¹⁾。又彼が重農學派を稱して最も眞理に近き經濟學説と賞讃したるに見て確である²⁾。然し唯デュポンドヌムール(Dupont de Nemours)がスミスの富國論を以てチュルゴの「富の形成と分配に關する考察」(Reflexion sur la formation et distribution des richesses)(千七百六十六年に書かれ、千七百七十年出版)

1) Dugald Stewart: Ibid, p. XIV.

2) Wealth of Nations, vol. II. p. 176.

の剽窃と云へる如きは絶対の誤謬であつて、此事はスミスのグラスゴウの講義が千八百九十六年キャナンによつて公刊せらるるに依つて、其誤なることが明にせられたのである¹⁾。然し乍ら、彼等の學説は二個の方面に於てスミスの思想に多大の影響を齎らした。第一は自然秩序(natural order)を論據とする自由放任の學説である。スミスが渡佛以前に於て既に自由放任を唱へて居たとも、又彼が既にハチソンから自然の秩序に關する思想を傳へられて居たことも前述の通りである。唯自然の秩序の論據の上に立つて自由放任を唱ふるのは、始めて重農學派より受けたものと云ひ得るであらう。第二には分配に關する學説を擧げねばならない。彼がグラスゴウ時代に於て殆ど語ることなく、而して富國論中に問題となれるは分配論であるから、此問題は主として大陸漫遊中に收穫したものと云ふことが出来るであらう²⁾。元來重商主義の學者は消費せられない貨幣と云ふものに注意を集中して居たのであるが、重農學派に至つて農産物に注意するに至つた。而して農産物は毎年收穫せられて毎年消費せられて往くものであるので、此に始めて、富なる觀念を

1) Cannan's Introduction to Smith's Lectures, pp. XXI—XXIV. 尙ほ此の講義と富國論との比較に付ては Cannan's Introduction to W. of N., pp. XVIII—XXX. Cannan's Introduction to Smith's Lectures, pp. XXXV—XXXIX.

2) Cannan's Introduction to W. of N., pp. XXIX—XXXIII. Cannan's Introduction to Smith's Lectures, pp. XXVII—XXXI.

一定の固定した基本に見出さないで、毎年生産せらるゝものに見出す様になつた、之が生産と云ふ概念の明にせられた最初である。而して生産せられるものは毎年繰返されるものであるから、前年の生産物の行方と云ふものが問題になる、此に始めて分配と云ふ概念が思ひ付かれたのである。重農學派が貨弊より農産物に眼を轉じたと云ふことは、此意味に於て經濟思想史の上から頗る重大なる一紀元を劃したものである¹⁾。スミスは彼等に接した時に毎年生産(annual produce)と云ふ觀念と分配と云ふ觀念とに始めて觸れたに相違ないので、歸來富國論第一卷の中に分配に關する説が挿入せられるに至つたのである。以上多くの人からスミスは影響を受けたけれども、重農學派から此の事を得たことは彼の受けた恩惠の中恐らく最大なるものであらうと思ふ。

以上の事を綜合すれば經濟學の研究に彼を導いたのはハチソンで、分配なる新しき問題を開いて呉れたのは重農學派である。又スミスは自然の秩序に關する證をハチソン重農學派より受け、自由貿易に關するものをヒュームと

1) Cannan: A History of the Theories of Production and Distribution, 1917. pp. 35-36.

ト、トリー學者より受け、利己心に關する研究の暗示をマンデヴィルとヒュームより受けた。かくの如く述べ來れば彼が唱へた經濟思想は一々其の淵源を尋ねることが出来ることになる。それではスミスの獨創は果して何所にあるか。彼の經濟學の部分部分を引離せば一々其の出所を求めることが出来るにしても、夫れは各部分に分析した後の事であつて、彼は決して他より暗示を受けた部分を其の儘に使用しては居ない。一度彼の手を通つた各部は先人と異つた場所に各々其の所を得て居る。彼の材料は他より之を求めたにしても、彼は之に化學的作用を施して全く新しき生産物を作り上げた。かくて彼の經濟學は渾然たる一體として、毫も他人の模倣を存して居ないのである¹⁾。

第四節 スミスの經濟學史上に於ける貢獻

それではスミスの經濟學は如何なる點に於て前時代の水準を抜いたのであるか。

近世國家成立の始に於ては朝廷の威容を整ふるが爲めにも、又外國との戦

1) Seligman's Introduction to W. of N., p. XIII.

争の爲めにも費す金額は頗る巨額に上つた。從來は戦争の爲には諸侯の臣下を臨時徴集して、軍に従はしめたのであるが、此の如きは人民の日常生活を中斷して不便尠くないので、漸次一定の常備軍を備ふると、なり加ふるに戦争の方式も中世の時代と違つて、勝敗を決する要因は騎士の勇敢にあるよりも、寧ろ武器の精銳に依ること多く、之等の理由は政府の支出をして夥からしめたのである。此の如くして從來君主の収入として依り來りし御料地や特權よりする収入では到底之を辨ずることが出來ない様になり、人民の租税に訴ふるの外なくなつた。而して人民より租税を徴するが爲めには、人民の富を大ならしむるの外ないので、此に於てか國民を富ましむることの必要は、政府の痛切に感ずる所となり、如何にして國民を富ましむるか、近世國家の政策となつたので所謂マーカンチリズム之れである。即ち經濟政策は租税徴收の目的より出發したもので、經濟學は政府の租税政策より産れたものと云ふのも不可ないのである。

此政策は中世の末期より十八世紀の中葉に至るまで、前後二百五十年間に

亘つたもので、之によつて、中世の自足的都市經濟より國民經濟を完成せしむることを得たのであるが、既に其の政策の出發が政府の財政上の打算より來たものである爲めに、假令後期に於ては手段たる國民の富と云ふことが、夫自體に於て相當獨立した一の目的たるかの如く取扱はれて來たにも拘はらず、其の出發點の色彩は遂に蟬脱することが出來ないで、富は政府の爲めの富であつた。假令國民の富と云ふことが考へられても、その國民とは個人の集團を漠然抽象化した國民で、實際の人民各個の生活自體に觸れては、富なるものは考へられなかつたのである。

固より政府の存在は人民の生活にとつて必要缺くべからざるものである。従つて之を存續せしむるに必要な租税は、結局人民の生活にとつても意味なく使用せられて居るものではない。然し人民の生活が主であつて政府は従である。従たる政府の必要を充たすが爲めに、一切の政策が案出せられるものとすれば、主たる人民の生活と阻隔を來すことないとは保し難いであらう。而して十八世紀に於ける實情がこれであつたのである。此に於てか若

1) Gustav Schmoller : Umriss und Untersuchung zur Verfassungs-Verwaltungswirtschaftsgeschichte besonders des Preussischen Staates im 17. und 18. Jahrhundert, 1898, ss. 1-60.
Karl Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft, 7 Aufl, 1910, ss. 137-140.

し人民の生活に富の必要が重大なることを知り、富むことによつて文化的生活を向上せしめんと考へるものが出たならば富を政府の爲めの富たらずして人民の爲めの富たらしめ、經濟政策より租稅徵收の目的を奇麗に洗ひ去り、經濟學より政治的色彩を削つて之を社會的のものとするの必要がある。之が即ちアダム・スミスの爲さんと欲した所なのである。

彼が如何に人民の生活そのものを重要視したかは、富國論よりの二三の引例を以て見るも、之を知ることが出来るであらう。例へば開卷第一に、

すべての國民の年々の勞働が其の國民の年々消費する生活の必需品と便宜品との一切を原始的に供給する基本である。……

と云ふが如き、又第四卷第八章に於て、¹⁾

消費は一切の生産の唯一の目的である。而して生産者の利益はそれが唯消費者の利益を進むるに必要な限度に於てのみ考慮に置かるべきである。……

と云ふが如き、此の節は重商主義が生産者の利益を圖るに急にして、消費者の利益を無視するを語つたものであるが、又以て彼が消費即ち生活そのものを重要視したかを見ることが出来る。更に第四卷の序言に於て、²⁾

1) Wealth of Nations (Cannan's edition), vol. II. p. 159.

2) „ „, vol. I. p. 395.

政治家又は立法者の學問の一部門としての經濟學は二つの明白なる目的を有する。一は人民に對して豊富なる收入即ち生活を供する更に適切に云へば彼等自らをしてかくの如き收入即ち生活を圖ることを得せしむるを目的とする、二には國家即ち公共團體に對して公共の職務の爲に充分なる收入を供給するものである。經濟學は人民と國王と何れをも富ましめんことを圖るものである。

と云へるが如き明に經濟學をして人民の生活を目的とするものたるを述べたもので、後來の政府の收入策の如きは從位に置かれて了つたのである。

スミスの經濟學に對する以上の如き立場は、普通に自由放任主義なる名稱を以て呼ばれて居るものであるが、之は政府をして經濟現象に干渉せしめずと云ふが如き、單純なる意味に解釋すべきものではなくて、政府なるものを首位に置いて考へて居た經濟學をして、人民の生活を首位に置き政府を從位に置いたものと云ひ得るものである。此の事を達成するには、政府をして干渉の手を退かしむることが必要になるので、此に於て始めて自由放任、政府不干渉の要求が現はれて來たのである。十九世紀の末葉に於て政府の干渉は再

び經濟界に加はつて、所謂團體主義の時代を現出したのであるが、スミス等の個人主義時代を中間に差挿んで、前に重商主義の時代あり、後に團體主義の時代あつて、共に等しく政府が活潑に干渉を試みたに拘はらず、兩者の間に非常なる差異ある所以は、果して何故であらうか。前者に於ては政府の干渉は政府自體の爲であり、後者に於ては政府の干渉は人民の生活そのものの爲めである。而して這般の變化を齎らしめたるものは實に其の中間に於てスミス等の個人主義の時代があつて、人民の生活を首位に置くことを確立した爲めである。一度此の時代を經過した後に於ては、遂に政府の干渉は復活する事はあつても、その目的とする所は重商主義とは全然別個の立場に立つに至つたので、之れ一に個人主義の賜物である。

然らば反問は必ず來るであらう、若し果してスミスの目的が以上の如しとせば、何故に彼は分配論に精力を傾けなかつたか、人民の生活を首位に置くにせよ、その態度は必然に分配論に至らざれば止まないであらうと。之れ實に正に來らざるべからざる反問である、唯彼は此に至らずして止んだ、そは彼と

して止むべからざるものがあつたので、詳しくは後節を参照ありたい。遮莫彼は始めて人民の生活に着眼し、其の生活に富の重要なことを認識した。之迄民衆の改造運動は政治組織の改造のみに没頭して居て、理想の社會はかくの如くして建設せらるゝと信じて居たのに、彼は政治の形式を去りて其の内容に注目し、物的境遇の重要なを見て、此に改造運動に新なる局面を開拓したのである。唯物史觀的傾向は此の如くして經濟學の成立と同時に存在して居たもので、彼が主唱したる自由放任主義は消ゆる時は來ても、物的改造論の影響は其の後永く綿々として盡くる時なく、今愈々其の勢を逞しくしつつあるのである。

之を要するに自由放任論は彼の前に決して其人なかつたのではない。しかし、そはホーマーの前の詩人であり、アガメムノンの前の國王である。¹⁾ スミスの如く社會生活と富とを交渉せしめて、その上に立つて自由主義を唱へたるは彼を以て始めとするのである、之れ彼が第一の功績である。

重商主義の經濟論は國と國との貿易の關門たる海岸を彷徨するに止まり

1) Walter Bagehot: Economic Studies, pp. 97--98

て内地の經濟的活動と全く没交渉たるの觀があつた¹⁾。其の輸出せらるゝ品物は如何にして内地に生産せられ、如何に運搬せられて海港に來るか、輸入せらるゝ品物は何所に向つて何所に消えて往くものであるか、此の如き國內經濟相互の關係は毫も明にせられなかつたのである。重農學派の富の循環に關する説明は始めて複雑なる經濟社會が如何に有機的に密接なる相互の連絡あるかを知らしめた、しかし彼等は農業なる狭い洞窟から經濟界を見て居た爲に、其の眼界は自ら局限せられざるを得ない。スミスに至りては一段の高處に立つて、廣濶なる平原を瞰視するが如く、始めて複雑なる經濟界を一望の裡に捉へたのである。而も彼の特質は單に複雑なる現象相互の干係を明にしたと云ふのみではない、其の混沌の中より全部を動かす動力を見出さんと努めた點にある、一見不統一で複雑に見ゆる經濟活動も唯一つの源泉から出て來るものではないか、此の鍵を擱んだならば其所に統一と秩序とが現はれるのであらう、彼は之を人間性に求め之を利己心²⁾ (personal interest, or the natural effort of every individual to better his own condition.) と斷定した、かくて經濟學は

始めて此に科學となつたのである¹⁾。

此の事の重要はいかに力説するも過大に失するを得ないであらう。丁度之と類似のことが自由の要求に付て考へ得ると思ふ。英國はマグナ、カルタ以來古く自由の歴史を持つて居た、しかし其の自由は英國國民の要求する自由であつて、未だ人類共同の要求する自由ではなかつた。宗教信者が米國に逃れた時に始めて、自由は神より人に與へられたもので、従つて人界の力を以て奪ふ能はざるものなることを主張した。此に至つて始めて、自由は英國々民の自由でなくて、廣く人類共同の要求すべき自由となつたのである。バンクcroft は『英國の千六百八十八年の權利請願は歴史的復舊的なりき』²⁾ ヴァジニアの宣言は直に自然の心より出で、凡べての將來に對し凡べての國民の爲めに、其の指導者たるべき主義を言明したるものなり』と云ふ²⁾。換言すれば神と人間との關係から自由が肯定された時から自由はすべての時代に對しすべての國民に對し、適用せらるる原則となつたので、一言にして云へば自由に普遍妥當性を與へられたのである。恰も之と同じ理由で、スミスの經濟學

1) Gide and Rist: History of Economic Doctrines, pp. 55—56, 85—86.

2) エリネツク氏原著「人權宣言論」(美濃部博士譯)三六頁及四八頁

1) Leslie Stephen: History of English Thought in the Eighteenth Century, vol. II. p. 314.

2) Wealth of Nations, vol. I. p. 324, vol. II. p. 43, vol. II. p. 172.

が人間性の研究に出發したときに、始めて經濟學に普遍妥當性が與へらるるに至つた。此の前まで經濟學とは唯或時代或場所に於て適用せらるゝ、經綸の策たるに過ぎなかつた、しかし人間の性質がかくありと云ふことより出發した經濟學は、人間たる以上いづれの時代にもいづこの場所に於ても適用せられることになるであらう。之れ即ち經濟學に普遍妥當性が與へられたので、普遍妥當性が科學たるに必要な要件なりとせば、此に始めて經濟學は科學たるの體裁を具へたのである。而して人間性の研究は道德哲學者のなしつゝあつた所であるならば、經濟學の建設者が大學の道德哲學の教授たりし所以は、此に始めて首肯せられるのである。

固より人間性の研究はスミスを以て始めとするものではない、遠くホッブス以來英國哲學界に於ける主要なる論争の題目であつた。一方にケンブリッヂ・プラトン派あり、シャフツベリ・ハチソン・バトラーあり、他方にホッブス・ロック・マンデヴィル・ヒューム等あり、利己心か利他心かの問題は、永い間兩派の相争ふ所であつて、スミスが人間性の研究に着手したことは、決して彼が獨創に屬するものではない。而して一方經濟現象の研究は彼以前に於ても多くの學者によつて試みられて居たのである。唯經濟學の研究に際して人間性の研究から出發したのが彼を以て最初とするのである。經濟學者はあつても人間性の研究には注意しない、哲學はあつても經濟學の研究には興味を持たなかつたのに、彼は始めて經濟學と道德哲學との交叉點の上に立つたので、彼によつて經濟學に統一が付く様になつたのである。

ヒュームも此の交叉點に立たないではなかつた、しかし彼は充分に此の地位を活用することなくして了つたので、かくてスミスは其の功績を擅にし得るのである。

スミスの利己心は後にベンサムの心理學的快樂説 (psychological hedonism) によつて更に徹底せしめられ、永く正統派經濟學者の人間觀の根柢をなして、立論の前提となつたのである。十九世紀の後半に於て一方に於て社會心理學者によつて、人間性はより複雑なもので單純に利己心とのみは見られなくなり、他方に於て理想主義者はスミス等の見方を自然科学的なりと排斥して、全

く別の立場に立つて経済學を建設せんとして居る(註一)。しかし何れにしても人間自身の中に複雑なる經濟現象を説明する鎖鑰を求めんとすることは、遂に變ることはないであらう。かくして彼はカントが外を眺めた眼を内に轉ぜしめたと同じく、經濟現象の説明を人間の内心に求めたのであつた、之れ彼が屢々カントと比較せられる所以であらう(註二)。此の點に於て彼の地位は單に個人主義經濟學の中にのみ在るのではなくて、個人主義たるを否とを問はず、すべての學派を超越するものと云ふも不可ない、之れがスミスの第二の功績である。

以上彼が經濟學中より政治色彩を去つたと云ふことと經濟學を科學としたと云ふことと此の二つの功績を挙げたのである。嘗て千七百九十六年獨逸の教授クラウス(C. T. Kraus)は云つた。『世界は未だ嘗て富國論よりも重要な書を知らざりき。新約聖書以來此の書の如く人類に貢獻するもの無かるべし』¹⁾。又バックルは云つた。『此の書は嘗て現はれた著書の中最も重要なものにして、凡そ政治の原則を確立したることに於て、單一人の致したる最も貴重なる貢獻なり』¹⁾。之等の言は稍誇張に失するの嫌あるけれども、一介の學徒のなしたる業績にしてしかく一時期を劃したるもの、古來その類例尠いであらう。

註一 社會心理學者としては例へば Walter Bagelhot の如き最近に於ては William McDougall 及び Graham Wallas の如きを擧ぐることが出来る。

理想主義者としては例へば我國に於て左右田博士の「經濟哲學の諸問題」。

註二 W. Cunningham: "Back to Adam Smith" in "The Rise and Decline of the Free Trade Movement," 1912. 獨逸のオンケン は「アダム・スミスとインマヌエル・カント」なる書物を著して居る。しかしスモールに依れば此の書は此點を論究したるものではない様である。August Oncken: Adam Smith und Immanuel Kant; der Einklang und der Wechselverhältniss ihrer Lehren über Sitte, Staat, und Wirtschaft, 1877.

第五節 スミスの經濟思想の根柢

我等はスミスの經濟思想を検するに當つて、二つの異なる傾向が彼の思想を流れて居たことを發見する、之れ即ち目的觀と機械觀とである。此の二つの

1) H. T. Buckle: History of Civilization in England (Longman's edition), vol. I. p. 214.

1) John Rae: Life of John Smith, 1885, p. 360.

思想を歴史的に辿ることは、冒頭に述べたるが如く本文の企てんとする所ではないが、此には如何に之れがスミスの思想に表はれて居るかを述べたいと思ふ。

人間の物の見方に二種類あつて、一は目的觀で他は機械觀である。前者の見方の内最も洗練せられて、近世の歴史に重大なる影響を與へたるものは、自然秩序 *Natural Order* 自然法 *Law of Nature* に關する思想で、主としてフランスを始めとして歐洲大陸に發達したるものである。尙目的觀の一つとして之と從來の基督教の思想との抱合した自然神學 *Natural theology* をも擧げることが出来るのであらう。而して自然秩序自然法の思想の先づ經濟思想史に表はれたのが重農學派の學說である。

彼等は宇宙に神の豫め定めたる秩序あるを信ずるもので、我等の第一の義務は此の自然秩序の何たるかを知るにありとする。而して之を知るは外界の事實の觀察に依りて爲し得るものに非ず、衷より來る啓示 *revelation* に俟つの外ない。我等の第二の義務は既に自然秩序の何たるかを知らば、我等の生

活を之に適應せしむるにある、人間の干渉の如きは有害無益なりとす。之れ即ち *laissez-faire et laissez-passer* の來る所以である。此の如き見方は彼等の立論の出發點にして又究極の理想である。彼等が因果の研究をなして、然る後に到達したる結論に非ずして、彼等の無批判的に受け入るゝ前提である。彼等が自然の作用せる農業のみを以て生産的産業なりとし、他の産業を不生産的と稱したるが如き、又地租單稅論を唱へたるが如き、皆此の點を考慮に入れて始めて之を理解することを得るのである。然れども彼等と雖全く目的觀のみを以て終始したのではない、醫を以て業としたるケネーが、自然科学的見方を以て研究せる富の循環に關する學說の如きは、彼等の機械觀の最も顯著なるものである。唯彼等の學說の主要なる經緯を爲すものが目的觀たりしことは疑ふの餘地がない。

スミスも亦自然秩序に關する思想をハチソンより受け入れたことは曩に述べた。しかし彼は之を以て直に自由放任の論據とする程幼稚單純ではない。靜に經濟界の今日に至るまでの發達の徑路を研究するに、主要なる經濟

制度の中一として政府の保護干渉によりて今日に至れるものなし。政治家の工夫あるに非ず立法者の政策あるに非ず唯自然 *spontaneity* の勢を以て現狀に到達したるものなるを發見した。¹⁾ 例へば生産に最も重要な要件たる分業の如きも決して人間の知識を以て社會一般の繁榮を來すの目的を以て案出したるものではなくて、唯人間性に含まるゝ或る傾向即ち他人と交易せんとする傾向より自然に必然的に來れる結果に外ならざ (Wealth of Nations, Book I. chap. II. p. 15)²⁾ 又彼の貨幣の如きも物々交易の不便を除くが爲めに機敏なるものが享樂財貨の外に交易財貨として、ある種の財貨を用意したるに始まるもので (Book I. chap. IV. p. 24) 敢て政府が其の使用を奨勵したのではない。政府が貨幣に對して干渉したるは遙に後代に始まつたことで、貨幣の淵源は之を歴代の群集心理が自然になしたる結果に歸しなければならぬ。又彼の資本は各人の蓄財の結果により漸次國內に増加するものであるが、各人は決して自ら國內の資本の増殖を圖るを目的として、貯蓄を爲すに非ずして、各人が自己の生活を改善せんとするの欲求が各人をして貯蓄を爲

1) Gide and Rist: History of Economic Doctrines, pp. 68-93.

さしめ、其結果が自ら求むることなくして國內資本の増加を齎すものである (Book II. chap. III. p. 323-324)。此の如く見去り見來りて、彼は經濟制度が爲政家の人爲に依らずして、自然の發達を爲し來れるものなるを確信するに至つたのである。更に自然の成行を見るに、求むることなくして經濟界に喜ぶべき結果を齎らすものなるを發見した。即ち需要供給の關係が財貨の價格を自然價格に落着かしめ、勞働を必要とする時に貨銀の騰貴が人口の増加を來し、貨幣の過多が自然に國外に流出する原因を爲すが如き、皆敢て政府の干渉を俟たずして好ましき結果が自然に出現せざるはない。此に於て彼が經濟制度の自然 *spontaneity* と好結果 *beneficence* とを同一視するに至りしものにして、而して自然に此の如き結果の出現する理由の何所に在るかを求めて、遂に解釋の鍵を握り得たるものは即ち、自己の境遇を改善せんとする各個人の自然的努力、所謂利己心である。各人の利己心が敢て他人の勸誘を俟たずして、自然に經濟界の繁榮を來す原動力にして、又經濟制度をして今日に至らしめたる中心要素に外ならない。彼が自由放任を主張する論據は此に在る

のである。

以上述ぶるが如く、スミスが自由放任を唱へ樂觀を構ふるは、重農學派と異りて事實の觀察に基き、決して單なる信仰に依るのではない。即ち彼が後者と異なる特質は、經濟學に機械觀を重要視したる點に在る。立論の出發と究極の判斷を、直に主觀的前提に借らずして、客觀性を有する因果の説明に俟ちたるに在る。此に興味あるは重農學派に於いて主として目的觀より成りし經濟思想が彼に於て機械觀を加へたる理由に在る。一應の説明は佛國にデカルトが出て、英國にベトンが出たからと云ひ得るであらう然し更に遡れば要するに佛國人と英國人との國民性の差異に依るものであつて、而してその國民性の差異は英國が比較的早く産業が發達して居つたことと、早くから國を賭する戰爭から免れて居たことが、超自然的思想を割合に免るゝことが出來たのであると云ふことである。¹⁾

然らばスミスの經濟思想を一貫せるものは機械觀のみなるやと云ふに決してさうではない。彼は機械觀と相並んで多量の目的觀を懷きたるもので、

彼の機械觀の上に超然として立論の究極の源泉となりしものは前述せる自然神學である。¹⁾ 彼は一種の *deist* にして、神は人間の幸福を目的として世界を創造したるものなるが故に、結局人間全體の幸福を實現しうべしと樂觀した。彼の書中に、屢々散見する *led by an invisible hand*²⁾ なる句は、即ち彼の信仰を云へるものにして、見えざる神の手が各個人を動かして、結局社會の幸福を圖りつゝあると云ふに外ならない。彼の目的觀はかくの如く學說の全體の上に表はるゝのみならず、原因結果を説明する機械觀の中にも隠見せざるに非ず。即ち因果關係の説明に規範の觀念を交ふるは其一例である。例へば彼の用ふる *natural* なる言は因果の連接上必然的に來るべき *necessary* と云ふ意味の外に彼の理想の爲めに來らざるべからざるとの意味を加ふるものと解釋すべく、又自然の秩序を人爲を以て破壊したる場合に於て、人爲を撤せば直に自然の舊に復すべしとなし、自然の復歸力を信ずるが如く (*Book IV. chap. IX. p. 172*) も亦目的觀の表現と見ることが出来る。更に歴史的材を扱ふに際して、彼が自己の學說に便利なる様に材を取捨したりと稱せらるゝも亦、目的

1) Cliffe Leslie: *Essays in Political and Moral Philosophy*, pp. 26—30.
D. G. Ritchie: *Natural Rights*, 1895, p. 44—45.

2) 例へば *Theory of Moral Sentiments*, pp. 264—265., *Wealth of Nations*, vol. I p. 421.

1) T. Veblen: *Place of Science in Modern Civilization*, pp. 98—113.

觀の然らしむる所と云ふことが出来るであらう。

彼の目的觀は道德情操論に於ては最も強く表はれしが (Part III. chap. V. 及び Part VI. Section II. chap. III.) キャナンの出版したる Lectures に於ては稍弱まりて機械觀的の見方加はり富國論に至りて更に機械觀の勢力を加へたのである。故に彼の傾向は漸次目的觀を去りて、機械觀に傾きつつありしも、尙目的觀が彼の學說を動かす要素たることを忘れてはならない。此の事は彼の利己心なるものの解釋を爲すに最も必要な事である。彼れの利己心の説は後年に於て種々の攻撃を受くるの具に供せられた。然し彼の利己心とは今日我々の考ふるが如きものに非ずして、神が人間の幸福を實現する爲に使用する手段たるにすぎない。人間自身は利己の爲のみに動く意識するも、之を神より云へば相當の抑制と利他心とを加味せるものであるやも圖られない。之れ人の利己心を機械として神が其の意圖を實行するものに外ならぬ (Book IV. chap. II. pp. 419-421) 彼の利己心は彼の目的觀と不可分に考ふべきものである。彼の利己心より目的觀を除きて、利己心を夫自身獨立なる一前提として扱ひたるは、後年の學者の爲したる所である。之を要するにスミスの思想には目的觀と機械觀とが併立して居る。彼以後マルサスに至つて目的觀は餘程影を薄くしたけれども尙未だ其の姿を没するに至らない¹⁾。遂に全く其の姿の消えたのはペンサムの影響を受けたリカルドの時である。而してミルに至つて別の形を帯びた目的觀が再び其の姿を現はして來た。重農學派よりアダム・スミスを経てミルに至る經濟思想史上に於ける目的觀と機械觀との消長は誠に興味ある一研究題目たるを失はない。

第六節 スミスの影響と残したる問題

スミスの富國論の出づるや、忽ち時代の歡迎する所となり、千七百九十九年迄に既に十版を出した。佛國に於ても千七百七十九年より千八百二年迄の間に四種の翻譯がある。獨逸に於ては始めは注意を惹かなかつたのが、十八世紀の末に於て忽ち注意を惹くに至つた。富國論が此の如く國の内外に聲價を博したる所以を考ふるに、第一には其の論旨が時代の渴仰に投じたるに

第一章 アダム・スミスと自由主義經濟學

1) Bonar: Malthus and His Work, pp. 324-336.

2) John Rae: Life of Adam Smith, p. 360.

ある。前述したる如く彼の學説は産業革命の産物である。彼は時代の要求を充さんが爲めに出て、彼の思想は時代の代辯たるの觀があつたのである。第二には其の内容が徒に抽象論に走らず、理論と實際とを巧に調和したる事と、其の文章の巧妙にして人を酔はしむるものありしことを擧ぐべきである。然れども富國論の普及の原因を、此の如く書物の内容のみに置くことは、決して妥當なりと云ふことは出來ない。主要なる原因は之を外界の實際事情に求めなければならぬ。即ち第一に米國の獨立を擧ぐべきである。千七百七十六年恰も富國論の出版されたる年、米國は獨立を宣言した。富國論は殖民地を以て母國の利益の手段に供するの非を力説したりしが、今や米國の獨立は事實を以て、殖民地が母國の犠牲となるを甘んずるものに非るを立證したのである。¹⁾ 第二に米國獨立後と雖も、英國の海外貿易は毫も衰退せざりしを以て、一面に於ては從來の如き殖民政策の無用なる事を感じしめ、之等の事情は學説の内容に千鈞の重みを加へて、時代を動かすの刺戟となつた。第三には當時の政黨界の形勢がスミスの學説を迎ふるに便宜多かりしことを

¹⁾ Cunningham: Growth of British Industry and Commerce, vol. II. pp. 583-589, 597-608.

擧ぐべきである。曩にトリー黨が自由貿易を唱へたる先驅者なることを述べたが、彼等は此の如き行掛によりスミスの思想に好感を有した。貿易のみならず、一般の經濟政策に對しても、彼等は從來ホイッグ黨が商工業を保護するを羨望しつゝあつたので、自由放任は此の點に於て彼等の好感を買ひ、更に地租非單稅論も亦彼等の意を得たるものであつた。而して他方ホイッグ黨は永く政權を握つて居た間に、重商主義を行つて來たのが、米國獨立に依りて一頓挫を來し、政綱を更へて人心を新にするの必要ありしにより、スミスの學説に注意を拂つた。而して漸次研究を重ねるに従ひ、自由放任の主張はホイッグ黨傳來の自由民權の思想と、全く共通の思想なる事を發見した。かくてフランス革命の反動時代に於て、トリー黨が自由放任と別るゝに及び、自由放任の主張は遂にホイッグ黨の手中に歸するに至つたのである(註二)。此の如く黨界の事情は二大政黨をして、何れもスミスの思想に好感を持たしめしこと、亦普及の主要原因であつたのである。

註一 當時いかに世人が神經質なりしかは、Dugald Stewartが自由放任なる言を用ひて

危険視せられたるに見て之を知ることが出来る。

彼の學說の直接の影響としては、千七百七十年商務院が英愛國間の自由貿易に就て調査をした時彼の意見が問はれ、既に千七百八十三年フックス以來議會に於て屢々彼の言が引用せられ、千七百八十五年漁業に關する下院委員は、其の調査報告の中にスミスの言を引用して補助金の廢止を主張し、千七百八十六年ピットは最初の對佛通商條約に調印した。更に千七百九十五年十二月 Whitbread が議會に於て、貨銀公定制度の復活を提議したるとき、ピットは十二月十二日之に答へて有名なる演説を爲し、アダム・スミスの名を引き自由放任の名に於て此の動議に反對した。更に千八百年 Lord North は多年の懸案たりしアイルランド併合を執行した。之れ蓋しスミスの學說の影響と、米國獨立の前例とに鑑みたものである。

以上はスミスの學說が實際界に働きたる顯著なる實例であるが、之れ彼の政策論が時事問題に反響したるもので、必ずしも經濟學の理論が普及したるものと云ふことは出来ない。富國論は學問的の著書としては稍統一と秩序

を缺くの嫌がある。ヒュームは出版當時已にその普及を憂ひたが、若し經濟學を學問として時代に普及せしめんとせば、相當の宣傳者ありて彼の書を註釋し普及するの職能を盡さなければならぬ。此の職能をフランスに於て果したるものはジャン・バプティスト・セイ (Jean Baptiste Say, 1767-1823) にして、英國に於て之を果したるものはスミスの門弟ヅガルト・スチュアートである。スチュアートは千八百年始めて、エディンバラ大學に於て經濟學の講演を爲し、爾來八年間之を繼續した。其の聽講生は數に於て尠かりしも、皆將來を期待せられたる有望の青年で、其の中に Francis Horner, Sydney Smith, Francis Jeffrey, Earl of Lauderdale, Henry Cockburn, Henry Brougham, Macevey Napier, Archibald Alison, James Mill, Thomas Chalmers, Lord Palmerston 等あり。何れも次の時代に於て名を成したる人々で、彼等の努力によりて經濟學は學問としての地位が一般に認めらるゝに至つたのである。³⁾ 更に加ふべきは千七百九十九年富國論は偶然リカルドの手に落ち、彼をして經濟學の研究に向はしめたことである。⁴⁾ スミスが經濟學建設者としての業績は大であるけれども、彼の思想にも一

1) Dugald Stewart: *ibid.*, p. XLVIII.

2) Gide and Rist: *History of Economic Doctrines*, pp. 106-115.

3) Jacob Hollander: *David Ricardo*, pp. 19-20.

4) *ibid.*, pp. 36-37.

定の限度ありて、遂に先人の影響を脱却し能はざる所尠くない。重農學派が自然を以て生産の唯一の要件なりとし、農業のみが生産的事業なりと稱したるは前述した。彼は此の説を翻して、生産の要件を労働に置き(富國論序文の冒頭参照)苟くも労働のある所、農業たると商工業たるとを問はず、生産的たるに於て異る所なしとした。之れ實に竿頭一步を進めたるものなるも、而も彼は遂に重農學派の餘臭を脱する能はずして、労働に生産的 Productive と不生産的 Unproductive との區別を置いたのである。又等しく生産的労働の中にも農業と商工業とを區別して、前者には自然人間と共同すと雖、後者には然らず、前者には後者の生まざる地代なるものを産むが故に、農業が最も勝れたる産業なりと稱したるが如きは、彼が如何に先人の學説を蟬脱せんとしたるかの努力を認むると共に、その雰圍氣を脱する能はざることを知ることが出来る。又彼は企業者即ち資本家なりし當時の事情に制せられて、profit と interest とを明確に區別することを爲さず、吾人の今日解するが如き利潤を認めなかつた。之れ蓋し當時未だ Entrepreneur が産業界に活躍するに至らなかつたからである。

1) W. of N., pp. 343—344.

若し夫れ彼の目的觀と機械觀とに對する評論は暫らく別の機會に譲るとして、彼の最も大きな缺點は彼の研究が分配論に疎なりし一事である。彼の分配論は前述したるが如く、フランスに於て始めて收穫したるもので、彼にとつては多分の洗練を経るの暇がなかつた様である。若し人民の富と云ふ立場を徹底して往つたならば、此にこそ充分の研究を傾けなければならなかつたであらう。しかし彼の分配論は第六章の價格の構成部分に關する説明と、第七章の自然價格と市場價格との説明の後を受けて、第八章以下に述べられてあつて、云はゞ價格の説明として挿入せられたので、生産篇に對する意味に於て説かれた分配論ではない。¹⁾これ思ふに當時は生産の勃興を必要とする時代であつて、未だ分配問題の喧しく論ぜらるゝに至らなかつたからである。生産の増加によつて一般人民の富にして増さば、各個人の分配は之に準ずるものと樂觀したのであらう。此の如く彼は後年云ふが如き分配問題を豫期しなかつたのであるから、學者によつては彼の自由放任論が、果して分配に付ても適用せられるの趣旨なりしか否かを疑ふものさへある位である。²⁾

1) Cannan: Introduction to W. of N. p. XXIX.

„ Introduction to Lectures. p. XXX.

2) Gide and Rist: History of Economic Doctrines, pp. 92—93.

スミスの學說が専ら生産論に偏して分配論に疎なりしと、生産論も亦農業に偏するの傾あるは、一に當時の産業状態に依るもので、彼は僅に産業革命の初期を見たるに止まり、當時の英國は未だ農業國の時代を脱しなかつたからである。學者の思想も亦時代の産物にして時代によつて制限せられる、之れ人間の成長力の限度を語るものである。分配論の研究は彼以後先づマルサスによつて試みられ、次でリカルドによつて大成せられた。²⁾而してマルサス、リカルドの分配論が生産と共に自由放任の思想の下に在つたものを、分配のみは人爲の制度に依るものなるを述べて、始めて分配問題に現代的の扱方をしたのはジョン・ステュアート・ミルである。³⁾スミスは此の如く分配論の研究に力を傾けなかつた、云はゞ最も重大なる現代問題を忽諸に付した譯である。其にも拘はらず、オンケン⁴⁾は云ふ「若しスミスにして十九世紀の末に生れしめば彼はハート・スペンサー¹⁾とならずしてアドルフ・ワグナー¹⁾となりしならん」と。而して彼は幾度か顧みられてスミスに還れと叫ばれ、新時代の新思想に盡きざる感激を與へた、之れ果して何故であらうか。凡そ思想の進歩とは

無意識界に對する意識界の擴張である。而して此の擴張は天才に於ても時代の事情によつて制限せられるものなるは、曩に述べたるが如くである。後人の先人に對する義務は彼の意識界にありしものより推測して、彼の無意識界に潛めるものを呼び來つて現代の問題に觸れしめるに在る。スミスをして現代に在らしめば、ワグナーの如く國家社會主義者となりしならんと云はるゝは、彼の衷に潛めるものがかく考へしめるからである。彼は經濟學其ものの狹隘なる天地に跼踏せず、人生の根本より出發して經濟學に到達したのである。其の立場は高く其考へ方は深い、即ち彼が常に新しき時代に新しき思想を産むべき力を擁した所以である。かくして彼の生涯も亦根本的に考ふる學者の生命が永久たることの好個の事例である。

註 11 W. of N. pp. 343-344.

1) An Essay on the Principle of Population, 1798. Chap. XVI.
 2) Original Preface to the Principles of Political Economy and Taxation, 1817. Letters of Richardo to Malthus. p. 175.
 3) Principles of Political Economy, 1848, (Ashley's edition) pp. 21. 199-201.
 4) Small: Adam Smith and Modern Sociology, p. 31.

第二章 ジェレミー・ベンサムと功利主義經濟學

第一節 緒論

十九世紀英國思想史を如何に區分するかは、學者に依つて見る所を異にする。例へばダイシーは、之を立法の立場よりして三個の時代に分類し、第一をトリリー主義の時代 (Period of Old Toryism) となし、第二を個人主義の時代 (Period of Individualism) とし、第三を團體主義の時代 (Period of Collectivism) となし、居り、ローウェルは政黨消長の立場よりして、第一をトリリー黨の時代とし、第二を自由黨の時代、第三を保守黨の時代となして居る。カザミアンは理性と本能との争闘なりとして、前期を理性の時代となし、後期を本能の時代なりとする。以上其の分類の立場は異なるも、ダイシーの所謂個人主義の時代、ローウェルの所謂自由黨の時代、カザミアンの所謂理性の時代なるものを、支配したるものは果して何人であらうか。吾等は十九世紀英國思想史の一時期を構成した巨大の人物を此に見出すことを得る、之れ即ちジェレミー・ベンサムである(註1)。

彼の性格は本來靜なる思索に耽る隱者に適して、街頭に出でて宣傳をなすに適しない。故に若し彼れ一人が孤立して居つたならば、彼は一新時期を劃すべき巨大の影響を與へたるや否やは疑はれる¹⁾。然し幸にして彼は英國思想史上に、前例なき程の有能の門弟を有して居たのである。之等の門弟は頻繁に彼の邸宅に出入し、彼の一言一句を神の託宣に對するが如き憧憬を以て傾聽し、之を民衆に宣傳するの使命を果したのである。彼等の中には James Mill を始めとして、David Ricardo あり、Thomas Robert Malthus あり、Joseph Hume あり、John Ramsay McCulloch あり、John Stuart Mill, George Grote, John Austin, Charles Austin, Roebuck, Molesworth あり。之等の門弟は所謂 Philosophical Radicals と稱せられたる人々で、當時の社會科學の各方面に、又實際的活動の方面に於て、夫々偉大なる功績を擧げた人々である。彼等は皆ベンサムの熱心なる崇拜者で、レスリー・スチーブンが彼等を以て、マホメットの身邊に集まつて、コイランを編

1) Seth Pringle-Pattison: The Philosophical Radicals, 1907. pp. 18-19.
Leslie Stephen: English Utilitarians, 1900, vol. I. p. 215.

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion in England, 1917. pp. 62-69.
2) A. L. Lowell: Government of England, 1908, vol. I. pp. 101-103.
3) Louis Cazamian: Modern England, pp. 1-17.

みたる門弟に比したるは、決して失當と云ふことは出来ないのである。¹⁾

嘗に以上挙げたる門弟のみが、彼の主張を奉じたのではない。其の名稱の Benthamite と稱せらるゝと否とを問はず、其の主張の骨子に於てベンサム主義を奉じたものを擧ぐるならば、其の範圍廣汎にして枚舉に遑がないであらう。 Brougham, Russel, Macaulay の如き、ホイッグ黨の政治家を擧ぐべく、 Daniel O'Connell の如き愛蘭の煽動家あり。²⁾ Bright, Cobden の如きマンチェスター派あり。更に Sir Robert Peel の如き保守黨政治家あり。 Francis Place の如き労働組合の領袖も亦ベンサム主義を奉じたもので、之によつて労働者に自由なる運動を要求したのである。此の如く擧げ來るならば、當時社會の各方面を擧げて、ベンサムの徒と目するも不可ないのである。⁴⁾ 其の門弟の多數なる、其の時代を動かす影響の巨大なる、恰も千八百三十年に於て歐洲は三人の思想家を有して居た、一は獨逸に於けるヘーゲルで、一は佛蘭西に於けるサン・シモンで、一は英國に於けるジェレミー・ベンサムである(註二)。

彼の業績は政治、經濟、法律、倫理、哲學、教育等の各種の學問に及び、其の門弟の

活躍せる方面も亦頗る廣汎に亘つて居る。此に於て彼の全體を語るとは、殆ど十九世紀前半の英國史を語ることであつて、いま本論の如きの能く爲し得る所ではない。本論の企てんと欲する所は彼と經濟學とは果して如何なる關係を有するか、唯此の一項に就てである。既に彼と經濟學との關係と云ふならば、反問は必ず來るであらう。彼は經濟學者として果して如何なる業績を擧げたものであるかと。彼の經濟學上の著作としては僅に千七百八十七年に「高利辯護論」あり、千七百九十八年に「經濟學綱要」があるのみである。前者に於てはアダム・スミスが自由放任の思想を説けるに拘はらず、利子に就てのみは或程度の干渉を容認したるに反對して、利子に付ても亦自由放任の原則を貫くべきを説いたものである。³⁾ 後者に於てはスミスの自由放任論を唯明白に説けるのみであつて、二者固より經濟學上の著作として、特筆すべき價值あるものではない。スミスの分業論、マルサスの人口論、リカルドの地代論と云ふが如き、經濟學上の新學説は彼によつて一も提出せられて居ないのである。此に於て若し經濟學說史を論ずるものよりせば、彼の名は特に擧ぐるに値せ

1) The Defence of Usury.

2) A Manual of Political Economy.

3) Leslie Stephen: English Utilitarians vol. I. pp. 189-191, 307-308.

J. K. Ingram: A History of Political Economy, 1915, p. 108.

John Rae: Life of Adam Smith, 1885, p. 423.

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. pp. 192-193.

Ernest Albee: History of English Utilitarianism, 1902, p. 175.

2) John Morley: Recollections, 1917, vol. I. p. 247.

3) Graham Wallas: The Life of Francis Place, 1919, pp. 65-66.

4) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 174-184.

以であらう。然し一度眼を轉じて奥深く經濟學説の根柢を流るゝ思想上の基調を窺はんとせば、彼の形影は巨然として前景に現はるゝであらう。如何となれば正統派經濟學の眞諦は、彼を無視して遂に之を解することは出来なからである¹⁾。

然らば彼は正統派經濟學の根本思潮に何を與へたのであらうか。第一に彼によつて説かれたる心理學的快樂説 (Psychological hedonism) は正統派經濟學者の人間性に關する立論の根據となり、個人主義經濟學は今も尙彼の人間觀を脱却しては居ないのである。第二にミスに於て人生の爲の富なりしもの、彼に至つて富の爲の富となり、人間幸福の爲めの經濟學は、彼に至つて富そのものの爲めの學問となつたのである。而して此の事は又一面に於てミス¹⁾の時に注意せられざりし分配論が、彼以後注意せらるゝに至りし一側因を爲して居る。第三に最大多數の最大幸福なる彼の倫理説は、彼以後多くの經濟學者の世に處するに際しての倫理觀を形成し、更に社會制度の善惡正邪を批判する標準として、無批判的に受入れられ、永く彼等の社會觀の根本を爲

1) 例へば Hancy: History of Economic Thought, 1912, p. 233.
Ingram: History of Political Economy, p. 108.
Bonar: Philosophy and Political Economy, 1909, pp. 218-219.
Karl Diehl: Theoretische Nationalökonomie, 1916, ss. 165-169.

したのである。

尙他に多くのものを附加することを得る。しかし以上の如き二三を擧ぐるも、尙彼の思想を樞軸として個人主義の經濟學が一回轉を爲したるを知る事が出来るであらう。經濟學そのものの外形は、彼の前後を通じて異らずとするも、其の根柢と樞軸とは、彼の出現を境界として、明に一時期を劃することを得るのである。十九世紀の末より正統派經濟學は或は社會主義者より、或は理想主義者より、或は社會心理學者より、包圍の攻撃を受けつゝあつた。而も個人主義が單に自由放任の思想を述べしと云ふのみにては、之等の攻撃が何が故に個人主義經濟學に集中したるか、理由を發見することは至難に近いであらう。之が真相は個人主義經濟學とベンサムとの關係を解するに至つて始めて明にせられ得る。かくて個人主義經濟學の總決算は、即ち後の思想の總決算と目するも不當に失することは無いのである。

而も彼の影響は今も舊社會思想に屬したる個人主義にのみ止まるものではない。第一に彼の唱へた最大多數の最大幸福なる目標は、其の當時に於て

は個人主義者が自らの唱ふる自由放任の論據に用ゐたけれども、同一の目標はやがて團體主義(註三)を誘出すべき可能性を包有して居るのである。否十九世紀の初期に於て、既に此の目標の上に立つて、個人主義と正反對の立場に立つ一群の社會主義者を出現せしめたのである。第二に彼の唱へた立法主義は個人主義の凋落せる現今に於て、愈々其の重要な程度を増しつゝある。否彼の唱へた立法的活動そのものを樞軸として、個人主義と團體主義とは隆替を演じたと云ふも不可ないのである。かくて彼と同時代の人々が、後方遙に其の形影を没したる現代に於て、彼の力は依然として現代の底流となりつゝあるのである。

彼が思想史上に刻したる足跡は以上の如く巨大である。之が検討は我等後人に何等かの汲むべき教訓を與へずんば止まぬであらう。彼は如何なる人なりしか、彼を出せし時代は何なりしか、彼の影響は何處より來りしか、之に答へんとするは即ち本文の目的である(註四)。

註一 ベンサムなる發音は學者によりてはベンダムを以て正しとするものがある。

しかし英人は何れも正しとする様である、今暫く自分の慣用に從ふ。

註二 サン・シモンは既に千八百年に死んで居る、しかし彼の勢力は死後 Bazard, Enfantin 等の門弟に依つて俄に擴がつたのである、此には彼の死後なるに拘はらず彼を擧げた。

註三 Collectivism なる言は經濟思想史に於ては普通フェビアン協會の集産主義を指して云ふ。しかしダイシイ教授は此の語を自由放任主義を奉ぜざる一切の思想を指すに用ゐて居る、個人主義に反對するものならば社會主義たると社會政策たることを問はず之を包括し得る點に於て便利であるから、本文に於ては屢々此の語を團體主義と譯して使用することが多い(Dacey: Law and Public Opinion, p. 64 note)。

註四 ベンサムの全集は彼の秘書ボーリングの手によつて千八百三十八年から四十年に亘つて十一巻となつて出版せられて居る(Bentham's Collected Works by Bowring) 又其の編纂に助力をなしたヒル・バートンは全集中の主要なる部分の抜萃を作て居る、之が即ち *Benthamina, or Select Extracts from the Works of Jeremy Bentham, 1843*, by Hill Burton. である。筆者は本文の起草前に遂に之を手に入れることが出来なかつたので、此の二つ何れも目を通して居なす。

筆者の讀んだのは彼の單行本として公刊せられて居る左の如きものである。

"Fragment on Government," edited by F. C. Montague, 1891.

"Bentham's Theory of Legislation," by C. M. Atkinson, 2 vols., 1914.

* An Introduction to the Principles of Morals and Legislation," 1907 (Clarendon Press)

其の他 Selby-Bigge の British Moralists, vol. I, pp. 339-389 にはベンサム の道德及立法原理序論の一部が掲げられてある。
 彼を研究するに必ずしも全集全部を讀破するの必要あるや否やは疑はれる。唯上述の書物の外に筆者の讀むべくして讀み得ざりしものは "Deontology" である。此の書は彼の死後ボーリングが遺稿を整理して作れるもので、ジョン・スチュアール・ミルによつて其の眞偽を疑はれて居るけれども、倫理説を窺ふに一讀の必要がある様である。

彼を論じた一巻の書物としてはレスリースチーブンの「英國功利主義者」第一巻は白眉であらう、著者が功利主義者として永くベンサム、ミル等の系統の中に生活して居た人である丈溢れる様な同情を以て彼を取扱つて居る。モンターギューが前掲「政治斷片論」に長い序文を掲げて居る、之れ亦好個の参考書である。其の他 C. M. Atkinson: Jeremy Bentham, 1905 があるけれども筆者は讀んで居ない。バルグレイブの經濟學辭書中のベンサムはボーナーの筆に成り一讀の値がある。尙彼に觸れた評論の数は枚舉に違がない、本文の各所に之を引用したのも多い。
 獨逸に於ては彼を論じたるものは Robert von Mohl の Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften III, 1858 ss. 595-635 及び Adolf Held's Soziale Geschichte Englands, 1881 中のベンサムに關する項を除いては妙い。佛蘭西に於ては彼の勢力も多い丈彼に關する文献は必ずや

多いであらう、特に Halévy: La Formation du Radicalisme Philosophique の如きは之を讀むことの出来なかつたことを遺憾とする。

第二節 ベンサムの時代

所謂時代なる言には二つの内容を考ふるを得る。一は學者を圍む時代思潮を云ふので、如何なる學者も其の時代に於ける物の見方考方に支配せられざるはない。ベンサムを圍む時代思潮の何たるかに就ては、次に彼の思想を語ると共に、之を説くが故に此には之を述べない。第二に時代とは學者の面に開展せられたる實際の社會事情を云ふことがある。此の場合の時代は思想に對して二つの方面に影響を與ふるもので、一は學者の學說の題材が、主として當時の實際界に於ける緊急問題に制限せらるゝ事で、何が故に其の學者が斯の如き題材を扱ひたるかの消息は、時代の事情を審にして始めて之を明にすることを得るのである。第二には學說の結論は、結局其の時代の實際事情が可能を許す程度に制限せらるゝ事であつて、學者の思索も當時不可能

事と考へらるゝ結論を述ぶるは稀有の例外で、古くは希臘の學者が奴隸制度を認めたるが如き、近くは産業革命當時の學者が勞働問題を忽にしたるが如き其の例である。かくしてベンサムの前前に展開したる實際事情は如何なるものなりしかの研究が必要なのである。

ベンサムの出でたる十八世紀の英國は、一言にして云へば沈滞の時代と云ふことが出来る。其の然る理由を求むるに、次の三點を擧げることが出来るであらう。

- (一) 前世紀に於ては、スチュアート王朝と人民との間に斷えず不和繼續し、遂にクロンウエルの共和政となり、再び王政復古する等多事を極めたので、之れ以上疲勞を重ねるの餘力なく、會々光榮ある革命を以て、民權は一應確立せられ、Toleration Actを以て、宗教上の争も亦落着いたので、之れ以上を求むることを欲せず、暫く平安を得んとするの情切なるものがあつた。
- (二) 國外を見れば何れの國も殆ど立憲政治の見るに足るものなく、全く君主專制の下にあり、殊にフランスに於ては壓制は日に甚しからんとしつゝ、

あつた。此の如き海外の事情に比較して、英人が自由を有する現状は、彼等をして世界に比なき特權なりと感ぜしめ、現状維持に満足せしめたのである。加之、保守的思想の源泉なる法律家は、英國の自由は Common Lawの保持するものにして、現状の變化は自由を失ふ怖あるも、之を加ふるの望はないとなし、法律の固定維持を力説したのである。

- (三) 此の時代は英國の國家的繁榮の時代にして、重商主義の實施によりて和蘭フランスを破り、世界の工場たるの地位を獲得したのみならず、一七〇七年には蘇格蘭と合併して本國の領土を擴張し、世界の殖民地が續々として英國の旗下に集るの時であつたのである。驕れるものは進むことに吝である。彼等が現状を以て満足したるは、固より其の所と云ふべきである。

當時の英人が如何に自國の憲法を誇りとし之に満足したかは、當時の代表的人物の言に依つて之を知ることが出来る。Lord Northは英國憲法は無限の才智の作物にして、開闢以來嘗て存したる最も美しきものなりと云つた。¹⁾

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. p. 19.

更に Sir William Blackstone (1723—1780) が千七百六十五年より六十九年に亘つて著せる *Commentary on the Laws of England* は、全卷を擧げて英法を讚美せるものに外ならな¹⁾。此の法學界の重鎮が、如何に當時の英國をして自己満足に驅りたるかは、測り知るべからざるものがある。ダイシー教授が此の時代を稱して Blackstonian Optimism の時代なりと云へるは云ひ得て巧妙なりとすべきである¹⁾。又 William Paley (1743—1805) の如き冷靜なる學者も亦、口を極めて現行選舉制度を讚美し、更に Oliver Goldsmith (1728—1774) の如き小説家が、時代を謳歌したるは、一層よく一般人の輿論を語るものと云はざるを得ないのである²⁾。

當時の代表的人物が此の如く現状維持を唱へつゝあつた時代の社會制度は、果して讚美に値すべきものたりやと云ふに、決して然らざるを見る。先づ選舉制度を見るに、愛蘭併合前に於ける下院議員の數五百四十八名の内、最大部分は南部西部より選ばれ Birmingham, Manchester の如き新に勃興せる都市には一名の代表者なく、議員の半數は公選の方法を採りたるも、他の半數は全く

1) A. V. Dicey: *Law and Public Opinion*, p. 62.
2) " " pp. 70-77.

買収に依るか、又は勢力家の指名に係るものである。百五十四名の選舉者が三百七名の議員を選び、十五名が四十二名の活殺權を握つて居ると云へば、以て如何に當時の制度が民意を代表するものでなかつたかが分るであらう。更に都市の行政を見るに、之等の地方團體の權力は、少數の商人の手にあつた。彼等は賄賂を收め、町費を私し、腐敗の極を盡してゐた。従つて警察制度の如きも全然不備にして風紀紊亂し盜賊横行し、殆無政府的の狀況に在つたのである。倫敦は千八百一年に人口六十四萬一千人あつた、其の中二萬は浮浪人で、五千の飲食店があり、五萬の淫賣婦があつたと云ふことである。而して僧侶及び貴族は階級の特權を有して、犯罪を爲すも罰則を免るゝことを得るのみならず、公共の官職は朋黨の關係を以て與へられた。之を要するに、十八世紀の英國は自由の名を以て誇られつゝ、最も自由の名に相應しないもので、換言すれば最大多數の最大幸福に副はざること最も甚しかつたのである¹⁾。當時の法律が如何に不合理のものたりしかば、二三の例を以て之を示すことを得る。即ち地主は狩りの獸を保護するが爲に、發條銃又は人笄を使用す

1) Leslie Stephen: *English Utilitarians*, vol. I. pp. 12-18, 99-102.
A. V. Dicey: *Law and Public Opinion*, pp. 115-119.

ることを許された。又重罪犯人の疑を受けたものは全然辯護を許されない。之が爲めに無實の汚名を帯びて死刑に處せられたものが尠くない。更に訴訟の當事者は、互に證據を提出することを許されなかつた。之等の制度の不合理的なるは現今何人も疑ふものない所であるが、當時の法曹界に於ては怪しまることなくして、十九世紀の中葉に至る迄適用せられたのである。更に法律上の擬制に至りては滑稽に類するものがある。民事の原告は必ず國王に對する債務者と看做され、此の債務が被告の不法行爲又は債務不履行の爲に履行するを得ずと云ふ擬制を用ゐたのである。又原告が或る土地に對する返還請求の訴訟を爲さば、原告 John Doe は其の土地に於て、被告 Richard Roe より受けたる不法行爲に對する訴を爲すものとの擬制を用ゐたのである。此の如き無用迂遠なる擬制の使用は、常に法律をして一部法律家のものたらしめ、一般人民に觸れしめざるの嫌があるのみならず、實際的なる日常生活と背馳し、到底敏活なる取引に適せざらしむるのである。¹⁾

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 86-94.

るものであるが、若し之等の不備にして、平常の場合に存するも、尙指彈の材となつたであらう。況んや十八世紀の後半は最も急激なる社會的變動のあつた時で、此の變動の時期に於て依然として舊制度を適用せんとした爲めに舊制度の時代錯誤は一層明に感ぜらるゝに至つたのである。其の社會的變動とは即ち、産業革命の開始である。産業革命は千七百六十年頃より既に始まり千八百二十五年頃に略完成したと云ふ。今此の革命が社會状態に及ぼしたる結果を見るに、次の如きものがある。

(一) 工業の中心地が東部又は南部より、北部又は西北部に移動し、此の地方が富の源泉地となり、同時に急進思想の中心となり、新時代の運動は此の地方より起るに至つた。

(二) 革命は工業を一地方に集中せしむる傾向を作り、田舎人は續々として新工業地に移動し、所謂 rural depopulation の現象を生じ、他方に於ては幾多の大都會を出現せしめた。

(三) 家内工業組織に於て既に獨立性を失へる工業主は工場組織の起るや、一

層資本の支配する所となり、工場賃銀労働者の地位に落ちた。而して中世に於けるが如き雇主と雇人との關係は全く消滅し、而も高價なる機械工場の現はれたことは、彼等をして到底雇主の地位に昇るの希望を斷たしめ、所謂プロレタリアの階級を形成するに至つた。彼等は將來に於て社會改造を爲すべき運命を有する。然しそれには尙半世紀の時を必要とし、今は唯微細なる片影を表はしたるに過ぎないのである。

(四) 革命の結果最も顯著なるはブルジョアが愈々其の勢力を強めたるにある。彼等の多くは商人階級より出でたるも、或は農村の郷士より出で或は手工業者の階級より出でた。社會秩序の變化したる時に於て、徒手空拳を以て巨萬の富を贏ち得たる彼等は、成功の原因を個人の努力に置かんとし、自己の實力によつて運命を開拓したる彼等は、獨立自助を主張せんとし、他人の援助を借らずして立身出世したる彼等は、自由放任を求めんとする。彼等は其の手腕に於て富に於て、當時の上流の階級に毫も劣らざるのみならず、彼等は亦知識の進歩の源泉で、都市に於ける有志家

は擧つて、團結を作り、好んで新思想を研究し、新學問を討論した¹⁾。彼等は現状打破の必要を痛感し、依つて立つべき哲學と政策とを求めて止まなかつたのである。

以上述べたる所によつて、當時の英國が如何に國を擧げて混沌たる狀況に在りしかを知ることが出来る。而して其の混沌の中より求むるものは、新しき道德と新しき哲學であつたのである。かく時代がベンサム思想を求めたことを述べると共に、吾人は更に進んでベンサムの改革が決して荒野に於ける孤客の聲ではなかつたことを語らなければならぬ。蓋し時代の要求は聽かれて、各方面に革新は叫ばれたからである。現状打破は先づ宗教界に起つた。十八世紀の英國教會(Anglican Church)が一片の形式に墮したるは、ルイテル出づる前の羅馬教會に似たるものがあつた。當時の英國が如何に淫靡墮落の狀に在りしかは、Defoe, Swift, Fielding, Smollett等のよく描ける所である。此の時に於て始めは John Wesley, Charles Wesley 等四名のオクスフォード大學の青年の會合に淵源して、やがて偉大なる感化を社會に與へたるものは

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, pp. 57-69.

メソヂスト (Methodists) の勃興である。

彼等は非常なる熱誠を以て福音の傳道に従ひ、好んで露天の下に労働者を集めて説教をしたが、之等の無知なる者をして、人格の權威に感激せしめ、善良なる生活に入るべき決心を爲さしめたる事尠くない。後年の労働運動は彼等の努力の實りたるものと云ふも不可ないのである。彼等の熱誠は次で一般社會を動かし、世を擧げて信仰を求めしめた故に人之を稱して Evangelical Revival と云ふ。其の運動は元來宗教運動であるけれども、其の影響を見れば廣く社會的意義がある。第一に彼等は從來の教會の空虚なる形式に慊らず、各個人の胸奥の生きたる信仰を重んじたのである。即ち彼等は宗教界に個人主義を説いたものに外ならない。個人主義が單に政治經濟上のみの信條に非ずして、あらゆる方面に亘れる當時の時代思想なるは、之を以ても知るところを得るのである。第二に彼等は信仰を思索と瞑想との域に止めずして、社會的活動と結合せしめた。弱き者苦しめる者に對する同情を以て信仰の命ずるものとなした。慈善慰問は勿論純潔なる社會制度の改革運動は彼等の

努力に依りて刺戟を受けたのである。Whitefield, Wilberforce, Clarkson, Zachary, Macaulay, Simeon, Henry Martin, Elizabeth Fry, Hannah More 等の名を一瞥するならば、十八世紀の末より十九世紀 始に亘れる改革運動が、如何に彼等に負ふ所多きかを知ることが出来る。而してベンサム¹⁾の主張する最大多數の最大幸福なる原則は、此の點に於て彼等の爲さんとする所と靈犀相通するものがある。此の二派が相提携して、熱心に運動したものが即ち人道主義に外ならないのである¹⁾。

宗教界に於ける以上の如き改革と共に、政治界も亦漸く改革に動きかけて來た。十八世紀の前半に於ける最も有力なる政治家は Robert Walpole で、彼が政權を獨占したる千七百二十一年より四十二年迄は英國政界の最も腐敗したる時なりと稱せられた。然るに千七百五十六年に至つて、改革を求むる時代の要求は遂に William Pitt を立たしむるに至つたのである。ピットの性格はウォルポールと全然正反對で、純潔にして熱情に富み理想を有する政治家である。故にピットを起たしめたるは即ち時代の要求の既に一變せるを示すも

1) Thomas C. Hall: Social Meaning of Modern Religious Movement in England, 1908, pp. 1-74.
A. B. D. Alexander: Shaping Forces of Modern Religious Thought, 1920, pp. 136-146.

のである。然し彼の功績は外交にあつて、國內制度の改革に存しない。此の點に於て英國急進派の先驅を爲したるものは、ジョン・ウィルクス (John Wilkes, 1727—1797) である。彼は國王の政策を批評し、議會の改革を主張し官憲の壓迫を受くると共に、民衆の熱狂的人氣を負うて居た。“for Wilkes and Liberty”の言は當時如何に彼と自由とが同一視されたるかを示すものである。而して千七百六十九年に於てはトウリック (Horne Tooke) は千六百六十九年の權利宣言を記念する爲の會として、The Society of the Supporters of the Bill of Rights を作り、之等民間に於ける改革の機運は、遂にホイッグ黨の首領フォックス (Charles George Fox, 1749—1806) をして公會の席上に於て議會の改革を叫ばしめ、(一)選舉權を一切の成年男子に與ふること(二)議員の數を地方の人口に正比例せしむること(三)被選舉權者の財産資格を撤すること(四)議員に歳費を給すること(五)毎年議會を開くこと(六)秘密投票を行ふこと等を要求せしめた。之等の要求は更に反對黨の首相たる若きピット (1759—1806) にも提出せられ、多年の積弊たる選舉制度の改革は將に成らんとするの勢を示した²⁾。此の如き機運はフラ

1) Roylance Kent: English Radicals, 1899, pp. 28—100.

2) Carlton J. H. Hayes: A Political and Social History of Modern Europe, 1917, vol. I, pp. 430—440.

ンス革命思想を奉ずる Richard Price, Joseph Priestley, Thomas Paine の如き一群の思想家を生じ、更にフランス革命の報を聞けるとき、フォックスをして議會の壇上に於て革命の讚美を爲さしめたのである(註一)。我がベンサムが處女作を出したる千七百七十六年、彼の名聲を確立せしめたる「道德及立法原理の序論」を出したる千七百八十九年は、實に此の如く社會事情の變化し革新を求むるの時代であつたのである(註二)。

註一 此の機運がフランス革命の無政府的混亂の爲に反動を生じたるは第五節結論に於て述べんとする所である。

註二 今ベンサムの思想を述ぶるに必要なる限度に於て、彼の生立を語るならば、千七百四十八年二月十五日に倫敦に於て生れた。父は富める辯護士である。健康は極端に不良なれども、早熟で三歳にして既にラテン語を學び七歳にしてフェネロンのテレマックスを讀んで、痛く主人公の公共的精神に感激し、彼が最大多數の最大幸福を理想とせんとの志は此に立つたと云ふ¹⁾。千七百六十年年齢十二にしてオックスフォールド大學に入る。アダム・スミスを失望せしめたる此の學校は、又ベンサムを失望せしめた。千七百六十三年法律の實地練習に着手するや、マンズフィールド卿に接し爾來永く憧憬の念止まざりしと云ふ。又時々オックスフォ

1) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 1.

ルドに歸りてブラックストーンの講義を聴く。此の講義は後年氏の著述の基礎となつたもので、學生をして感動せしめたものであつた。しかしベンサムは教室に於て、周囲の學生の筆記に忙しき裡に在つて、何等の筆記を爲さなかつた。人の之を問ふや、彼は答へて余はブラックストーンの説の當否を考ふるに忙しくして、到底之を筆記するの暇なしと。其の求むる所の大なりしは既に少時に於て之を知ることが出来る。

千七百六十六年十八歳にしてマスター・オブ・アーツとなる。彼の父の求むる所はブラックストーンの如き英法の研究者たることにあつた。ブラックストーン以上なることは到底望み難いとして、せめてブラックストーンに次ぐ法律家たらんことを望んでベンサムを鞭撻した。然し *Sons dispose where fathers propose*⁶¹⁾ ベンサムは既存の法律の註釋に興味を失ひ、ロツク、ヒューム等の思想を求めて好んで經驗哲學より教を受けんとした。父は息子の此の狀態を見て一子を失へりと稱して失望に堪へなかつたと云ふ。しかし結果はブラックストーンより以上の立法學者を、此の父親は持つことが出来たのである。ベンサムが父の鞭撻を受けて既存の法律を研究したることは、彼が將來に非常なる便益を與へた、即ち彼は英法批評家として立つ時に彼は英法の expert であつたと云ふことである。攻撃せらるべき既存の制度を充分に理解して居たと云ふことは、ベンサムの改革者としての一つの特色であつたのである。²⁾ 千七百六十八年ブリーストレイの "Essay on Government" 出づる

1) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910, p. 4.
2) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 7.

や彼は之を讀んで其の中に「最大多數の最大幸福」なる句を見出したのである。彼は曰はく「公私の道德に關する私の主義が確立したのは、其の小冊子の其の句からであつた。私が其の句即ち其の言と其の意味とがかくも廣く文明國到る處に普及するに至つた其の句を引出したのは、其の小冊子の其の頁からであつた。之を見出した時に私はアルキメデスが比重の根本原理を發見した時の様に、忘我の境にあつて聲を揚げて叫んだ。數年の後更に熟慮を経て之に幾多の改訂を爲すの必要を見出したるに拘らず、當時に於ては殆ど改訂の如き思ひもよらなかつた¹⁾と。後將來の方針を案ずるに及んで、二つの問が彼れ自身に來た。其の第一は此の世の仕事の中で何が一番重要であるかと云ふことである。「立法」と云ふ答はエルヴェシアスの與へたものであつた。次で第二の問は來た「自分は果して立法の天才を有するや」と。彼は幾度か此の問を繰返し、自己の性格中に發見し得べきあらゆる徴候を捉へて之を尋ねて見た。而して最後に怖れながら而して慄へながら「然りと」の答を自身に與へたと云ふことである。²⁾

千七百七十六年處女作 *Fragment on Government* が匿名で出された、目的はブラックストーンの英法の註釋を反駁するにある。忽ちに視聽を集め、著者は様々に揣摩せられ、バーク、マンズフィールドの如き名士と誤られた。此の書はランズダウン侯と彼とを接近せしめ、此の以後彼は侯の邸に屢々出入し、多く思想家政治家を知るの機會が與へられた。千七百八十五年より八十八年迄彼はロシアに旅行をしたけ

1) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 34.
2) Sir Roland K. Wilson: History of Modern English Law, 1875, p. 136

れども何等の感激を與へられて居ない。唯ロシアに技師をして居た弟より暗示を受けて Panopticon と云ふ一種の監獄の圖案を作ることに着手した。パノプチコンとは或る一所に監視人が立つならば、監獄内のすべての囚徒の一舉一動が解ると云ふ組織の監獄である。此の設計を作るに彼が如何に多くの時と金とを費したかは驚くの外はない。此に彼が尋常哲學者の持たざる、一種技術的の發明の天才があることを知ることが出来るのである。この設計の採用を幾度か政府に求め、遂に議會は之を採用するに決したけれども、國王が之に反對したと云ふので、遂に其の採用は失敗に了つた、時に千八百十一年である。之より以前彼はトリーリ黨に屬して居つて、敢て現存制度に對する反抗者ではなかつたが、此の以後始めて現存秩序の批評家たり反抗者となるに至つたと云ふ。

千七百八十九年十五年間推諷の結晶たる Introduction to the Principles of Morals and Legislation が出て、學者としての名聲此に於て確立した。彼は由來フランス語に堪能で、英語よりも巧に之を綴り原稿の如きもフランス語で書けたものも多いと云ふ。又彼の秘書役たりし瑞西人ヂュモンは彼の書をフランスに紹介したので、早くから彼の名はフランスに於て知られ、千七百九十二年彼はフランス國民議會に於て佛國市民とせられ、其の他名聲海外に於て高い。彼は又幾度か法典の編纂を各國政府に提議し自ら其の起草の任に當らんことを求めた。千八百八年ジェームス・ミルを知つた、此の事は彼の生涯にとつて頗る重要である。ミルは學者としては彼に

劣るも、實際的才能の優れたるものであつて、ミルが多くベンサム崇拜者を率ゐるに及んで、彼の思想は世間に普及するに至つたからである。千八百三十二年選舉法改正案の批准せらるゝ前日即ち六月六日彼は死んだ、彼の長命は幸福であつた、自ら蒔いた種の實るを見て逝くことが出来たのである。彼は他人の苦痛に同情する性格に富み、其の同情は動物にも及んだ。其の逝かんとするや、秘書ボーリングの外すべての人を遠ざけて、人に與ふる苦痛を最小ならしめんとし、死體は學問研究の爲に解剖に附することを命じた、彼の最大多數の最大幸福は決して單なる言ではなく彼の性格に根據を有するのであつた。

第三節 倫理說としての功利主義

第一款 總說

ベンサムの名が必然的に聯想せらるゝものは、功利主義である。彼は此の標語を掲げて、道德及立法の原理としたのである。然らば功利主義とは何であるか。即ち彼に依れば「功利主義」とは或る行爲の影響を蒙る人々の幸福を増減する傾向に依つて、其の行爲を肯定し又は之を否定せんとする原理を云

1) Principle of utility.

ふ。其の批判せんとする行爲は常に個人の行爲たるのみならず、又政府の施設をも包含するものとす。功利とは關係者に對して裨益、便益、快樂、福利、幸福 (benefit, advantage, pleasure, good, happiness 凡そ之等の語はすべて大同小異なり) を發生し、又は損害、苦痛、害惡、不幸 (mischief, pain, evil, unhappiness) を除去すべき傾向を有する事物の性質を云ふ²⁾。又曰はく『或る行爲が公共の幸福を増進する傾向が之を減少する傾向よりも大なるとき、其の行爲は功利主義に適へるものと云ふことを得³⁾』功利主義に適へる行爲は吾等の爲すべき行爲なり、少くとも爲すべからざる行爲に非ずと云ひ得、又それは正し、少くとも邪に非ずと云ひ得るなり。かくの如く解して始めて爲さざるべからず『正邪等の語は意義ありと云ふべく、然らずんば之等の語は無意義なりと云ふべし』⁴⁾。即ち或る行爲が善たるや否やは、其の行爲が出来得る限り多數の人に、出来得る限り苦痛を少くして、快樂を多く與ふるや否やに依つて決せられるので、彼は又別な所で『正しきや誤れるやの尺度となるものは最大多數の最大幸福なり』⁵⁾と云つて居るのである。

2) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, p. 2.
3) " p. 3.
4) " p. 4.
5) Bentham: Fragment on Government, p. 93.

最大多數の最大幸福を如何にして測定すべきやに關して、彼の與へた説明は暫らく後に譲るとして、以上述べたる所が彼の功利主義なるものの根本である。此の説は從來 Benthamism と稱せられたるを、千七百八十一年彼自ら Utilitarianism なる名稱を用ひ、更に千八百二十二年之を廢して、Greatest Happiness or Felicity Principle と改めた。然し之れ唯名稱の變化であつて、其の内容に差異を來したのでないのである(註一)。彼は上に掲げた引用文の中で述ぶるが如く、善惡の批判に際して、此の原理を適用すべきものは、常に個人の行爲のみならず、政府の施設をも包含すと爲して居る。彼自身は『政府の施設なるものは特定の人又は人々の爲したる行爲の一種に外ならず』¹⁾と爲して居るので、此の場合に於て政府の施設と個人の行爲とを、同一範疇に列せしむるは彼として決して不合理ではない。然しながら或る行爲が正しきや否やを批判する倫理説と、或る社會制度が正しきや否やを批判する社會思想とは之を區別することを以て便宜であると思はれる。倫理説は我等にとつて何が爲されざるべからざるか、何が故に爲されざるべからざるかを語るもので、我等は之

1) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation p. 3

によつて爲さるべき行爲の選擇と執るべき心の傾向とを決定することが出来るのである。社會思想とは一定の社會制度の存續と實現とが許さるべきや否やに關する批判を與へるものである。二者は固より全然無關係のものではない。或る社會制度の改廢が必要なりとの宣告が、社會思想によつて下さるゝならば、之が改廢に従ふことは、自ら倫理上の善とせらるゝことが多いであらう。然し倫理説と社會思想とは、其の果すべき使命が同一に非ずして、之によつて批判せらるべき對象たる個人の行爲と社會の制度とが、性質上異なるものであるならば、後に述ぶるが如く倫理説としては容認し難き思想も、社會思想としては存在の理由を有する場合なしとは保し難い。之れ此にはベンスラムの功利主義を分ちて、一を倫理説としての功利主義、一を社會思想としての功利主義としたる所以である。

註一 ジョン・スチュアート・ミルは千八百二十二年功利主義を奉ずる青年の會合を作りにて之を Utilitarian Society と名づけ、之が Utilitarian なる語を用ゐた最初であつて、之は Galt の小説 *Annals of the Parish* から得たと云つて居る。しかし之はミルの誤で夙にベンスラム自身が此の語を用ゐて居たのである (John Stuart Mill: *Autobiography*, pp. 45-46)。

然らば倫理説としての功利主義は如何にして唱へられたのであらうか。

由來何が善たるか惡たるかに關しては、二つの反對せる考方がある。一は之を判斷するものが何人の胸中にも内在するものなるを主張するもので、他は此の如き道德官の内在を否認して、外界に於ける或る状態の實現を善なりとし、其の實現の程度の最少なるものを惡と稱するのである。此の二つの思想は如何なる時代に於ても何等かの形式に於て存在したもので、殊に社會状態が急激に變化して人々の價值判斷が必ずしも從來の傳統に依ること能はざる場合に於て、吾人に内在せる道德官なるものに對する懷疑の念は高まつて、結果説の勢力を強むることが多い。例へばペルシア戦争後に於けるソフィストの思想、希臘滅亡の場合に於けるエピキユリアンの思想の如き、之で、近世思想上に於ける功利主義も亦、十七八世紀に於ける社會事情の激變に伴つて、直覺説道德派に對抗して表はれた一種の倫理觀であるのである。

ベンスラムの出でたる當時に於ては、シャツペリー、ハチソン、バトライ等の謂ゆる *Moralists or moral sense school* なるものあつて、盛に功利主義と正反對の倫

理説を主張した。彼は之等の説を批難して云ふ『正邪の標準に關して今迄述べられたる各種の體系は要するに論者一個の好惡に歸すべし。…何等客觀的標準に訴ふることの義務を避くるが爲めに、又論者の感情意見を讀者に強むんが爲めに案出せらるるもののみ』¹⁾又『moral sense, common sense, understanding, reason, right reason, nature, and nature's law, natural justice, natural equity, good order, truth 等すべて之等の言は畢竟自己の命令に暗黙に服従せしめんと欲する人々の獨斷のみ』²⁾と。即ち彼は從來の倫理説が漠然たる主觀的の獨斷を云ふに止まるを排して、一定の客觀的標準を與へて道德の内容に普遍妥當性を與へんと欲したのである。³⁾

然し所謂功利主義を述べたるものは決して彼を以て最初とするのではなく。遠くロックに始まりデヴィッド・ヒューム、アブラハム・タツカー、ウィリアム・ペーレー等を経て、ベンサムに至る迄連續せる思想家の一系統を爲して居るのである。⁴⁾ 最大多數の最大幸福なる言そのものを用ゐたるものも、ベンサムが最初ではなくて、既にベッカリア (Beccaria) が千七百六十四年に「犯罪と刑

- 1) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, p. 17.
- 2) Ernest Albee: History of English Utilitarianism, p. 179.
- 3) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, 1883, p. 223.
- 4) E. Albee: History of English Utilitarianism, xii-xiii.

罰 (Crimes and Punishments) の中に用ゐる、プリーストリー (Priestley) も亦之を用ゐる、千七百六十八年ベンサムが彼の此の語に觸れて、強く打たれたるは曩に述べたるが如くである。¹⁾ 之を要するに此の説も此の語も敢てベンサムの獨創に屬するものではない、唯功利主義即ちベンサムと聯想せらるゝは、彼が始めて此の説に新しき方法と新しき精神とを注入したるに依るのである。彼の倫理説を詳説するには功利主義の前提たる心理學的快樂説を説き、然る後此の前提の上に立てる自利的快樂説と公衆的快樂説即ち功利主義とに及ぶを便利なりと思ふ。

第二款 心理學的快樂説 (Psychological Hedonism)

ベンサムの功利主義は其の立論の出發點として人間性 (human nature) の研究を以てして居る。人間性の研究は遠くホッブス以來の英國哲學者の傳統である。之より先き中世に於ける自然、人間及び社會に關する考方は皆一種の神學的色彩を帯びて居た。之に對して自然に關する考方に付て、中世の傾

- 1) Leslie Stephen: History of English Thought in the Eighteenth Century, vol. II, pp. 80-128.
Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I, pp. 178-179.
F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 34.

向を蟬脱したのが、文藝復興に伴ふ自然科学の發達である。然るに之等の自然科学者が自ら知らずして自然の研究に際して使用せる研究方法を研究して、之に一の體系を與へて、汎く人間及社會の研究に付て之と同一の研究方法を使用せんとしたのが、即ちベーコン及びデカルトであるが、彼等と同一の傾向を有して、別に自然科学者ガリレオ(Galileo)より直接の影響を受けたものがホッブスである¹⁾。彼は物質、人間及び國家の三者に付て、同一の方法に依つて法則を見出さんと欲し、物理學に於ける法則に似たるものを社會學に付ても之を發見せんと欲し、人間が自己保存の衝動(impulse to self-preservation)によつて動くものなるを述べ、之を第一前提として一切の推論の基礎と爲さんとしたのである。ホッブスが人間性を自己保存の衝動と看破して以來、此の問題は十七八世紀に於ける喧しき論争の題目となり、Whichcote, Cudworth, Wilkins, More, Worthington, John Smith, Nathaniel Culverwel, George Rutt, Edward Fowler, Simon Patrick等の所謂ケンブリッジ・プラトーン派(Cambridge platonists)なるもの立つてホッブスに反抗し、人間性の光明方面を力説したのである。然るに

1) Harold Höffding: History of Modern Philosophy, vol. I. pp. 260-261.

2) Corpus, Homo, Civis.
Matter, Man, State.

更に之に對してロック出で、「幸福を求むることと不幸を避くることを除いては、之より以外吾人は我等の心内に生れながらの實踐的原理を見出す能はず¹⁾」と唱へてホッブスの思想に援助を與ふるや、之に加擔するものにマンドヴィルあり、ヒュームあり、アダム・スミスあり、而して他方之に反對するものに、シャフツベリー、ハチソン、バトラー等あつて利己心か利他心かの問題は、殆當時の思想家の必然に觸れざるべからざる中心題目であつた。
此に興味ある事は人間性を以て利己心なりと見たる人々は、皆自然科学の研究方法を人間性の研究に適用したるものなる事で、彼等は共に吾人の所謂自然主義(naturalism)に屬する人々である。所謂自然主義とは理想主義(idealism)に對する名稱で、人間に對する研究を自然界に對すると同一の方法を以てせんとするものである²⁾。ホッブスが自然界に於けると同一の法則を、人間界に見出さんと欲して、自然の研究方法を人間に適用したるは曩に述べたるが如くである³⁾。ロックが觀念の起源は唯經驗あるのみとなして、本有觀念(innate ideas)の存在を否定したるも、亦同一の研究方法に依るのである。若し

1) Leslie Stephen: History of English Thoughts in the Eighteenth Century, vol. II. pp. 80-81.

2) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, 1904. pp. 17-18.

3) " : History of English Philosophy, 1920. p. 49, 61.

自然界を見ると同一の態度を以て人間を見るならば、此に本有觀念なるもの存在を認むる餘地は無いであらう。否人間に特有なる靈界の存在を否定したればこそ、自然と同一の研究方法を適用することになつたので、其の研究の結果に於て之を否定する前に、既に其の出發に於て本有觀念を否定して居たのである。かくの如くして人間は唯感覺を以て外部の刺戟に對して、機械の如くに反應するものとなつた。而して其の感覺には論理上は利他的の感覺も想像し得る、しかし物理学に於けるが如く、因果の連接 (causality) を飽く迄も辿つて往つて最後に到達する、之れ以上説明し得べからざる感覺を求むるならば、それは利己心に外ならない。如何となれば利己心なるものの存在は、何人も認むる自明の事實で、之が説明を要しない。然るに利他心とは其の存在を認むるとしても、利他心の發動せらるゝ場合は寧ろ稀で、何か之れ以上更に原因となるべきものの説明を必要とするかの如くに感ぜられる。之れ即ち自然主義を奉ずる人々が、因果の連鎖を辿つて利己心に到達して之に満足した所以である。而して更に此に附加すべき理由を擧ぐるならば、彼等以前の

中世的思想に於ては、殊更に人間性を美化しようと努めた爲めに、一般に中世の考方に反抗せる彼等が、人間性を暗黒化することを以て科學的の確實性を實現した様に感じて、満足したのであらう。かくの如くして彼等は人間性を利己的と斷じ、此の衝動によつて支配せらるゝものと見たのである。

我がベンサムが少時思想上の影響を最多く受けたるは、以上述ぶるが如き自然主義に屬するロック、ヒューム、エルヴェシアス等の人々である。¹⁾ エルヴェシアスは嘗て云つた『自然界が運動の法則に支配せらるゝならば、之と等しく道徳界は利益の法則に支配せらるゝ』と。而してベンサムはエルヴェシアスより人間性に關する暗示を受けたもので、彼はエルヴェシアスを賞揚して、彼の道徳界に於けるは、尚ベークソンの自然界に於けるが如しと云つて居る。²⁾ 即ち知る、彼が何をか爲さんと欲するかを。彼は正に『實驗的推理の方法を自然科學より道徳科學に擴張せん』³⁾と試みたのである。而して彼は以上述べたる諸思想家の云はんとせし人間觀を、最も明確に最も簡潔に表現したのである。即ち彼は道徳及立法原理の序論の卷頭第一に云ふ『自然は吾人を二つの主權

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. p. 177.

2) Graham Wallas: Our Social Heritage, 1921, p. 244.

3) " : Human Nature in Politics, 1916, pp. 119-120.

者の支配の下に置きたり。其の二つとは即ち快樂及び苦痛 (Pleasure and pain) に外ならず。吾人が何を爲すべきかを指示するも、將又何を爲さんかを決定するものも唯彼等に在り。一方に於て何が正しきか、何が誤れるかの標準も、又他方に於て何が原因にして何が結果なるかの説明も、共に係りて之等の主權者の王座に在りとす。彼等は吾人の行爲に、言語に、又思考に常に吾人を支配す。吾人が彼等の支配を脱せんとする努力は、畢竟彼等の存在を確認せしむるの用を爲すに過ぎず云々¹⁾。之れ即ち人間が常に自己の快樂を求め、苦痛を避けんとするもので、唯之を目的としてのみ動き、他に人間を動かす目的なるものなしと云ふ。而して之は心理學上の一の法則なりと云ふよりして、此の説を心理學的快樂説と稱するのである。

彼の謂ゆる人は快樂を求め苦痛を避くと云ふは、極めて色々に解せらるゝ言である。ラッシュダールに依れば、此の語は次の三様に解せられると云ふ²⁾。

(一)吾人は常に行爲をなす瞬間に於て、最大の快樂を與ふることを爲すものである。

(二)すべての行爲の動機は將來の快樂である。但し其の將來の快樂とは必ずしも最強のものではない。例へば強くともより遠き快樂よりは、より弱くともより近き快樂を採ることがあり得るからである。

(三)すべての行爲の動機は常に全體に於て最大の快樂を求むることである。更にソーレイ教授は此の語は次の三様に解せられ得ると云ふ¹⁾。

(一)行爲は常に事實として行爲者に最大の平均快樂を齎す進路を採るものである。

(二)行爲は常に行爲者に對して最大の平均快樂を齎すが如く見ゆる(實際然るや否やは別として)進路を採るものである。

(三)行爲者は常に其の時現に最大の快樂か最小の苦痛かを與ふる發動又は抑制をなすものである。

かく多様に解せられるもので、其の何れにも解せられることが心理學的快樂説の眞理たるかの如くに考へられて、人々に受入れられた所以であらう。ベンサムの所謂人間心理の説明は今日に於ては各方面より其の誤謬を指摘

1) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, pp. 25-27.

1) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, pp. 1-2.
2) Hastings Rashdall: The Theory of Good and Evil, 1907, vol. I. p. 8.

せられて居る。即ち第一に我々が自己の快樂に反することを行ふ場合が決して尠くない。又自己の死後の名聲を求むる爲に、或事を爲すと云ふが如きこともあり得る、此の場合に快樂を求めると云ふことでは、之を説明することは出来ない。何となれば彼の所謂快樂とは生存中の快樂を指すのは明で、若し之を快樂中に含ましむるならば、彼の所謂快樂と云ふものは根本から説明を變更しなければならぬ。更に殉教の心と云ふ様なものも、亦之によつて説明することは出来ない。彼れ以後ジェームス・ミルの如きは之等のものを聯想心理を以て利己心と結付て説明しようとしたけれども、或る場合には成功するとしても、凡ての場合に成功するとは云へない。要するに實際事實に反すると云ふことが一の不満足の點である。¹⁾ 第二には吾々の求むるものは快樂そのものではなくて目的は別に在る。其のことを満足せしめたことが、結果に於て吾々に快樂を齎すことにはなるけれども、快樂そのものが即ち欲望の目的となるものではない。即ち餓えたるときに吾々の欲するのは食物であつて快樂ではない。快樂は食物を得て欲望を満足せしめたる結果に於

1) Hastings Rashdall: Theory of Good and Evil, vol. I. pp. 28-29.

て感ぜられたるものなるに過ぎないのである。固より人間は或る事の満足の結果快樂を得たならば、やがて其の事其のもの爲ではなくて快樂の爲に働くこと云ふことは起り得る。¹⁾ しかし此の事は決して吾々の行爲の目的がすべて如何なる場合にも一律に快樂の欲求であると云ふ結論を來すに與るものではない。要するに欲求(desire)の目的が快樂(pleasure)なりとするは所謂前後顛倒語法(hysterion-proteron)に屬するものであると云ふのが、第二の不満の點である。²⁾ 第三に起る批難は若し人間性を以てベンサムの考へるが如きものであるとして、之を高調することは吾等をして氣高き感激を起さしむる所以でないと云ふのである。此の事は若し人間性の事實がベンサムの見るが如きものであるならば、止むを得ない事で、結局問題は事實に合するや否やにあるので第一の不満の點に歸着することになる。之と密接の關係はあるが、別に取扱ひ得る不満は、若し人間を以て快樂苦痛と云ふ衝動で決定せられるものと看するならば、人間性其のものの科學的研究としては兎も角も、吾々の道德的創意(moral initiative)の存在を無視すること、吾等の道德心が之を許さぬ

1) Hastings Rashdall. Theory of Good and Evil, vol. I. pp. 31-36.
2) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, p. 178, 180, 189.
H. Sidgwick: Methods of Ethics, 1913, pp. 45-49.
H. Rashdall: Theory of Good and Evil, p. 8, 15.

であらうと云ふ點にある。此の不満は心理學的快樂説が受くる最も大きな問題で、別に之に説かんと欲する。

假令幾多の不满が今日に於て唱へられるにしても、當時に於てベンサム1)の心理學的快樂説は最も明瞭に人間性を道破したものであつたのである。アダム・スミス亦人間性を以て利己心1)なりと見た一人である。而もスミスは經濟學者として經濟學の古典的書籍の中に於て之を明言したのである。然しスミスは富國論の中に於ても、其の人間觀を詳説して居ないのみならずベンサムの功利主義は社會思想と又倫理説として時代を風靡した結果、其の倫理思想たる功利主義を採るものも採らざるものも、其倫理説の前提たる心理學的快樂説は當時の學者の人間觀の根本をなして、此の上に經濟、法律、政治、倫理等の各方面の社會科學は建設せらるゝに至つたのである。2)曩に述べたるが如くベンサムの影響を受けたる門弟の數は頗多く何れも、各方面の社會科學に貢献したものである。又彼の門弟と稱せられざるものも、亦彼の影響を受けたるものが多い。此に於て彼の人間觀が蔚然として時代思想となりたる

1) Personal interest, or the natural effort of every individual to better his own condition, *Wealth of Nations* (Cannan's Edition), vol. I. p. 324, vol. II. p. 43, p. 172.
本書 30-31頁
2) William McDougall: *Introduction to Social Psychology*, 1921. pp. 4, 10-14.

は事の當然である。法律學に於ては彼自身が法律學者であつたのみならず、オウスタン(Austin)によつて彼の人間觀は輸入せられ、又政治學に於ては彼自身が政治學者であつたのみならず、彼の功利主義に反對するマコーレー1)の如きすら、人間觀に就ては結局彼と同一内容のものを採用し、而してベンサムの倫理説が心理學的快樂説を前提とするものなるは、後に述ぶるが如くである。若し夫れ經濟學に至りては、其の影響特に顯著である。一般に經濟學者が彼の功利主義の影響を受けたと云はるゝは、倫理説としての功利主義を奉じたる事を意味するのでもあるが、其の倫理説と別に引離して、人間觀として心理學的快樂説を採つたと云ふ意味に解するものが出来るのである。即ちリカルドはマルサス宛の書面の中に云ふ「幸福が求めらるべき目的である Happiness is the object to be desired.」4)又ナッサウ・シニオン(Nassau Senior)は「すべての人は最少の犠牲を以て富の増加を欲する」と云ふことを以て其の經濟學の根本前提なりと明言して居る。その他マルサス、ミル、マッコック等に至るまで一々其の痕跡を見出すことを得るのである。5)而して此の人間觀が正統派

1) Graham Wallas: *Our Social Heritage*, p. 126.
2) " : *Human Nature in Politics*, pp. 22-23.
3) James Bonar: *Philosophy and Political Economy*, p. 208.
4) " : *Letters of David Ricardo to T. R. Malthus*, 1887. pp. 138-139.
5) Graham Wallas: *Human Nature in Politics*, pp. 12-13.

經濟學の色調に果して如何なる影響を與へたるかと云ふに、第一に彼等は人間が機敏に自己の快樂を求め苦痛を避くるものであると云ふ前提を採つて居るから、市場が自由競争の状態に在つて最も敏活に錙珠の利が争はれるものであると云ふ解釋となつて現はれて居る。此の前提の上に、彼等の地代説、賃銀説、利潤説其の他の一切の經濟學説が建てられて居るのである(註一)。第二には人間は自ら苦痛を避け快樂を求むるものであると云ふ前提を採るから、政府が恩恵を與へ保護を加ふることを無用であるとする。マルサス、リカルド等が千八百三十四年の貧民法改正に努力して從來の貧民救助法を痛撃したのも、其の他多くの保護的立法に反對したのも、即ち此の前提の表現と見得るのである。固より前述したるが如く彼の人間觀なるものは永い時代の發展の結果であつて、彼を以て突如として出現したものであるのではない。しかし彼が此の内容に最も良き表現を與へて、時代に普及せしめたものであるならば、即ち彼の影響が正統派經濟學の根本を爲すと云ふも過言ではないであらう。否其の影響は實に正統派經濟學者のみならず、之と系統を異にする數學派經

濟學にも、埃太利學派にも及び、リッファマンの最近の大著¹⁾亦其の系統を追はんとしてつゝあるかの如くである。而して今現に我等が學びつゝある經濟原論の中に於ても、人は最少の勞力を以て最大の效果を得んとするものなりと説きて、明にベンサムの人間觀を採用しつゝあるのである。

註一 シニオルが資本を以て抑制 (abstinence) に對する報酬なりと説く中にも、心理學的快樂説が其の根本を爲して居る、又リカルドの勞働を以て價値の源泉なりと説く價値説にも、勞働は苦痛である。而して苦痛は償はるべきものであると云ふ快樂説が潛んで居る。其の他數へ來らば多くの痕跡を發見し得るであらう。

若し社會科學を以て自然科學と等しく、法則を發見するものであるとするならば、社會の根本たる人間を以て、何等かの法則に支配せらるゝものと見ることより、出發するの外無いであらう。人間が其の時の偶然によりて動くものとするか、或は客觀的内容を指示することの出來ない良心と云ふ様なものによつて動くものとするならば、人間性に普遍妥當的の法則を見出すことが出來ない。既に人間性に普遍妥當的の法則を見出すことが出來ないならば、社會科學を以て自然科學と等しきものとすることが出來ない譯である。

1) Robert Liefmann: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 2 Bde. 1917-1919.

5) Graham Wallace: Our Social Heritage, p. 245.

此に於て自然科学に見るが如き確實性を社會科學に與へんと急ぎたる當時の人々が極めて恰好なる人間觀として、ベンサムBenjaminの心理學的快樂説を採用したるは、誠によく首肯し得る所である。¹⁾ 彼等が其の人間觀の是非を判別するの違がなかつたのは、止むを得ない所であらう。然し此の人間觀は見遁すべからざる二つの傾向を有して居る。即ち第一は人間性の如何を觀察するものは人間である。既に主體たる人間が客體たる人間心理を觀察するならば、其の觀察の俎上に來るものは意識せられたる世界のみでなくてはならない。即ちベンサム等に依れば人は凡て快樂を求むると云ふ豫想の目的 (Preconceived end) を以て動くものとなるのである。此には本能・衝動・慣習を認むる餘地が無い。唯反省の世界、意識の世界、明知の世界があるのみである。之れ果して實際の人間生活に合する見方であらうか。然し若し各個人が個人の心理を精査すると云ふ方法を排しない以上は、此の結果の來るは眞に止むを得ないことである。第二には此の人間觀を採ることによつて、普遍妥當性を捉へることは出來たとしても、此の收穫は人間を以て決定せられたる機械とし

¹⁾ 本書 30-33.

たる結果である。若し人間が快樂を求むることを以て決定せられ之より以外に自ら選擇し得る自由がないならば、我等の行爲に責任はなくなり、道德は存在の餘地を有しないこととなるであらう。かくの如きは吾等の道德意識の首肯し得ない所である。故に若し吾等にして科學の欲求を以て全部足りとするならば、即ち止む若し然らずして道德の世界、當爲の世界を忘れることが出來ないならば、此の人間觀と妥協を繼續することは不可能である。而して此の人間觀そのものは、始より人間を自然と同一視して同一の研究方法を採りたる結果、到達したる結論であるならば、此の人間觀の根源たる自然主義的研究方法と袂を別つて、別個の方法を求めざるを得ないことになるのである。

十九世紀の末以來、正統派經濟學は各方面より聯盟攻撃を受けた。若し正統派經濟學の前提が心理學的快樂説に在り、而して此の説が上述の二つの破綻を藏して居ることを知るならば、此の攻撃が奈邊を突いて來るかを豫知することは至難ではないであらう。即ち第一に人間の世界は意識の世界、明知

の世界のみではない。此には意識に上らざる本能衝動、慣習の力が働いて居る。此の事實を無視したるの故を以て心理學的快樂説を攻撃する一派を生じたのである。彼等は個人の心理を人間が精査するならば、快樂説の結論に至らざるを得ない、然し若し社會的に表はれた事實に依つて人間心理を精査するならば、そこには多數人を動かす本能衝動の如き無意識の世界を見出すことが出来るであらうと云ふ。之れ即ち此の攻撃が社會心理學者 (Social psychologist) より來れる所以である¹⁾。かくて彼等は改訂せられたる心理學を以て、社會科學の基礎とせよと求むるのである。

第二には心理學的快樂説の如き結論を來せるは、其の責一に自然主義的研究にある。此の方法は唯自然界の現象に對してのみ適用すべきもので、道德の世界を有する人間に適用すべきものではないとし、經濟學の根本を快樂説より解放し、別の人間に内在せる先驗原理たる價值なる觀念より出發せしめんとするものを生じた。之れ遠くカントの認識論に出發せる理想主義者の主張である²⁾。

同じく正統派經濟學の敵手たるカール・マルクス等の社會主義の攻撃が正統派の主張せる各個の經濟學説に向けられたるに拘はらず、何故に上述の二學派の如く心理學的快樂説に向はなかつたのであらうか。思ふにリカルドは直接間接にベンサムの影響を受けたものであつて、マルクスは或は直接に書物に依り或はウィリアム・タムスンを通じて、リカルドより各種の影響を與へられた。故にマルクスはベンサムより快樂説に就て何かを受けたであらう(註一)。殊にベンサムは各人が自己の快樂を追ふものであるから、従つて治者の階級は治者としての一種の利害を有する。之を彼は *sinister interest* なる語を以て表はして居るが、之があるが爲に政界の改革が容易に行はれないのであると説く¹⁾。マルクスの階級闘争なる觀念は、ベンサムの *sinister interest* なる觀念より暗示を受けたのであらうと想像することは、決して不當ではあるまいと思ふ。假に其の影響がないにしても、マルクスが階級闘争に就て暗示を受けたのが、チャーチスト運動に在ることは確である。而してチャーチスト運動の中にベンサムの思想が働いて居た事も確であるから、何れにしてもマ

2) Heinrich Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 4. Aufl. 1921.
J. S. Mackenzie: Lectures on Humanism, 1907. pp. 82-85, 107-129.

左右田喜一郎氏 經濟哲學の諸問題・經濟法則の論理的性質

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. p. 284

1) William McDougall, Introduction to Social Psychology, p. 6. 11.
Graham Wallas: Great Society, 1917. pp. 37, 95-96, 139.

: Our Social Heritage, p. 173.

高垣寅次郎氏“心理學的經濟學説に關する若干の考察”(商學研究第一卷第一號) 147-150頁

ルクスとベンサムとは一縷の關係が有ると云ひ得るのである。マルクスが功利主義者の一人たるリカルドより、労働價值説の影響を受けたるは何人も云ふ所であるけれども、彼の受けたる功利主義者よりの賜物は、労働價值説のみではない様に思ふ。否、労働價值説そのものも實は其の根柢に心理學的快樂説を有するのである。¹⁾ かくの如く見來るならばマルクスの社會主義と正統派經濟學とは、其の人間觀に於て決して相去るものではない、之れ即ち社會主義より來る正統派經濟學への攻撃が前述の二學派の如く心理學的快樂説に對して來らざりし所以である。之を要するに十九世紀の末以來正統派經濟學は各方面より攻撃を受けた。其の何故に社會心理學者を敵とし、理想主義者を敵とせざるべからざりしか、更に社會主義より來る攻撃が前二者と向ふ所を異にしたる所以は、一に正統派經濟學と心理學的快樂説との關係を解するによつて其の消息を明にし得るのである。

註一 マルクスが影響を受けたるものとして一般にフォイエルバッツを擧げる。しかし此に云つた心理學的快樂説の影響を逸することは出來ない。更にヘーゲルより受けたる影響は更により大なるものがあらう。彼がヘーゲルより辨證法的發展を受けたことは一般に説かれる。然し彼の受けたるは之のみではなく、人間觀に就てもヘーゲルより受けたる所が多い様に思ふ。而して彼がヘーゲルより受けたるものを有すると云ふことが、彼の唯物史觀の解釋に何を提供するか、彼と快樂説のみを有したる正統派經濟學者との間に如何なる差點を來して居るかは興味ある問題である。他日機會を得て讀者の此正を乞ひたいと思ふ。

今ベンサムの心理學的快樂説に對する筆者の意見は暫らく後に譲るとして、唯人間性に關する彼の見方が低いと云ふことに關しては、一言を附加したいと思ふ。譬へ利他心の存在を高調したシャフツベリ、ハチソン、バトラの如き人でさへも、利他心の發動が結局自己の利益なることを説いたのである。¹⁾ 利己心を云ふことは十八世紀英國思想家に共通する傾向で、程度の差異あるとしても、彼等一派のみが批難を受くべきではない。固より彼等の見方に誇張はあつたであらう、然し夫は彼等の面接した思想が、中世の空漠たる人間觀であつたと云ふことを考慮に置くの必要がある。兎もあれベンサムの見方が人間性を惡視したものであることは疑へない。しかし如實に人

間觀に就てもヘーゲルより受けたる所が多い様に思ふ。而して彼がヘーゲルより受けたるものを有すると云ふことが、彼の唯物史觀の解釋に何を提供するか、彼と快樂説のみを有したる正統派經濟學者との間に如何なる差點を來して居るかは興味ある問題である。他日機會を得て讀者の此正を乞ひたいと思ふ。

1) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, pp. 94-96.

1) Thorstein Veblen: The Place of Science in Modern Civilization, 1919, pp. 73, 78, 413, 417-418.
Graham Wallas: Our Social Heritage, p. 247.

生の真相を見んとする努力は、偉大なる理想と伴ひ得ないものではない、大なる人生の皮肉と諷刺とは熱情ある理想家より出で得るのである。¹⁾ スミスの利己心は其の上に超然たる自然神學と不可分たると等しく、²⁾ ベンサムの間觀も亦彼の究局の倫理説がいくばくにあるかを見て、始めて其の真相を明にし得るのである。³⁾ 即ち進んで彼の倫理説を説かなければならない所以である。

第三款 公衆的快樂説

心理學的快樂説を根據として、其の上に何が善たるか、惡たるかに關する二つの倫理説が建てられた、其の一は利己的快樂説 (Egoistic Hedonism) であつて、他は公衆的快樂説 (Universalistic Hedonism) である。彼の功利主義とは即ち公衆的快樂説の別名に外ならぬのである。

利己的快樂説とは自己の最大幸福を圖ることが即ち善であつて、然らざるものが惡であると云ふ。此の説は古代に於てはエピクロス、近代に於てはホッブス等の唱へた所であるが、前述の人間は自己の最大幸福を求むるもので

1) Selby-Bigge : British Moralists, vol. I. xii, xv, xviii.

2) 本書 42-43頁

3) H. S. Maine : Popular Government, 5th edition, 1909, pp. 85-86

あると云ふ心理學的快樂説と、如何なる關係に立つものであらうか。彼等は人間が自己の最大幸福を求むるものであると云ふ心理的事實を認めて、かるが故に自己の最大幸福を求むる行爲が善であるとの結論を導き出さんとするのである。然しながら或る事實の存在を認むると云ふことは、其の事實を是認して之を善なりとする歸結を直に生ずるものではなす。 Sein への Sollen に移るは一段の説明を必要とするのである。更に進んで考へるならば、若し或る事が善なりとし、或る事が爲されざるべからずとすることは、人の行爲に選擇の自由あることを前提としての議論であつて、若し心理學的快樂説の唱ふるが如く、人が或る目的によつて動き、其の目的以外に人が動かされないものであるならば、何が善たるか何が爲されざるべからざるかの議論は、無意義なものと云はなければならぬ。¹⁾ 若し又かくの如き倫理説が容れ得るものとすれば、それは心理學的快樂説の方に誤謬があると云はなければならぬ。斯くの如く二者が互に相容れないものであるに拘はらず、心理學的快樂説の上に利己的快樂説を載せて、一應人が怪しまないのは何故かと云ふに、心理學

1) W. R. Sorley : Ethics of Naturalism, pp. 31-33.

的快樂説に於て人が自己の最大幸福を求むるものであると云ふ場合に於ける最大幸福なる觀念と、利己的快樂説に於ける最大幸福を求むる行爲が善である、と云ふ場合に於ける最大幸福とは、不知不識の間に其の内容を異にしつゝあるからである。之を以て見るも、心理學的快樂説の意義が不明であることを知り得るのである。即ち例へば人が最大幸福を求むるものであると云ふ場合に於ける最大幸福を、其の人の現在最大幸福たるもの、又は最大幸福と見ゆるものと解し、利己的快樂説に於ける最大幸福を、其の人の一生の終局の最大幸福と云ふ意味に解するならば、彼の心理學的快樂説を認めて、其の上に一種の啓蒙的教訓として利己的快樂説を認むることは、論理として許せないものではない。唯然し此の場合にも、若し人が其の現在に於て最大幸福と見ゆるものを追求するのが、人間の動かすべからざる衝動とするならば、それが何故に一生の最大幸福を求むることが出来るのかと云ふ疑問は當然に起つて來るのである。此の解答は遂に與へることは出來ないであらう。思ふに利己的倫理説を説きたい爲めに、之に學説としての確實性を與へるが爲めに、

心理學的快樂説を後から考へたと云ふのが真相であらうと思ふ。兎も角此の種の倫理説が論理上の矛盾を有するに拘はらず、廣く行はれたことを一言して、公衆的快樂説に關する説明に對して、照應の伏線となさうと思ふ。

ベンサムBenhamの倫理説は曩に第一款に於て述べたるが如く、最大多の最大幸福が即ち善であつて、然らざるものが惡であると云ふのである。利己的快樂説が自己の最大幸福を求めよと云ふに反して、最大多數なる言を付して、公衆の幸福を求めよと云ふよりして、公衆的快樂説なる名稱が與へられたのである。彼は何が最大幸福たるか、如何にして之を測定するかに關して詳細なる方法を示して居る。¹⁾即ち之が計量に就ては凡そ七個の條件を考慮するの必要がある。強度、繼續、確否、遠近(intensity, duration, certainty or uncertainty, propinquity or remoteness)の四條件は快苦自體の性質に關するものであるが、更に之に附加して考慮に入れるべきは、第一に快苦の生産力(fecundity)であつて、同様の快苦が將來に於て再び發動する可能性を有するや否やに關するものである。第二には其の純粹性(Purity)で、快苦が互に反對の感覺を伴ふことなきや否や

1) Benham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, pp. 29-32.
2) H. Sidgwick: Outlines of the History of Ethics, 1886, p. 241 note.

の問題である。第三には其の延長性(extent)で、快苦の影響すべき範圍即ち多數なるや否やに在る。以上總計七個の要件を考慮せば、一切の快樂苦痛の分量を決定し得べきもので、其中差引、最大多數の最大幸福を與ふるものが善で、然らざるものが惡なりと云ふものである。今日迄最大多數の最大幸福を以て善惡の標準とすべしと唱へたるものはある、未だ彼の如く正確に快苦の計量方法を述べたるものを見ない。彼の目的は倫理學を科學的になさんとするに在る。科學的に爲さんと欲するならば、何人にも決定せらるべき計算の方法を與へなければならぬ。幸福を分量的に(quantitative)引延ばし、其の計算方法を與へたことが、即ち彼の功利主義に一生面を開いた所以であつて、ベンサムの名が功利主義と同一視せらるゝは亦此の新なる方法に在るのである¹⁾。

此に於て直に問題となるべきは、公衆的快樂説と心理學的快樂説との調和を、如何にするかとの點であらう。曩に述べたる利己的快樂説に於ても、自己の幸福を圖るとが善であるとの倫理説と、心理學的快樂説との接續に成功し

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. pp. 235-236.
James Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912, p. 242.
W. R. Sorley: History of English Philosophy, pp. 224-225.
F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 36.

なかつたのが、今や公衆的快樂説に於て説く所は、最大多數の最大幸福であつて、徹底的の利他博愛の心である。之れ果して人間が自己の快樂を求むる唯一の動機に支配せらるると云ふ人間觀と、如何に調和を齎すのであらうか。之が爲めには彼の制裁に關する説を窺はなければならぬ。彼は快樂苦痛の淵源を四種擧げて、之を自然的、政治的、道德的及宗教的(physical, political, moral or social, religious)と爲して居る。我々が普通に云ふ快樂苦痛なるものは、分析すれば以上四種の出所を求むることが出来るのである。自然的とは何人よりの力に依らずして自然に起るものを云ふので、道德的とは社會の賞讚批難より來るもの、政治的とは政府當局の與ふる賞罰より來るもの、宗教的とは神の賞罰より來るものを云ふので、²⁾而して後の三つの快苦は必ず自然的快苦を通じて表はれて來るのである。而して若し最大多數の最大幸福を吾人が企圖せざる場合に於ては、以上の四つの方面に吾人自身の快樂が減ぜられ苦痛が増加することになる。彼は之を自然的、道德的、政治的及宗教的の制裁(sanc-tion)と稱するのである。即ち若し吾人にして、最大多數の最大幸福を計るこ

1) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, pp. 24-28.
2) H. Sidgwick: Outlines of the History of Ethics, pp. 242-243.

とを爲さざるならば社會の制裁は期せずして自分に集まり、結局私自身の幸福を減ずることになる。又或は政府の法律は此の如きものを罰するの規定を設くるによつて私は處罰を受け、かくて私自身の幸福が減じ、又或は宗教心あるものにとつては、現世に於て或は來世に於て、來るべき神の處罰を怖るゝことにより私の快樂は傷つけられる。斯くて私自身の最大幸福を圖るが爲めには、最大多數の最大幸福を圖らざるを得ないので、此の點に於て心理學的快樂説に云ふ所と、最大多數の最大幸福なる觀念との調和を試みやうと云ふのである。即ち彼は最大多數の最大幸福を計ると云ふ利他博愛の心を各人の利己心に訴へて之を刺戟することによつて其の實現を圖らうと云ふのである。此に於てか彼には制裁なることは頗る重要な意義を有するので、彼が立法を重んずる所以は職として此に在るのである¹⁾。

然しながら、最大多數の最大幸福を圖ることと、各人の快樂とを一致せしむるが爲めには異常に社會的制裁が發達して居るか、宗教心が普及して居るか、或は法律が理想的に完成せられてあることを必要とするであらう。しかし

彼は前二者に就ては多くの期待を有しない。而も彼が畢生の事業たる立法改正を如何に完成するも、彼自身が云ふが如く法律そのものの性質として、凡ての場合に刑罰を課し得るものではない。「罰を課するに理由なき場合」罰を課するも効果なき場合「罰を課するも利益なき場合」罰を課するの必要な場合¹⁾あることを認めざるを得ないであらう。残る所は唯各人の内心に訴へて最大多數の最大幸福を圖れと云ふの外はない、之れ彼が *Private ethics* と稱するものであるが、此に至れば前述の心理學的快樂説との調和を如何にするかとの問題に逢着する。功利主義を捨てるか心理學的快樂説を捨てるか二者其の何れかを選ぶの外は無い。此の調和は自然主義的人間觀と倫理説とが、當然に出會すべき難關で、彼の後繼者たるグロート、ベイン、ジョン・スチュアート・ミル等をして其の説明に苦しませしめ、而して遂にヘンリー・シデウィックをして心理學的快樂説を放擲せしめたる所以である³⁾。

上述する所はベンサムの功利主義が心理學的快樂説との接續に缺陷あるを指摘したものであるが、此の點を暫らく除くとしても、彼の倫理説は幾多の

1) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, pp. 170-177.
 2) " Fragment on Government, p. 235.
 Introduction to the Principles of Morals and Legislation, pp. 309 ff.
 3) H. Sidgwick: Methods of Ethics, XV-XXI.
 E. Albee: History of English Utilitarianism, XVI.

2) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, pp. 30-31, 43-45, 80.

缺點を有する。其の第一は彼の最大多數の最大幸福の測定に付ては、詳細なる方法が與へられて居るにしても、結局實際問題に逢着して、何れの行爲を採るが最大多數の最大幸福たるかは決定が不可能である。漠然として多數の幸福を圖ると云ふ暗示を與ふるにしても、實際の場合に其の測定を遂げることは至難である¹⁾。彼が從來功利主義に對して新機軸を出したる點は、不幸にして實行に効果を奏しないのである。其の第二は彼の倫理説が結局結果説たることである。之と次に述ぶる第三の批難とは彼自身の立場より云へば矛盾は認められないので、心理學的快樂説を前提として建てられたる倫理説として當然の歸結であるけれども、吾々の立場からすれば、尙彼の倫理説の缺點として擧げざるを得ない點である。即ち最大多數の最大幸福が善であるならば、其の動機が何であるとも、其の結果に依つて善たる行爲として是認せられ、偶然の事情が行爲の善惡を支配することゝなる。之れ果して吾人の道徳意識の肯定し得る所たるや、否や疑なきを得ない。其の第三は我等の内に起る問題に對して、何等の指針を提供しないと云ふ事である。我等の求む

1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, pp. 378, 425.
Selby-Bigge: British Moralists, vol. I. xviii.

る道徳は外部に表はるゝ行爲の是非に對する批判のみではない。我等の心の裏に閃めいて忽ちに消えゆく、色々の思ひがある。之等のものに汚れたるもの醜きものとの宣告を與へて、よりよき自己を建設せしめんとする努力は、遂に最大多數の最大幸福説よりは湧き出づる由がない。此の説は吾等が既に或る事を爲すと決定したる後に於て、何が爲さるべきかの標準を與ふる事は出來るとしても、何故に事を爲さざるべからざるか、吾々は何であらねばならぬかに關して吾等に感激を與ふるの力が無い。所謂 *το ποιο* の哲學たり得るも *το δε* の哲學たり得ない。従つて既に *το ποιο* の出發點に置かれたる人、又は *το ποιο* を怪しむことなくして繼續し得る人にとつては、此の説は一つの倫理説たり得るであらう。然し若し其の人にして退いて人生の意味を疑ひ吾等の根本の立場を深刻に突きつめるならば、此の説は不満を感ぜしめずんば置かない。之れ即ち眞劍に事を考ふる人が、一度は功利主義に傾倒しても、遂に之に對して懷疑的態度を採る所以である。彼のジョン・スチュアート・ミルが自叙傳第五章に「内的歴史に於ける危機¹⁾」と題して述ぶる所は、畢竟するに

1) J. S. Mill: Autobiography, 1873, pp. 76-82.

ミルが叙上の功利主義の破綻に出會したものと私は解釋する。而してすべ
て此の病根が心理學的快樂説に在ることを知るならば、シデウイック、ラッシュダ
ール等の人が此の病根を切斷して、別に前提を借り來つて、之と公衆的快樂説
との調和を圖りし所以を解することが出来る、ベンサム以後の功利主義史は
此の點より見て、誠に興味ある好箇の研究題目たるを失はない。¹⁾

功利主義は上述の如き缺點を有するとしても、曩に述べたるが如く、時代は
急激に變化したる時で、人々は何に依つて善惡を批判すべきかに迷つて居た
時である。此の時に於て功利主義は何人にも解し易き内容を與へて、平易な
通俗な倫理説として時代に受入れられたのである。固より其の流行の原因
は後述の社會思想としての功利主義が、受入れられたる結果に伴ふ副産物で
あるが、多くの人の倫理説となつた。而して此の事の最も大きな功績は、功利
主義が、倫理説なるものを通俗化したと云ふことである。彼の倫理説そのも
のはやがて捨てられる時は來る、しかし彼の倫理説が平易に通俗なるの故を
以て、一度倫理説なるものに觸れた人々は、此の以後永く何が善か何が惡かを

¹⁾ E. Albee : History of English Utilitarianism.
W. L. Davidson : Political Thought from Bentham to Mill.
中島力造氏 “英國功利説の研究”

考ふる立場に置かれたので、かくて人は又再び無意義なる外部の傳統に支配
せらるゝことなく、自ら善惡を判別せずんば止まないであらう。¹⁾ 第二には功
利主義は *egoism* の哲學となつて改造運動者の改造熱を鼓吹したことを擧ぐ
べきである。時代は改造を必要とする時であつた、其の時功利主義は *egoism*
の哲學たり得ずとするも *egoism* の哲學として相當の使命を果したのである。
グリーンの適切なる言を借りるならば、其の人自らが始より利己的ならずし
て利己心と利他心との調和に苦しむ必要なかりし人、又は深刻に問題を思索
せざる人にとつては功利説は立派な倫理説として、²⁾ 多くの人に感激の力を湧
かしたに違ひないのである。

之れベンサムの功利主義が時代に與へた影響であるが、然し之よりも大な
る影響は別に在る。此の別方面の影響が經濟思想の運命には、より大なる關
係があるのである。ベンサムの功利主義は心理學的快樂説を其の前提とす
る。而して人間性の實相として、人間が自己の快樂を求むる動機に支配せら
ると云へばとて、それは必ずしも自己の快樂を求むることが善なりとするもの

¹⁾ T. H. Green : Prolegomena to Ethics, pp. 405-406.

²⁾ T. H. Green : Prolegomena to Ethics, pp. 420, 428-429.

でない。然し心理學的快樂説を採つて、*Sein*として人間性をかく見ることは、往々にして *Sollen* としてそれを肯定するものと誤解され易い。之に加ふるにベンサムは最大多数の最大幸福を求むることと、心理學的快樂説との調和に成功しなかつたのであるから、遂に彼は前述せるホッブス等の利己的快樂説を唱ふるものと誤解せらるゝに至り、此く誤解せられた彼の思想が、經濟思想史に色々の影響を齎したのである、即ち第一に自己の快樂を求むるを以て善なりとするより、利己的思想は彼の名に於て普及した。由來利己的思想なるものは之によつて、始めて利己心を鼓吹するものではない。各人に元來内在する利己的傾向に表現を與へ、是認の論據を供するだけで、各人の持たざるものを創造するものではない。しかし利他心を刺戟しなかつたと云ふ點に於て、多くの批難を蒙るに値するであらう。斯くて十九世紀中葉に於て産業界の激變に伴ふ資本家の利己的傾向はすべてベンサムの煽れるものとの攻撃を受くるに至つたのである。第二に擧ぐべきものは唯物的傾向であらう。彼に依れば善なる觀念あつて、然る後に善の満足より來る快樂が來るのでな

く、又善を助長し育成するによつて、快樂が良しとせらるゝのでもなくて、快樂なる觀念あつて然る後善が定まるのである¹⁾。恰も正反對の立場に在る人格主義に於ては、善とは褒むべき行爲 (*Tobenswert*) であつて、快樂又は幸福とは喜ぶべき (*erfreulich*) ものである。之に於ては、價值の淵源は人格にあつて、快樂は之に依つて價值付けられる。然るにベンサムに在つては、快樂が價值の淵源であつて、其の分量によつて價值の大小が定まるのである²⁾。即ち彼が *Poetry* も *poetry* も、唯其の與ふる快樂に差あるのみと斷ずる所以である。此の事は吾々の價值觀念を根本的に顛覆するものであつて、若し此の如き立場を取らば、吾々の人格其のもの構成に直接與る文藝とか宗教とかは、第一義的の價值を與へられないので、一片の快樂として取扱はるゝことゝなるのである。之が心理學的快樂説に對する認識論上の反對の外に、別にウェアズワース、コーリッヂ等の詩人文士、ニーマン、ブセイ等の所謂オクスフォード運動の宗教家が、ベンサム主義に反感を抱いた所以である。而してカーライル、ラスキン等の理想主義者が極端にベンサム一派を攻撃したる原因も亦此に在る。

1) T. H. Green : Prolegomena to Ethics, p. 164.
W. R. Sorley : Ethics of Naturalism, p. 28.
2) 阿部次郎氏 “倫理學の根本問題” 90-118頁

若しベンサム2)の公衆的快樂説が正當に受入れられたならば、其の倫理説としての缺陷は指摘されやうとも、カーライル、ラスキンのあの如き痛罵を受くべき理由は無いのである。之れ一に公衆的快樂説が利己的快樂説に墮落した結果、惹起した反對である。

以上二つの傾向即ち利己的たることと、唯物的たることと、此の二つが經濟學に對して如何なる結果を齎したか。第一に擧ぐべきことは經濟學が富の爲の富の學問となつて、人生の爲の富の學問でなくなつたと云ふことである。此の事は經濟學其の物の内容に變更を來すものではない。何の爲の富であらうとも、富の研究を目的とする經濟學に變更はない、唯經濟學に對する人の心事に變化が起つたのである。快樂が善であるならば、快樂を與ふるもの即ち富は、夫れ自體に於て善であつて、或る事に役立つことによつて善たる榮譽を贏ち得るのではない。アダム・スミス1)に於ては富は人生の爲めの富であつて、經濟學は人生の爲めの經濟學であつた。然るにベンサム以後に於て富は富そのものの爲であり、經濟學は唯富そのものの爲めに富を研究する學問と

1) 本書 12-13頁

なつたのである。而して若し富が人生の爲の富であるならば、人生の爲に必要とする富には相當の限度がある、然るに富の爲の富たるに及んで、富に對する欲求は無制限となり無限を追つて富を追求することとなる。¹⁾資本家の飽くなき貪慾は之に依つて説明することも爲し得ないではない。又國としては財貨の生産に最高の重要を置き、人生そのものの生活を營み得ない幾多の勞働者を捨て、顧みざりしも、一に富そのものに至高の價値を置いたからであらう。第二に擧ぐべきことは價格の研究が重要を帯びて來たと云ふことである。求めらるゝものは、財貨そのものが人生に及ぼす、實質的の功用ではなくて快樂である。従つて如何に財貨の分量を多くするかと云ふことよりも、如何に財貨の價格の高を大きくするかより重要である。之れ即ちベンサム以後に於て經濟學が、福利經濟學より價格經濟學に變化せりと稱せらるゝ所以である。²⁾而してアダム・スミスの時に於て生産の研究が主要部を占めたるに反し、今や各人の快樂を増すべき各人の收益、即ち分配の研究が主要なる問題となつたのである。スミスに於ても分配は論ぜられないではない。

1) J. Bonar: Philosophy and Political Economy, p. 219.

2) F. A. Fetter: Price Economics versus Welfare Economics, American Economic Review, sep., 1920.

然しそは生産篇の中の價格現象を説明する爲の一課程として辿られたに過ぎない。¹⁾ 然るに今や生産は論ぜられる、しかしそは分配問題を論ずる爲の前提として挙げられるに至る。經濟學の内容に大差はないとしても、何處に重點を置くかに大差を生じたのである。²⁾ 例へばリカルドが「經濟原論」の序文に於て、分配を規定する法則を發見せんとしたるが如き、³⁾ 又千八百二十年十月十日付のマルサス宛の書面に於て、同じく分配研究の必要を力説せるが如き、⁴⁾ 一々其の痕跡を見出すことを得る。之等は固より實際事情の切迫に促されたるに因るも、亦以てベンサムの上の思想上の影響を無視するを得ないであらう。彼の功利主義が其後の經濟學者に及ぼした影響は頗る顯著である。Mal- thus, Ricardo, James Mill, John Ramsay McCulloch, John Stuart Mill, Jevons, Sidgwick, Cairnes 等幾多の名を擧ぐるを得るであらう。⁵⁾ 之等の人々に及ぼした功利主義とは、後述の社會思想としての功利主義を意味する場合もあるが、倫理説としての功利主義を意味することもある。彼等は此の倫理説から改造の哲學を汲んだのである。殊に彼の影響が經濟學に入るに最も與つたのは、リカル

1) 本書 49-51頁
2) T. Veblen: The Place of Science in Modern Civilization pp. 130-147.
3) Original Preface to the Principles of Political Economy and Taxation, 1817.
4) Letters of Ricardo to Malthus, p. 175.
5) J. Bonar: Philosophy and Political Economy, p. 218.

ドを通じてである。リカルドは英國經濟學者中に於て、異例と目すべき程に經濟學以外の教養に乏しかつた。そこで千八百七年彼がジェームス・ミルと知るや、ミルは經濟學に就てはリカルドの門弟であつたが、一般の哲學的思想に就ては最も多くリカルドを啓發したのである。而してミルはベンサムの最も忠實なる門弟であつて、ミルを通じて、リカルドはベンサムを知り、¹⁾ 親しく教を受くるに至つたのである。故にリカルドの思想を作つたものは直接間接に來れるベンサム主義である。ベンサム嘗て云ふ。ミルはリカルドの精神的父にして、余はミルの精神的父なるを以て、余はリカルドの精神的祖父なりと。以て其の關係を知ることが出来る。かくして經濟學史上には傍系的地位にあるベンサムは、リカルドを通じて直系の潮流に對して、以上述べたるが如き一大回轉を與へたのである。²⁾

今ベンサムの倫理説を終はるに臨んで、最後に述べたい事は功利主義の思想史上に於ける意義である。第一に興味あるは功利主義が善惡の批判を、各人各自に與へたと云ふことである。最大多數の最大幸福たるか否かを批判

5) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. II. pp. 25-37.
1) Alexander Bain: James Mill, 1882. p. 74.
2) J. Bonar and J. Hollander: Letters of Ricardo to Hutches Trower, 1899. p. 1.
4) Karl Diehl: Die Theoretische Nationalökonomie, ss. 165-169.
Haney: History of Economic Thought, pp. 233-235.

して、行動せよと教へたことは、始めて道徳を各人の自覺に訴へた事になる。之れ以前に於て善惡を決定するものは、輿論か國家か神かであつて、各人の内心は之に與らなかつた。直覺説は内心に批判を求めたものではあるが、事實に於て傳統の批判を根據付けたに過ぎなかつた。簡言すれば功利主義は始めて external なりし善惡の批判を、internal に置いたのである。固より置かれた人間の内部が利己的なものであつて、よいか否かは、今後の改訂を要すべき問題である。改造は此の個人我の外に人間の内部に普遍的な我を見出すことにある。しかし改造せらるべき途上に問題を置いたと云ふことは、功利主義の一つの意義である。之と關係ある事であるが第二に興味あることは、功利主義が利己主義と利他主義、個人主義と團體主義との過渡的思想を表現することである。功利主義は公共の福利を圖れと命ずる嚴肅高貴なる道徳である。グリーンはベンサムとカントとを比較して居るが、誠に功利主義は利他的思想を説くに外ならないのである。唯利他心の發露を、利己心に訴へたと云ふ所に問題がある。團體を説きつゝ、個人に訴へたと云ふ所に、不滿

2) Ingram: History of Political Economy, p. 108.
Bonar: Philosophy and Political Economy, p. 218.
Hollander: David Ricardo, 1910, p. 131.
Toynbee: Industrial Revolution, pp. 3-4.
Sorley: History of English Philosophy, p. 234

があると共に亦妙味が存する。一脚は利他と團體に置き、一脚は利己と個人に置かれて居る。新なる世界を仰望しつつ、古き世界を脱することの出來ない過渡期は此によく表はれて居る。我等はスミス、ベンサム、ミル、コムト、ヘーゲルと飛石を傳はるときに、個人と團體との説明が漸次幾回轉するを發見するのである。ベンサムの認識論の立場に於ては、團體なるものは唯集合の擬制であるとするの外なく、各人は利己心を有するのみと判ずるの外は無いであらう。往くべき途は個人の中に團體を發見し、團體の爲めなることと個人の爲めなることが、二にして一なることを示すに在る。新時代の新思想は此の一路を通じて展開せられるであらう。

第四節 社會思想としての功利主義

倫理説としての功利主義が、上述の如き多くの缺點を有すると云ふことは、必ずしも社會思想としての功利主義が、同様に非難に値するものなりとの論結を來たすものではない。社會制度が善なるか惡なるかの批判を、最大多數

1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, pp. 246-247
2) Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, p. 3.

の最大幸福に置かんとする思想は、個人の行爲の善惡を律する場合と引離して、存在の理由を有するものである。蓋し倫理説としての功利主義が受けた一つの非難は、それが結果説で動機を無視すると云ふ點であつた。倫理説として當つて居る此の批難は、必ずしも社會思想には當らない。個人の行爲に付て重きを置かるべきは、其行爲の効果ではなくて、行爲と人格との關係である。之れ動機を重要視する所以である。然るに元來社會制度なるものは社會に在る各人に對して、人格の發展に必要な環境を提供するの使命を有するものであつて、社會制度の善惡は此の効果如何に在る。而して此の使命なるものは既に制度として存立する以上、制度を案出し創設した個人の動機から蟬脱して、客觀的の效果性を有するのである。例へばデモクラシーなる制度は、之を始めて唱へた人の動機が、利己的であつたか否かに拘はらず、既に制度として存立する以上には、出發の動機から離れて、制度としての使命を果し得るのである。殘る所は制度として、其の擧ぐる効果が充分か否かを檢すればよい、此に批判の標準が適用されるのである。之が倫理説として受けた結

果説たりとの非難が社會思想としての功利主義に當らない所以である。¹⁾ 倫理説としての功利主義が第二に受くる非難は、それが唯物的なりと云ふ點である。即ち第一義たる人格發展の爲の條件に過ぎざる第二義の快樂幸福を以て、第一義とすることに對する批難である。個人の行爲を律する倫理説は、此の二者の區別を高調するに力を注ぐは當然であるが、此の批難は必ずしも社會思想に對しては當らない。社會制度の使命は元來が善を實現する爲に必要な條件を具備するに在る。制度自體が始よりして第二義的の使命を有するものであるから、之が善惡は其の使命を果せるか否かに係るので、其の批判の標準に第二義たる幸福なる觀念を用ふるは必ずしも不當なりとすることは出来ない。倫理説としての功利主義が第三に有する缺點は、最大多數の最大幸福なるか否かの計量が困難なりと云ふことにある。此の點も社會制度に就ては、何等か既に輿論の批評が發表されて居るか、又は古來の歴史上の實例等よりして、略或る制度が果して最大多數の最大幸福に合するや否やを測定することはさまで困難ではない。之を要するに功利主義は倫理説と

1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, pp. 435-436

しては幾多の非難を受けたるに拘はらず社會思想としては必ずしも之と運命を共にするものではない。¹⁾ 社會思想としては倫理説と引離して別個の存在を保ち得る。實際の歴史に於ても、功利主義は社會改造思想として顯著なる貢献を爲したのである。之れ吾人が此に社會思想として別に功利主義を説く所以である。

此に注意すべきはベンサムは果して社會思想としてか、倫理説としてか、何れに先に功利主義を思ひ付いたのであるかと云ふ問題である。最大多数の最大幸福なる言が、始めて用ゐられたのは、千七百六十四年のベッカリアの「犯罪と刑罰なる書物」の中であつて、次で千七百六十八年ブリストレーが「政府論」(Essay on Government)中に用ゐたのである。而して之等の場合は何れも社會制度の批判として、最大多数の最大幸福なる言が用ゐられたので(註一)ベンサムは之等の人よりして之を受けたのである。又彼の生立より云ふも彼は始より法律家として育てられ、法律學者として研究し、立法の改革者たることが彼の畢生の目的であつた、而して彼が公刊した最初の著書は社會制度として

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 136-145.

の政府を論じたものであつて、彼が功利主義を始めて述べたのも、亦其の處女作たる Fragment on Government の序文に於てであり、而も法律批判の標準として之を用ゐたのである。¹⁾ 之等の事實よりして之を判ずれば彼は先づ社會思想として功利主義を用ゐ、次で倫理説としても亦之を擴張使用するに至つたので、彼の本意は社會思想として之を適用するにあつたのであらうと思ふ。²⁾

註一 ベッカリアが其の書の序文に云ふ所は次の如し。³⁾

If we look into history, we shall find that laws which are or ought to be conventions between men in a state of freedom have been for the most part the work of the passions of a few or the consequences of fortuitous or temporary necessity; not dictated by a cool examiner of human nature, who knew how to collect in one point the actions of a multitude and had this only end in view, the greatest happiness of the greatest number.

ベンサムが最大多数の最大幸福なる目標を掲げて、社會制度を批判した時の社會はどうであつたか。曩に述べたるが如く、唯沈滞と保守とに満ちて居た。或る社會制度は唯それが永い間行はれて來たと云ふを以て、人々の尊敬を繋いで居た。制度は傳統と慣習との故を以て辯護されて來たのである。例へば當時の憲法に對してウィリアム・ペーレーは云ふ「英國の憲法は臨時の必

1) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, pp. 93-94
 2) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, p. 405
 F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 22, 33
 Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. pp. 236-237
 A. V. Dicey: Law and Public Opinion, p. 137

要に應じて成長したるものにして、夫々の時代に於ける様々な政策の下に、又各種の黨派の争の結果生れたるものなり。故にそは一定の計畫の下に、一時に全部を建築したる建物に非ずして、時代時代の所有者の趣味便利に應じて、修繕増を爲したるものとす。故に外觀の見物人には優美と釣合とを感ぜしめざらんも、内に住めるものには此の上なき便利よき住宅なり¹⁾と。かくの如き言によつて讚美されて來た此の建物の中に、多くの人は讚美の言に痲痺して住居を營んで居た。幾多の法律家は所謂此の舊き建物を研究するに、孜孜として倦まなかつた。彼等は此の法學の原理を學び、其の規定の解釋を會得し、時代より時代に傳はれる學說を記憶するに、唯及ばざらんことを努めて居たのである。一人として此の法律そのものが、一の社會制度として果して人間生活の實際に對して有意義のものたるか否かに、疑を懐くものはなかつた。換言すれば世を舉げて制度の中に没頭して居た。立ち止まつて其の歩める方向を思索し、目を舉げて制度の是非を論ずるものはなかつた²⁾。彼の出でたるは此の時である。或る制度が是認せらるゝが爲めには、それが現在生

3) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 27.

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 135-136.

2) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910. p. 14.

くる最大多数の最大幸福に合するものでなければならぬ。此の目標を提げて見返した時に、多くの制度は銳利なる名刀に會へるが如く、觸るゝもの忽ち切られざるはなかつた。今迄傳統と慣習とによつて繋がれて來た一切の制度は、すべて俎上に上されて批判せられねばならなかつたのである¹⁾。固より當時現存制度に反對せるものは、ベンサム一派のみではなかつた、別に自然法を論據とするフランス革命の思想家がある。彼等は人が生れながらにして、自由にして平等なりと云ひ、生命財産に對して不可侵の權利を有すと説く。當時の社會制度に對して改造を唱へたることに於て、ベンサムは毫も彼等と異なるものではない。唯彼は曩に述べたるが如く、自然法なる觀念が空疎な抽象的なものたることに強い反感を懷いて居た²⁾。人が生れながらにして、自由平等に對する權利があると云ふけれども、權利は唯實定法 (positive law) の存在を俟つて、始めて發生するもので、法律なき所に權利の發生する筈なしと喝破し、アメリカ、フランス革命の人權宣言を以て形而上學的作物なりと云ひ、其の根柢の思想を評して、混亂と不合理のごつた返し (a hodge-podge of

1) James Bonar: Philosophy and Political Economy, p. 218.

Seth Pringle-Pattison: Philosophical Radicals, p. 45.

2) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. pp. 289-293.

A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 171-172.

Graham Wallas: Great Society, pp. 94-95.

confusion and absurdity) と痛罵した¹⁾。彼が革命思想家たる Richard Price, Thomas Paine, Horne Tooke, William Godwin, William Cobbett, Sir Francis Burdett 等と異なる所は、其の立論の方法が形而上學的に非ずして、科學的たることに在る。彼等が外より社會制度を眺めたるに反して、彼が制度の中に在つて而して制度の外に出でたるの差異に在る。此の點がベンサムの社會改革者としての特長であつたのである。

註二 フランス革命の人権宣言に關する論評は彼の千七百九十一年に著せる "Archical Fallacies" に表はれて居る。

然らば彼が最大多數の最大幸福なる目標を掲げて肉薄した時に、當時の社會制度は如何なる影響を受けたか。元來最大多數なる觀念は分量を出来る丈多くしやうとする其の努力の中に、自ら當然の歸結として、各人は一人として算すべきで、何人も一人以上として算すべからずとの原則 (everybody to count for one, nobody for more than one) を含んで居る²⁾。即ち言を換ふれば各人は平等なりと云ふことに外ならないのである。ベンサム自身は言語の上に文字に於て、極力フランス革命思想家の liberty, equality の觀念を攻撃した

3 Bentham: Theory of Legislation, vol. I. pp. 107-113

4) Roynance Kent: English Radicals, p. 184.

るに拘はらず、其の精神に於ては畢竟人間平等説を鼓吹したもので、最大多數の最大幸福なる言は、其の前段の「最大多數」なる觀念に重心點が置かれ、²⁾此の鋭刃によつて當時の社會制度は寸斷せられたのである。蓋し前述したるが如く當時は平民に對する貴族、商工業主に對する地主、奴隸に對する主人、舊教信者に對する新教信者、非選舉權者に對する選舉權者等あらゆる形に於て、專制獨占と不平等とに満ちて居たのである。此の時に於て、言語としていかにも穩健に聞える最大多數の最大幸福なる標語は、其の懷に鋭刃を藏して、獨占不平等と戦端を交へたのである。

註三 此の語は始めてジョン・スチュアート・ミルの功利主義論の中に現はれて居る (Utilitarianism, New Universal Library, p. 117)。ミルは之をベンサムの言と云ふが、ベンサムの書物の中には之に相當する意味は見えるけれども、其の儘の言は見當らないと云ふことである (Bonar: Philosophy and Political Economy, p. 234 note)

道德の進歩なるものは吾人が隣人に對して盡すべき善の内容の進歩よりも、誰が隣人たるかの觀念に進歩が認められる³⁾。吾人の隣人は古來徐々として擴張せられて來たのである。昔は一部の人の間に善を行へば之を以て足

1) G. B. Shaw: Fabian Essays in Socialism, 1887, p. 40.
James Bonar: Philosophy and Political Economy, pp. 234-235.
W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, pp. 73-78.

2) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, pp. 400-402, 428.

3) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, p. 240.

れりとした、奴隷に對し異邦人に對しては、善を爲すべき義務は認められなかつた。然るに今や全世界の人間は其の人間たることに於て、皮膚の黄白を論ぜず文字の縦横を問はずして、等しく善の行はるべき範圍の内に算せられる。斯くの如き道德適用範圍の擴張は、古來或はストイックの哲學者により、或は羅馬法律家の手により、或は基督教布教師の手によつて、漸次實現せられ、¹⁾當時に於てはフランス革命思想家の自由平等説によつて強調せられたのである。然しやがてフランス革命思想に反動が來たとき(次節參照)、ベンサムの標語は平等を説かずして、而して自ら平等を實現し、人類進歩に偉大なる貢獻を爲したのである。功利主義が特權階級より嫌厭と迫害とを受けたるは之が爲めであると云ふ²⁾。斯くてベンサムは人格なる觀念を説かざりしに拘はらず、期せずして、人が夫れ自體目的として見らるべく、決して手段として見らるべからざるを示して、人格の威嚴を知らしむるに與つたのである。グリーンが彼の爲したる所を以てカントの斷言命令に擬したるは、誠に首肯すべき至言たるを失はない³⁾。

John MacCunn: Six Radical Thinkers, pp. 20-22.
 1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics: p. 242.
 2) " " pp. 246-247.
 3) " " pp. 247-253.

以上の如く彼が平等を説いたと云ふならば、反問は直ちに踵を接して來るであらう。彼は果して平等を説いたならば、私有財産制度を如何に觀察したか。之に就ては彼の「立法論」を繙かなければならない。彼は云ふ「立法者は其の目的として團體の幸福を求めざるべからず、此の幸福とは何たるかを更に究むれば、吾人は四個の從屬的の目的を擧ぐべし、生計、餘裕、平等、安全(subsistence, abundance, equality, security)、即ち之れなり」と。之等のすべての點に於て幸福の享有が完全なればなる程、社會的の幸福の總量は愈々大となるのである。生計無くば幸福なきは説明を要しない。生計は立つても多少の餘裕がないならば同じく幸福は得られないであらう。此の二者に就ては、敢て叙説を必要としない。彼は進んで平等を論じて「富の一定量に對しては之に相應する幸福の一定量が伴ふ、(一)不平等の富を所有する二人の人に就て、より多くの富を所有するものは、亦より多くの幸福を享有する、(三)より多く富める人の幸福は必ずしも超過せる富の分量に正比例しない、(四)富を所有する二人の人の富の不釣合が大なれば大なる程、幸福の分量の不釣合は小さくなる、(五)二人の

1) Benham: Theory of Legislation, p. 123.
 William Graham: English Political Philosophy from Hobbes to Maine, 1889, pp. 215-229.

人の富の分量が平等に接近すればする程、二人の幸福の總量は之に従つて大きくなる¹⁾。之れ彼が平等に就て論ずる所である。此の言を聽くものは後年學者の説く所謂限界功用の學說なるものが、既に漠然ながらベンサムに依つて述べられたることを知ることを得るであらう^{註四}。而して更に進んでは社會政策の實行が、此の説の保持者によつて唱導せらるゝを期待するであらう。然しそはベンサムの採つた路ではなかつた。

彼は更に進んで安全を論ずるに及んで、「此の尊き恩典―最もよく文明を表象する―は一に法律によつて作らるるものなり、若し法律なくば安全なく、故に餘裕なく、生計の保證すらなし、而して此の如き事情に於ては若し平等ありとするも、そは唯貧窮の平等あるのみ²⁾」と。而して所謂安全とは現在に於て他より物を奪はることなき状態を云ふのみならず、將來に於てもかくの如きあるなしと云ふ事の保證をも云ふのである。若し平等を高調して之が實現を圖らんとすれば、當然に既に持てる者より、之を奪ふか、或は將來に於て得べき希望を有する者より、之を奪はなければならぬ。此に於て平等と安全とは

1) Bentham: Theory of Legislation, pp. 134-135.
2) Bentham: Theory of Legislation, p. 142.

相容れない結果に陥り、二者何れを重ざるかの取捨を定めなければならぬ。彼は云ふ「若し安全と平等とが相衝突するならば、一瞬の躊躇もあるべからず、平等は道を譲らざるべからず。安全は人生の基礎なり、生計も餘裕も幸福もすべては之に依る¹⁾」と。又「若し財産の平等を圖るとの明白なる目的を以て、私有財産権が侵害さるゝが如きことあらば、其の齎す害悪は到底回復し難きものあるべし。何等の安全あるべからず、勤勉あるべからず、餘裕あるべからず。社會は再び原始時代の野蠻状態に戻るの外なし²⁾」と。以て如何に彼が安全の保證を重要視するかを知ることが出来るであらう。安全の前に富の平等の如きは、何等の權威を持つことが出来ないのである。然し彼は云ふ「此の二つの衝突を和解するものが無いではない、そは即ち死の時である、人の死んだとき其の相續に何等かの制限を加ふることによつて、富の平等の實現に近づくことが出来るであらう³⁾」と。

ベンサムが最大多数の最大幸福なる標語を提げ、進んで「平等」に關して以上述ぶるが如き細論を試みたるに拘はらず、遂に「安全」なるより、重要な幸福の

1) Bentham: Theory of Legislation, p. 158.
2) " "
3) Bentham: Theory of Legislation, p. 161.

前に停止して一步を進むことが出来なかつたのは何故であらうか。一は時代が未だ混亂の時に所謂安全すら確保されない時である爲に、之に全精力を傾注するに急にして、平等を圖るの違がなかつたのであらう。又一には當時産業革命進行の途上に在つて、富が一所に集中することが生産の勃興に必要なりしと云ふ當面の事情に制限された爲であつた。兎も角も此の論は彼の思想に一縷保守的色彩を帯びしめ¹⁾、彼をして保守派の恐怖を薄くするに與つたと云ふことである。かくて彼も亦所謂機會の平等を説きて、境遇の平等に及ばざりし²⁾革命思想家と類を同じくしたのであるが、其の此に至れるは一に彼の最大多數の最大幸福なる標語の解釋にあつたので、當時に於てはかくすることが、最大多數の最大幸福に合した所以であつた。マツカインが彼をして急進派たらしめし³⁾も之にして、彼をして保守派たらしめし³⁾も亦最大多數の最大幸福なりと云ひたるは、よく此の間の消息を道破せる名言である。

註四

ヒュームも亦既に之に類似した言を述べて居る。

It must be confessed that, wherever we depart from this equality, we rob the poor of more satisfaction than we

add to the rich; and that the slight gratification of a frivolous vanity in one individual frequently costs more than bread to many families, and even provinces (An Inquiry concerning the Principles of Morals, sect. iii., part ii)

彼の最大多數の最大幸福なる言の説明は以上述ぶるが如しとして、此の社會思想は當時の社會思想家がよつて立つべき社會哲學として、多數のものに受入れられたのである。カール・ディールはリカルドに就て、リカルドは經濟學以外の教養に乏しかつた爲に、經濟政策の究極の理想が何たるかに付ては、ベンサム¹⁾の社會觀に頼らざるを得なかつた。而して彼は無批判的に之を受入れたと云ふ¹⁾。豈啻にリカルドのみならんや、此の後の經濟學者は永く此の社會觀に支配せられ、此の語は社會制度批判の標準として權威を有したのである。

彼が此の標語を以て批判した第一のものは法律であつた。曩に述べたるが如く(第二節註二参照)、彼の志は始よりして法律の研究にあつた。彼の畢生の目的は法律の改革に在つたので、法律の改革が先づあつて、然る後に其の改革の標語として最大多數の最大幸福を採用したと云ふも不可ないのである。彼

1) Karl Diehl: Theoretische Nationalökonomie, s. 165.

1) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 31.

2) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 41.

3) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 31.

の批判が此の方面に向つたのは當然の徑路と云はなければならぬ。當時の法律が如何に時代の要求に背反したるかは既に述べた。ベンサムはペーリー等が此の憲法を讚美しつつありし時、具に英法を研究し、遂に此の建物が嘗に外界の見物人に快感を與へざるのみならず、内部に住めるものに不快と不幸とを與ふる源泉たることを看破し、之を改革するの急務なるを感じたのである¹⁾。然し法律の改革に着眼したと云ふことは、必ずしも彼が獨創に屬するものではない。彼に採るべきは其の改革の方法に在るのである。

蓋し當時の英法は議會に於て制定せらるゝもの極めて尠く、多くは特定の事件に對して裁判官の爲したる判決が、即ち法律として將來を拘束したので、所謂 judge-made law にして enacted law ではなかつたのである。此に於てか若し裁判官に其人あつて、司法官の解釋權を活用し、法規の解釋をしてよく時代の要求に副はしめたならば、法律の改革は此の方面よりも成し遂げられたのである。之を企てたものが即ち Lord Mansfield (1705-1793) である。彼は二十四年間英國司法の長官の地位に在つて、最善の努力を盡して法律をして民意に

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 126-127.

副はしめんとした。然れども彼の出づることは二世紀遅れて居た。ベンサムは人民と交渉尠き裁判官の手中に、法律の改革を置くことを以て有害なりとし、之を彼等の手より奪ひて立法議會に渡し、民意を代表する代議士をして法律の改革を爲さしめんとした。又從來の判例法は動もすれば、法律をして法曹家の獨占物たらしめ、一般人民の生活より隔離せしめたので、彼は法典を編纂して、人民に法律を平易に理解せしめんとした。之れ即ち彼の Codification に對する主張である。之を要するに、彼は當時の法律をして、最大多數の最大幸福の趣旨に合せしめんとし、其の改革の方法を judge-made law に依らずして、parliamentary law に依らんとしたのである。方法を議會に求めたるは彼の着想の凡ならざるを語るものである。彼は法律改革の爲に、此の方法を案じたのであらう。しかしかくて議會に重要を置いた彼の意見は今も尙實行せられて居る。彼以前に於て政府の主要なる職能は決して立法ではなかつた。ウイリアム・ピットの光榮ある治世に於ても、法律の制定せられたるものは一もあるなしと云ふ。而も今日立法議會の立法は國家の主要なる職能であつて、

彼によつて獎勵られた立法議會は、單に彼の求むる法律の改正を爲したるのみならず、主要なる役割を將來の政治に演ぜんとし、彼によりて獎勵られた立法の事業は將來に於てあらゆる方面に其の手を伸したのである。¹⁾

然し彼が如何に法律改革の必要を絶叫し、立法議會をして改革を爲さしめんとするも、改革は容易に行はるべくもない。彼は其の原因を探究して、政府及議會に在る人々が自己の利益に執着しつゝあつて、最大多數の最大幸福を圖ることは自己の利益に反するが故なることを發見した。此に於て彼の研究は法律の改正よりして一轉して、政治組織の研究に向つたのである。²⁾ 彼は普通選舉、毎年議會の開會、秘密投票、選舉區整理等を主張し、更に進んでは、上院を廢止して一院制を布かんとし、君主制を排して共和制を理想的なりとした。³⁾ 彼の選舉法改正論は近代デモクラシー運動の中心思想となつたものであるが、彼の此の方面の主張は千八百三十二年の選舉法改正に於て先づ實現せられ、後千八百六十七年、千八百八十五年に及んで略々完成せられた。彼の政治論は興味ある問題であるけれども、今は唯以上のことを述べるに止めるであらう。

らう。

最大多數の最大幸福より來る次の主張は即ち自由放任論 (laissez-faire principle) である。彼は云ふ『すべて政府なるものは夫れ自身に於て大なる害悪なり』(All government is in itself one vast evil).¹⁾ そはより大なる害悪を除くが爲の止むを得ざる害悪である。又『經濟學綱要』の序文に於て云ふ『國民の富の分量を増加せしめんが爲め、即ち生計又は享樂の資を増加するの目的の爲めならば、特別の理由なき限り、一般の原則は何事も政府によつて爲さるべからず、企てらるべからずと云ふことなり。之等の場合に於て政府の守るべき標語は Be quiet なる言をなすべからず』²⁾

彼の自由放任論は以上の如く強硬である。之れ蓋し彼の人間觀が快樂説であつて、すべての人が自己の利益の最良の批判者なりと認むるより來る當然の論結でなければならぬ。同時に彼の最後の批判の標準は最大多數の最大幸福である。此の目的の爲に彼の自由放任が説かれたのである。當時各人の自由なる發展に障害となるべき制度は、各方面に満ちて居た。之を改

Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. pp. 284-286.
 1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. I. p. 287.
 2) C. R. Fay: Life and Labour in the nineteenth Century, 1920, p. 45.

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 165-168.
 2) Bentham: Catechism of Parliamentary Reform, 1817.
 " : Radical Reform Bill, 1819.
 " : Constitutional Code, 1830.
 3) William Graham: English Political Philosophy, pp. 247-270.

廢することが其の當時に於ては最大多數の最大幸福に合したのである。又當時の當局の性質よりすれば、政府をして干渉の手を染めしめないことが、最大多數の最大幸福に合したのである。自由放任の論據此の如くであるならば、彼の自由放任は無爲を喜ぶ懶惰の聲に非ずして、勇しき戰の叫びであつたのである。¹⁾ 同時に又自由放任の論據が此に在るならば、其の主張が絶對性を有するものでないことは、之を知るに難くはない。實際に於て彼は經濟界の事に就ては、殆無條件の自由を要求したけれども、他の方面のことに付ては決して絶對的の要求はしなかつた。兎も角彼は自由放任を主張した、此の點に於てアダム・スミス以來經濟學者の唱へ來れる所と、其力を一にして、時代の自由放任化に與かつたのである。ベンサムは自由論の具體的結論の一は即ち契約自由の原則 (Principle of Freedom of Contract) を確立したことである。²⁾ 各人は自己の利益の何たるかを知る、如何なる内容の契約を爲すかは、各人の判斷に任して可なり、政府が其の内容に干渉するが如きは、無益有害なりとするのである。之より以前中世に於ては既に商法は民法より獨立し、商事に就ては

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, p. 149.

2) " " pp. 140-148.

民事と異つて、既に略契約自由の原則を獲得したのであるが、民事に就て各種の制限は契約の内容に拘束を加へて居た。¹⁾ 商事に就ても例へば利息制限の法律の如きは現存して居たので、ベンサムが千七百八十七年の「高利辯護論」に於て、之が廢止を主唱したるは曩に述べたるが如くである。彼等の自由放任を説くや、之等の制限を解除せしめたので、之等契約の内容に制限を加ふるもの外、すべての方面に政府の干渉を排したので、千八百四十六年の穀物條例の廢止に於て、自由放任論が確定的に勝利を博したと傳へられるのである。ベンサムの自由放任論はスミスと其の結論に於て、同一であるけれども、其の徑路に於て必ずしも同一ではない。スミスも亦各人の利己心に放任するならば、見えざる手に導かれて結局全體の幸福を齎すものなることを説いた。けれどもベンサムはより明瞭に、自由放任が何故に採られざるべからざるかの論據を捉へて居た。すべて或る主張は之が根本の論據を確實に把握せる時に其の主張に對する力は強くなり得る、然し同時に亦、新なる事情に應じて、新なる方策に轉じ得る伸縮性に富むものである。自由放任論は其の外形に

1) 松本蒸治氏「私法論文集」第一卷「行爲の自由と商法」

於て、スミス以來毫も變更はない、ベンサム最大の最大多数の最大幸福説は唯旁系より入つて、之に援助を貸したに過ぎないかの如く見える。然し其の主張の終局の論據は、見えざる裡に一回轉を爲したのである。思想の變遷を辿らんとするものは、此の間の消息を看過するの過失を犯さないであらう。

以上はベンサムの功利主義が所謂個人主義時代の思想を作つたことを語るものであるが、彼の思想は唯個人主義時代を構成したるに止まつて、其の時代の経過と共に今は唯背景に退いたものであらうか、之れ次に吾人が考へなければならぬ問題である。彼が自由放任を主張したことは前述したるが如くであるが、彼の論據は最大多数の最大幸福に在つた。當時の實際事情に於ては、自由放任主義が最大多数の最大幸福に合したからである。故に此の主張には事情の變化に應じて、若し他の方向を採る事が最大多数の最大幸福に合するならば、之に變化し得る可能性あることを示すものである。當時貴族地主に對する第三階級の挑戦は、最大多数の名に於て爲されたるも、第四階級たる労働者は其の恩典に與ふことを得なかつたのである。第三階級の爲

めが最大多数の名に於て爲されたならば、第四階級の爲めが尙更に最大多数の名に於て求めらるゝことは事の當然と云はなければならぬ。その思想に於て、ベンサムの門弟たるフランシス・ブレイスは、當時既に功利主義の名の下に労働者の問題に重大の注意を拂つて居たのである。而して十九世紀の中葉以後労働問題の喧しくなりしとき、彼の標語に慣らされて居た英國人は、労働者の要求を聽くべく既に心の準備が整へられて居たのである。かくて個人主義時代の彼の思想は、其の儘に團體主義時代の基調を爲しつゝある。

嘗に彼の標語が後年に於て以上の如く解釋し得るのみならず、彼が法律の改正を高調し、議會の立法によつて之を實現せんとした事は、彼が個人主義時代に於て既に、自由放任と反對の方向に赴くべき傾向を有したるを語るものである。彼によつて求められたるが如き法律の改正は、政府の權能を重からしめ、其の職能を擴張せしむることによつて始めて實現が可能である。更に彼の主張するが如く、最大多数の最大幸福の實現を議會の活動に求むることは、立法議會の勢力を強め法律の上に新なる威嚴を加へ、やがて法律萬能の時

代を將來する傾向なしと云ひ得るか。今日は立法は政府の職能の中、最も主要なるもので、禁酒禁煙その他あらゆる問題に亘つて、法律を以て之を規定せざるものはない。かくて彼の立法論を樞軸として、時代は個人主義より團體主義に回轉し、法律は現今團體主義を行ふ主要なる機關となりつつある。サ・ヘンリー・メイソンがベンサム以後制定せられたる法律にして、彼の影響に歸し得ざるものもあるなしと云へるは、云ひ得て巧なりと云ふべきである¹⁾。更に具に考ふるに彼の政派的立場は始はトリーリイ黨であつた、而して彼の性格も多く考へ多く事を爲す官人的氣風を有したるが如くである。模範的監獄の圖案を始めとして、貯蓄銀行に關する提案の如き、衛生設備に關する意見の如き、その他數へ來らば僕を更ふるも其の違がないであらう²⁾。發明の天才とも云ふべき彼は、實によく案じよく工夫した。之等の事情を思ふとき、彼は宛として後年の Fabian Society の人々の面影がある。エルネスト・バークは思想史上の重要さよりしてウエップをベンサムに比し、シヨウをミルに比したが、³⁾其の傾向に於てベンサムはウエップ、シヨウ等の Bureaucracy を有するのであ

1) Sir Henry Maine: Early History of Institutions, 1875, p. 397.

2) W. L. Davidson: Political Thought from Bentham to Mill, pp. 82-83.

3) Ernest Barker: Political Thought from Spenser to to-day, 1915, pp. 215-216.

る。更に此に加へざるべからざることは、彼と時代を同じくして彼の功利主義が、既に社會主義の學說に採用された事である。即ち所謂リカルド派社會主義者たるウィリアム・タムソンは始めは、熱心なるベンサムの門弟¹⁾、彼を以て社會科學に於けるベリコンに比し、最大多數の最大幸福を以て金科玉條と爲し、ロバート・オーウェン一派の社會主義を嘲笑したのであるが、千八百二十二年彼の思想の轉回機は來り、千八百二十四年公刊せる「分配論」²⁾に於ては明に社會主義を述ぶるに至つたのである。蓋しベンサムは曩に述べたるが如く、最大多數の最大幸福を解釋するに、平等と安全とを比較し、安全を第一とし、平等を其の次としたのである。然し其の時彼が述べたる平等に關する説明は、所謂限界效用の學說に類似するもので、若し彼と少しく立場を異にするものが、之を見たならば、其の中より反對の結論を導くべき萌芽を藏して居たのである。即ち若し時代が安定して安全に對する憧憬が薄らぐ時來らば、各人の財産を平等にするこそ最大多數の最大幸福に適する所以なりとするものあるべき

1) Anton Menger: Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung, 1910, ss. 48-49. — 森戸辰男氏譯「近世社會主義思想史」84頁

2) William Thompson: An inquiry into the principle of the distribution of wealth, most conducive to human happiness; applied to the newly proposed system of voluntary equality of wealth.

は之を推知するに難くはない。況んやベンサムは安全が一切の幸福の源泉なりと云ふも、如何に安全を保證せらるゝも安全を享受し得べき何物をも持たざるものにとつて、安全は何等幸福に値しない。又ベンサムは安全が勤勉を刺戟すと云ふも、勤勉を刺戟せらるゝは極めて少數の資本家にして、大多數のものは安全によつて勤勉を刺戟せらるゝ由なきに苦しんで居るのである。彼より親しく教を受けて、先師の學說より此の間の消息を讀んだものが即ちウィリアム・タムスン及びチャールズ・ホールであつた。¹⁾ 正統派經濟學はリカルドを通じて勞働價值説を彼等に與へ、ベンサムよりして功利主義を彼等に與へた。²⁾ 而して彼等の思想が流れ流れてカール・マルクスの思想となりたるを思へば、思想の影響も亦興味ありと云ふべきである。

今社會思想として功利主義を終はるに臨んで、彼の思想が残した恒久的の影響を考ふるに第一の功績は時代に批判の眼を開かしめたことと云ふことであらう。今日迄社會制度とは何の目的の爲に存在するものなるかを知らずして漫然として其の中に在りたる國民をして、制度の意義を反省せしめ、其の善

惡を批判することを教へたのである。彼の與へた標準は或は將來に於て改訂をされるかも知れない。然し一度彼の教を通つた國民は、最早や傳統と慣習の故を以て、制度に尊敬の眼を注ぐことを敢てしないであらう。ジョン・ヌチュアト・ミルは云つた「ベンサムは究むる心 (questioning spirit) とあらゆるもの why を求むる傾向とを與へた」と。¹⁾ 又 Roebuck が彼の學說は必ずしも時代を擧げて彼の結論に歸依せしめざりしも、彼の社會制度に對する考方は、敵と味方とを問はず影響したりと云へるは、²⁾ よく彼の功績を語るものである。彼の第二の功績と云ふべきものは、社會思想史上より形而上學的思想を驅逐したと云ふことであらう。彼れ以前に於て社會思想上の傾向は、自然法より來れる一種の形而上學的傾向を帯びて居た。或は Nature と稱し、或は invisible hand と云ひ、或は神と云ひ、其の名稱の何たるを問はず、原因結果の作用の上に、超然たる一種の勢力を認めて、之を第一原因として究極の説明をなし來たのであつて、此の如き其の人の主觀的信仰に屬するものは殊に經濟思想史上に隱見して居たのである。³⁾ ベンサムの志が社會科學を化して自然科學と同一の

C. R. Fay: Life and Labour in the Nineteenth Century, p. 47.

G. B. Shaw: Fabian Essays in Socialism, pp. 53-54.

Esther Lowenthal: Ricardian Socialists, 1911, pp. 15-25.

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, 1859. (New Universal Library) vol. I. p. 271.

堀經夫氏「ウィリアム・タムソンの分配論」經濟論叢第十三卷第二號乃至第四號。

1) Charles Hall: The Effects of Civilization on the People of the European States, 1805.

2) M. Beer: History of British Socialism, vol. I. pp. 104-105, 218-221, 259.

ものたらしめんとするにありたるは、曩に述べたるが如くである。従つて彼は普遍妥當性を有せざる觀念に極端なる反感を有したので、自然法を基礎とする人権宣言を痛罵したるが如き其の例である。固より最大多数の最大幸福が理想なりと云ふは、尙一種の獨斷なりと云ひ得ないではない。然し之が獨斷たるは、神、自然、見えざる手が獨斷なりと云ふと其の趣を異にする。それは許され得べき獨斷で、彼が立論の方法に客觀性を尊重したるとは認めざるを得ないであらう。ミルがベンサムを評して「彼は偉大なる哲人に非ざりしなるべし、されど彼は哲學に於ける偉大なる改革者なりき。彼は哲學の中に、それが最も必要としたるもの、之なかりしが爲に哲學が往きつまりし、或るものを注入せり。之を爲したるは彼の學說の内容に非ずして、學說に到達したる方法なりとす。彼は倫理學と政治學の中に、科學たるに必要缺くべからざる思索の慣習と研究の方法を紹介せり¹⁾」と稱したるはよく其の要點を捉へた言である。若しコムの言を借りるならば社會思想は彼を得て始めて、神學的形而上學的時代を脱して、實證的の時代に入つたと云ひ得るのである²⁾。彼

2) Seth Pringle-Pattison: Philosophical Radicals, pp. 44-45.

3) 本書 35-43頁

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, p. 277.

2) Roylance Kent: English Radicals, pp. 167-168.

の影響の經濟學に表はれたるはリカルドを通じてである¹⁾。若しリカルドの地代説をスミス、メルサスの地代説と比較するならば思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう²⁾。經濟學が其の究極の理想として其の立論の前提として、前述の如き多くの獨斷を排して功利主義を採つた其の時より、經濟學は普遍妥當性を有して、始めて科學としての體裁を具ふるに至つたのである。固よりかくして經濟學が科學たるの地位を贏ち得るが爲に拂つた犠牲は大きい。形而上學的傾向を驅逐する爲に、心理學的快樂説を輸入したるは一難去つて一難來るの感はある。然しすべてを一舉に爲し遂ぐるは不可能である。先づベンサムの努力は爲されねばならなかつた。彼によつて開かれたる路はやがて後人の進歩を早めるであらう。此にジェレミー・ベンサムの社會思想史上の意義があるのである。

社會思想としての功利主義が、實際社會に又思想史上に擧げた功績は以上の如くに顯著なるものがある。功利主義は社會思想としては、倫理説としてよりも、受くべき批難を免れ得るは曩に述べたるが如くである。然し彼の思

1) 大西猪之介氏“囚はれたる經濟學”122頁以下

小泉信三氏“正統派經濟學と功利主義哲學”思想大正十一年一月號

2) David Ricardo: Principle of Political Economy and Taxation, 1817, (Every man's Library) p. 40 note.

想の根本の立脚地が快樂説であつたと云ふことは、此にも彼に付き纏うて離れない。社會制度を批判するに用ゐられた最大多數の最大幸福なる語は過去の歴史に於て、重きは前段の最大多數の方に置かれ、之によつて獨占と不平等とを克服したるの功績は認められる。假令今日は思想上に於ては何人も社會の制度が最大多數の爲に存するものなることを疑ふものは無いとしても、實際の結果に於ては未だ社會制度が社會全般の者の爲に解放せられては居ない。此の點に於て此の語は依然として將來も尙多くの功績を擧ぐべき使命がある。しかし幸福を受くべき階級の範圍のみが重大問題たらざる時が來るならば、後段の最大幸福なる觀念に注意が向けられねばならないであらう。社會の制度の使命は社會に屬する人々の人格の發展の爲に、必要なる環境を具ふるに在る。幸福が其の必要なる環境たる場合は多いであらう。然し重きを置かるべきは其の幸福が人格の發展の爲に役立つことにある。例へば勞働法規の實施は勞働者の爲に時間を短縮し、賃銀を増加し、工場設備を改善し、危害に對する保證を與へる、之等の條件は勞働者にとつて幸福な

る環境である。然し社會制度の本來の使命は之等の幸福が勞働者の内的の發展に與ふことに在る。最大幸福なる語は、稍もすれば唯幸福を具ふるを以て能事終れりとするの傾向を助長する。此にも彼の快樂的的人生觀は付き纏うて、彼の社會思想に一抹の暗影を投ぜざるを得ないのは、頗る遺憾と云はなければならぬ。¹⁾

第五節 結論

ジョン・スチュアート・ミルは千八百三十八年 London and Westminster Review に於て云つたことがある。「最近英國は二人の人を失つた、英國は現時智識階級の間に行はるゝ主要なる思想の大部分と、其の考方と研究方法との革命を、此の二人の人に負ふのである。……彼等の著作は決して廣くは讀まれて居ない、然し彼等は教師の教師とも云はるべきものであつた。現時英國に於て思想界に名を爲したる人にして、假令彼が其の後に如何なる意見に變らうとも、此の二人の内の何れかより先づ考ふことを學ばざりしものは一人もあ

1) T. H. Green: Prolegomena to Ethics, pp. 351, 435-439.

るまい。……其の二人とは一人はジェレミー・ベンサムで、他の一人はサミュエル・テラー・コルリッヂである。……彼等は或る狭い名稱で分類をせられるには、餘りに偉大ではあるが、概して言へばベンサムは進歩的哲人で、コルリッヂは保守的哲人であつた。……ベンサムには現存思想と現存制度の中に無視せられたる真理を看破するの天才が與へられ、コルリッヂに對しては現存思想と現存制度との中に、如何に真理が潜めるかを看破するの天才が與へられたのである』¹⁾と。之れミルがベンサムを評論した時の冒頭の言である。今コルリッヂに付ては暫く問はずとして、ベンサムに對する此の評は鐘愛の門弟が、恩師に對する推讃の辭として殆遺憾なきに近いと思はれる。當時の英國に及ぼしたるベンサムの影響は、しかく巨大なるものがあつたのである。

英國思想家は僅にサミュエル・ジョンソンを除いては、由來之を圍む門弟を多く有しなかつたと云ふことである。しかし其の異數の例外として、ジョンソンの外に此にベンサムを擧ぐることが出来る。彼の身邊に在りし秘書役

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. I. pp. 270-271.

としては、瑞西人 Dumont があり、James Mill あり、後に John Bowring がある。又彼が門邸に出入する思想家政治家の如何に多數なりしかは、曩に幾度か述べたが如くである。彼の倫敦ウエストミンスターなる Queen Square の邸宅は門前市を爲し、桃李滿庭争うて煥發したと云ふことである。而して實際的手腕に富めるジェームス・ミルを首領として、彼の門弟は所謂功利主義の宣傳 (Utilitarian propaganda) を開始したのである。當時思想界の分野を云ふならば、凡そ四つの種類を區別することが出来る、即ち一は最も右翼にある保守派なるトリー黨である。最も左翼に在るものがフランス革命思想の宣傳者であつて、共和制を主張し、共產主義を説き、無神論を説くものすらある。此の中間に二つあつて、右黨に近いものが即ちホイッグ黨で、左黨に近いものがベンサム一派の系統である。當時保守黨の機關雜誌として Quarterly Review がある、カニンガム、スコット等の主宰する所である。又ホイッグ黨の雜誌にはジェック・フレイを中心とする Edinburgh Review がある。ベンサムの門弟は一方に於て最左翼なるフランス革命思想を攻撃すると共に、寧ろ主力を傾けて鋭鋒を向

けたのはホイッグ黨であつて、彼等が不徹底不忠實なる改革派なることを攻めた。千八百二十四年彼の同志は集まつて Westminster Review を發行し、ベンサム主義の宣傳を爲し、忽ち世人の視聽を惹いたのである。其の後此の雜誌は廢刊になつたが、千八百三十四年 London Review なる名を以て復活し、次で London and Westminster Review なる名稱を採つた。之に活動する人々を稱して Philosophical Radicals と云つたのである。彼等が一黨派としての生命はさまで永くはなかつた。しかし彼等の思想がフランス革命の反動時代を受け、後如何に改革熱を鼓吹したかは、既に前節に於て叙説したるが故に、今再び此に之を説かない。

然らばベンサムは何が故に、しかく大なる勢力を有したか、其の説明の一つは、彼が社會改革者としての特長に歸しなればならない。由來社會制度の改革者には二つの要件を必要とする。第一には改革に當つて適用すべき普遍的原理を提ぐるを必要とする。此の原理は複雑なる實際問題に對して、一々其の是非を判別すべき批判の標準たり、又改革によつて到達すべき究極の

1) Roylance Kent: English Radicals, pp. 168 ff.
John Stuart Mill: Autobiography, pp. 54-56, 60, 114.

理想である。然し改革者は之のみを以て足るものではない。第二に此の原理を如何にして、又如何なる場所に適用すべきかを理解することが必要である。之れ其の目標に到達するに、如何なる道を探るべきかを教ふるものである。一人格者にして此の二つの要件を具ふることは極めて困難で、原理を提ぐることを知る者は其の見る所徒に抽象に失し空論に走り、之を何處に用ふべきかを知らず、實際に應用の道を解するものは、其の限界小天地に跼蹐して高所より批判することを知らない。ベンサムが改革者としての特質は、一人格者に稀有に調和せらるべき以上二つの性格を具へた所に在るのである。彼は學究であつた故に、彼が普遍的原理を提げたことは當然である。しかし同じく普遍的原理を提げたる自由平等論者とは其の行途を異にして居た。彼等は現存制度の破壊を叫んだけれども何所を如何に改むべきかに就ては具體的の意見を有しなかつたのである。之れ彼等の主張が勇ましかりしに拘はらず、實際に効果を擧げ得ざりし所以である。ベンサムには監獄の圖案を作る底の一種の技術的發明の天才があつた。彼は何所に弊害があり何所

が突かるべき急所たるかを心得て居た、此の點が彼の革命思想家と趣を異にする所以である。然し彼は、一局部一局部の改革を其の場其の場で爲し遂ぐる所謂實際家ではない、すべての場合を通じて改革の嚮導原理を掲げることが忘れなかつた。最大多数の最大幸福なる言は改革の嚮導原理として民衆に目標を示すに餘りあつたのである。時代の民衆が現在制度の缺陷を認めても、其の缺陷の何所に在るかを明瞭に捉ふることが出来ない。又改革の必要を直覺しても何所に向ふべきかを知るに苦しむる時に於て、彼は簡単にして明白なる目標を與へたのである。之によつて民衆は其の自ら求むる所を明に表現することを得、前進の努力に弛みを生ぜざるを得たのである。¹⁾彼の如き原理を提げて、而も之を用ふる道を心得た人は、いかなる場合に於ても、社會改革者として必要である。彼は此の必要なるべき要件に完全に適中して居たのである。彼の思想が時代を動かした説明の一つは此に在る。

然し説明のすべてを彼の性格にのみ歸することは出来ない、他の原因は之を外界に求めなければならぬ。元來最大多数の最大幸福なる言は新しい。

¹⁾ Sir Henry Maine: Ancient Law, 1861 (New Universal Library), pp. 64-65.

然し其の内容は敢て新しいのではない。吾人の倫理説としても社會思想としても、最大多数の最大幸福を心懸くべきは常識として何人も疑はない所である。古來賢明なる君主政治家の政治の要諦も畢竟此に在つたのである。苟くも政治に進歩主義を執るものならば、何人も彼の思想に賛成せざるを得ない、換言すれば彼の思想は古來永く理想とせられたるものを、新しき言と新しき方法とを以て表現したるに過ぎないのである。況んや英國人はマグナ・カルタ以來、千六百八十八年の光榮ある革命に至る迄、自由の制度を確保し來れるもので、彼等が無意識に進み來れる進路を顧みれば、畢竟最大多数の最大幸福を目標としたものに外ならない。彼は在來自ら知らずして歩み來れる理想に明白なる表現を試みたるものである。此の如くして彼の思想は國民として、英國人に最も理解し歓迎せらるべき傾向がある、其の言の卑近にして常識的なるは、よくアングロサクソン人に適するもので之れ彼がロバート・フ・オン・モールの如き例外を除きては、一般に大陸の學者の注意を惹かざりしに反し、英本國の學者に重んぜらるゝ所以であらう。

然れども以上の説明は彼の思想が畢竟英國人に、するものなるを説くに止まつて、特に十九世紀の始めに於て、時代を動かしたることの説明としては足らぬを感じる。之が爲には別に特殊の原因を求めなければならぬ、之を求めて次の二個を得たのである。第一には彼の思想は時代の要求に投じたからである。此の時代は沈滞の前時代の後を受けて、各方面に局面の展開を求めた時代で、此の時代に於けるが如く、社會生活の各方面に改革の實績を擧げたるは史上に類似が尠いであらう。而して此の時代の特色は其の傾向に於て改革的たると共に、其の内容に於て著しく人道主義的色彩を加味したるにある。所謂人道主義とは、出來得る限り精神又は肉體に與ふる苦痛を輕減せんとするもので、此の運動がメソヂイストの人々に負ふ所多きは、前述したが如くである。此の運動の効果は、表はれて或は殘酷なる刑罰の廢止となり、死刑の減少となり、動物虐待の取締に表はれ、更にジョン・ホワードの監獄改良となり、シメオン・ザカリイ・マコーレ、ウィルヴァフォルス、クラークソン等の奴隸廢止運動となり、ローランド・ヒルの郵便制定の改良となり、更にサ・ロバ

ト・ピール、ハンナ・モーア等の千八百二年の「徒弟の健康風紀に關する條例」(Health and Morals of the Apprentice Act)となり、始めて工場労働者の保護に着手し、爾來百餘年間に亘れる一連の労働立法の先驅を爲すに至つたのである。之を要するに此の時代は世を擧げて、純潔なる改良運動に動いたる時で、ベンサムが述ぶる最大多數の最大幸福とは、畢竟人道主義の異なる表現たるに過ぎない、即ち彼の思想は時代を造れるものなりと共に、又時代の造れるものである。かくて彼も亦 spirit of age に投じたのである¹⁾。

第二には彼の思想が進歩派の要求を満すと共に、必ずしも保守派に恐怖を與へざりしに在る。改革の運動は當時に於ても決して Philosophical Radicals の専有ではなかつた。フランス革命思想を奉ずる所謂 English Jacobines と稱せらるゝ一群の人々があつた。然るにベンサム一派のみ何が故にしかく時代に容れられたのであらうか。佛國革命は始め進歩を喜ぶ英國人に依つて、非常なる歡喜を以て迎へられたのである²⁾。蓋し隣邦が多年の専制を廢し、Magna Carta の Habeas Corpus Act とが、隣邦に於ても實施せらるゝは、彼等進歩派に

1) M. Beer: History of British Socialism, vol. I. v-viii.
M. Ostrogorski: Democracy and the Organization of Political Parties, 1908, vol. I. p. 28.
J. Mc Carthy: History of Our Own Times, vol. I. p. 64.
2) M. Beer: History of British Socialism, vol. I. pp. 120-123.

とつて同志を海外に得る所以であるからである。然るに革命が不秩序、虐殺、弑逆等、あらゆる無政府的狀態を現出するに及んで、曩に革命を讚美したる進歩派も亦呪咀を以て之に對するに至つたのである。此の間の英人の心理は頗る興味ある研究題目たるを失はない。元來佛國には過去に多年の専制があつたのみで、何等の自由がなかつた。故に佛人の前には唯前進あるのみである、彼等は如何なる混亂不秩序の中にも、尙過去に優れる何物かを贏ち得る望があるからである。之に反して英國には Magna Carta あり、Habeas Corpus Act あり、Bill of Rights がある。彼等は多少なりとも自由を享有して來たのである。此の自由は英人のみが世界に誇り得る喜ばしき制度である。故に此の制度を擴張して、自由の範圍を多からしめんとは彼等の熱望する所であるが、若し徒に混亂不秩序を現出して、過去に於て贏ち得たる自由をも失ふの怖あらんか、彼等は前進に躊躇せざるを得ない。即ち佛人には前進の一途あるのみ、過去に於て何物をも持たざるものには一物をも失ふの怖なければなり。之に反して英人には愛護すべき過去がある。豫測し得ざる未來の空想の爲

H. N. Brailsford: Shelly, Godwin and Their Circle, 1913, pp. 51-55.
A. V. Dicey: Statesmanship of William Wordsworth, 1917. p. 21 ff.

に既に持てる物をも失ふは、彼等の絶對に避けんと欲する所であつた。此に於てか革命に對しては一部少數の急進派を除いては何れも極端に之を呪ひ、自由、平等、自然權、自然法等を唱ふるものは極力之を壓迫したのである。當時の空氣が如何に反動的なりしかは、千八百年の Combination Act と千八百十九年の Six Acts を見れば之を想像することが出来るであらう。若しベンサム
の改革思想が革命思想と同一の立場にあつたならば、彼は多くの革命家と共に葬り去られたであらう。然し最大多數の最大幸福なる言は俗耳に理解し易い、卑近なる言で、其の内容も亦略確定的で、自然權と稱するが如き内容空漠で、其の要求の奈邊に停止するかを知られないものと趣を異にする。又改革の方法も實定法の改正に依らんとするもので、毫も破壞的革命的ではない。此に於てか彼の改革思想のみは、獨り反動的の氣勢を潜つて生命を永らへ、改革氣運を促成することが出來たのである。之を要するに彼の主張は進歩派の要求を満すと共に、反動に阻止せらるゝことなかりしことが、特に此の時代に彼の勢力を占めた原因の一であらうと思ふ。

以上はベンサムBenjaminの社會思想が時代に普及した理由を語つたものであるが、彼の社會思想と共に、之が副産物として、倫理説も亦普及するに至つた。蓋し十九世紀の前半は社會の改革に熱中した時で、先づ彼の社會思想を必要とし、次で之を通じて倫理説に及んだのである。此の順序は亦彼の思想發展の順序でもある。彼は七歳の時 Fenelon の *Telemachus* を讀んで、主人公の人格に感激したる時より、既に社會を改革せんとするの欲求に燃えて居た、彼れ自身も功利主義の抑々の淵源は、此に遡ることが出来る1)と云つて居る。かくして彼は生れながらの改革者であつたのである。次で法律の研究を爲すに及び、社會の改革を法律によつて爲さんとし、次で法律そのものの改革を爲さんとし、立法者は何を標準として立法に従事すべきかの研究をしたる結果、漸次倫理學の研究に入り、かくて人間性の斷定をする必要より心理學的快樂説を採るに至つた。固より思想發展の順序を一定の範疇に入れることは無理であるが、彼に付ては以上の如き徑路を採つて來たのである。之と同時に彼の政派的立場も亦變化を生じて居る。彼は元來トリー黨Toryに屬した。初期の

1) F. C. Montague: Bentham's Fragment on Government, p. 1.

の改革意見は、開明專制の立場に於ても爲し得べき改革であつた。此の時彼は如何にして改革を爲すべきかに就て、各種の提案を懷いて居た。即ち彼は改革案を有したる保守黨であつたのである。然るに彼の改革案の容易に行はれざるや、其の理由を究めて現存政治組織の缺陷に歸し、遂に急進派に移るに至つた。彼の此の行徑は一個の社會改革者の生涯として甚だ興味ある行方である。彼は始め思想に於て急進派に屬したる者が、現實の實際問題に逢着して、忽ちに保守派の門に降伏する一派と行路を逆にし、具體的改革案を提げたる眞摯なる保守派であつた、しかるに其の意見の行はれざるに及んで、始めて現存組織の改革に到達したので、彼の急進派としての主張に無限の確信の伴ふのは此の徑路の賜であると思ふ。次に彼の學問研究の順序が前述したるが如きものなることも、亦甚だ興味ある參考資料たるを失はない。彼は先づ社會の改革者であつた、かくして漸次到達した最後は、人間性を利己的なりと斷定する人間性の研究に及んだのである。此に彼れの本來の立場と彼の人間觀との關係を説明する好箇の鎖鑰が存するのである。

彼は人間性を利己的なりと断定したることを以て、多くの人から指彈を受けた。しかし彼れ自身の性格は、彼によつて斷ぜられた人間性とは頗る趣を異にして居る。彼は云ふ、自分は利己的な人間である。誰にも劣らぬ程に利己的である、しかし何う云ふ譯か自分に於ては利己心は偶然にも博愛心の形を採つて居ると¹⁾。又云ふ、若し私が親しい友人を持つても、其の友人の利害が公共の利害と衝突した時には、其の友人の利害は私にとつて何等考慮しなくともよい様な友人を持ち度いと²⁾。之等の言を見て如何に彼れ自身が利他博愛を以て立つて居るかを知ることが出来る。殊に彼の言にも増して強き印象を與ふるは彼の生涯である。彼の八十四年の生涯こそは全く自己を忘れて公共の爲めに捧げた最も純潔な生涯であつた、彼れ自身の性格と彼の人間觀とは、果して如何にして調和するものであらうか³⁾。之と類似のことはカール・マルクスに就ても云ひ得る。彼は由來人間が物質關係に動かさるゝものなるを述べたりとの故を以て、理想主義を奉ずる人より多くの攻撃を受けた。しかしマルクス六十五年の生涯は誠に自己の把持する理想の爲めに捧げた、

1) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, p. 52.

2) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 22.

3) Henry Sidgwick: Miscellaneous Essays and Addresses, 1904 p. 151.

最も純潔な唯心的の生涯であつたのである、此にも亦論者の性格と人間觀との矛盾を見出すことが出来るではないか。此の解釋は如何に爲さるべきか。一言にして云へば改革の理想先づあつて、而して後に人間觀が來るのである。人間觀あつて理想が次で造らるゝのではない。彼等の理想を行ふに此の人間觀を採ることが最も必要なのである。自分は此に獨逸哲學者ロツエの言を想ひ起す。彼は其の著「大形而上學」¹⁾の結末に於て云ふ。「余は今も尙あらねばならぬ所のもの、あるところのもの、の根據を求むるの正しさを確信す」と(*.....noch immer bin ich der Überzeugung, auf dem rechten Wege zu sein, wenn ich in dem, was sein soll, den Grund dessen suche, was ist.*)。即ち *sein* あらねばならぬかに非ず、*sollen* あつて *sein* 來るなり。何が正しきか、何であらねばならぬかが先づ定まつて、而して次に何であるか、何と見るべきかが來るのである。彼等が理想家にして、彼等の性格が利他博愛たりし一方に於て、彼等の人間觀が之と正反對なりし這般の消息は、此に其の説明を求むるとが出来るのである²⁾。人間を觀察する主體たる彼れ自身と、觀察せらるゝ人間との間に存する矛盾

1) Hermann Lotze: Mikrokosmos, I. 1856, II. 1858, III. 1864.

2) W. R. Sorley: Moral Values and the Idea of God, 1913, p. 3.

盾は、以上述べたるが如くして説明せらるゝとして、此の矛盾が如何なる方法によつて來れるかと云ふに、そは一に自然科学的研究方法を探れるに淵源するのである。彼は自己の理想たる改革の信念に確實性を與ふるが爲に、又自己の改革を聽かんと欲する人に承服力を與ふるが爲めに、自然科学的方法を自ら採るに至つたのであらう。而して其の結果が彼れ自身の性格と矛盾する人間觀に導き、實相に反するの批難を受くるに至つたのであるが、更に之を別とするも、彼の採れる研究方法は二つの難問を招致した。即ち一は彼が人間に内在する本有觀念の存在を否定したる結果は、從來善か惡かの判斷をなしたる源泉を失ひ、善惡を外界に於ける或る状態の實現に求むるの外なきに至り、幸福の集積に之を求むるに至つたのである。此の事が倫理說としての功利主義に破綻を來し、更に社會思想としての功利主義にも亦其の影響を及ぼしたるは曩に述べたるが如くである。他の一は人間を以て其の意思が決定せられたるものと見るることによつて、吾人の道德の意識當爲の意識と衝突する結果を齎したのである。若し吾人の道德的生活に對する憧憬にして弱

からしめば、比較的無事に彼の人間觀と妥協し得るであらう。然し若し吾人の倫理的欲求にして強からしめば、吾人は永く彼の人生觀と妥協するを首肯し得ぬであらう。以上二つの缺陷は彼の全思想體系の中心に潜んで彼の思想内到的處に隨伴する。之れ一に人間を以て自然と同一視し、自然に適用する方法を以て、人間に適用したるに原因する。人間を以て自然と同一なりと判じたる其の出發の前提に於て、既に本有觀念の存在を否定し意思の決定せらるゝを認められたからである。其の結論に於て此に至れるは、其の前提より來る當然の歸結である。

此に興味あるは個人主義と社會主義とが正反對に立つと考へらるゝに拘はらず、其の立論の基礎は等しく自然科学的であると云ふことである。其の結果は個人本位の思想たることに於て、人間の意思を決定せらると見ることに於て、其の傾向が唯物的たることに於て、共に二者は符節を合するが如くである。唯二者は其の基礎を自然科学に置くに等しきも、其の自然科学が個人主義に就ては物理學たり、社會主義に就ては生物學である。此の點よりして

二者の思想上の方向に差異を來せるも、其の基調が自然科学的たることに於て毫も其の間に區別はない。之れ二者が共に理想主義によつて反對せらるゝ所以である。彼等は人間の意思は決定せらるると説く、而も之を説く彼等の意思是決定せらるゝか。彼等は人間が唯物的なりと云ふ、而も之を説く彼等は果して唯物的なるか。之れ自然科学的社會思想が必然に逢着せざるを得ざる難問である。

凡そ社會思想は三つの點に於て人間と接觸する、一は思想を説く彼れ自身である。二は説かるる思想中の對象としての人間である。三は其の思想の結果を適用せらるゝ人間である。若し理想主義を採らば第一の人間と第三の人間とを同一立場に置いて考ふることは困難ではない即ち第一の場合に吾等は自己の人格を最高の程度に完成せんと努力しつゝあるものなりと考へ、第三の場合に例へば労働法規を適用せらるゝ労働者の人生の意義を同様に考へて、法規の適用を以て彼等の人格發展の爲めに具ふる必要なる環境なりと説くを得る。然し此の場合第二の思想の對象としての人間を之と同一

に考ふるならば科學としての普遍妥當性は失はれざるを得ないであらう。此に於て普遍妥當性が科學たるに必要な條件に非ずと説かば、論理としての筋道を整ふることは出来る。然し果して之を以てすべてを満足せしむるを得るや否や。理想主義者の幾多の努力あるにも拘はらず、筆者の淺學なる、今日に於ては尙全體として之を首肯し得ざるを遺憾とする。翻つて自然科学的立場よりせば、當然第二の場合の人間と第一及び第三の場合の人間との矛盾を生ずる。第二の場合に於て彼等が説く人間性が頗る悲觀的たるに拘はらず、第三の場合の思想を適用せらるる人間に就ては頗る樂觀的である。而して第一の場合の人間に就ては、多くは自ら言ふ所が無い、然し彼等の生涯よりも之を察すれば、明に彼等の人間觀と矛盾するものたらざるを得ないのである。

思ふに人は彼れ自らが考ふるよりも大きい。彼が言に云ひ、筆にて表はすことよりも、彼を構成する思想は更に廣汎である。彼れ自身によつて意識せられざる世界は、彼によつて意識せらるゝ世界と相竝んで彼を嚮導しつゝあ

るのである。ベンサムによつて説かるゝ人間觀と相竝んで存するものは、彼の無意識界にある彼れ自身である。ベンサムの快樂説と相竝んで存するものは、彼の無意識界にある一種の理想主義であらう。我等の望む所はベンサムが自ら知りし我と知らざる我との調和を完成したりしならばと云ふことである。然し彼は之を爲さなかつた。此事は我等後人に何を教ふるであらうか。我等のなすべき義務は吾等の無意識に潜めたるものを探つて、意識の境に在るものとの整理を試み、Brainに在るものとHeartに在るものとの打つて一丸とし、渾然たる社會思想を作るに在る。然らざれば吾等の人格は分裂してある。人格の分裂は危機に臨んで吾等を誤る、如何となれば力は唯人格の統一よりのみ湧くからである。

吾等が目下面接しつゝある社會的事情は、百年前ベンサムの眼前に展開したる社會事情と頗る其の趣を等しくする。唯之がプロレタリアを中心とするに反し、彼がブルジョアを中心とし、之が經濟上の平等を中心とするに反し、彼が機會の平等のみを説くと趣を異にするのみである。其の社會的變動

の巨大なるに於て、改革的機運の旺盛なるに於て、共に近世歴史上に異例と目せらるべきものである。彼は百年前の此の變動を前にして、心理、倫理、政治、經濟、法律すべてを打つて一丸としたる、一社會思想の體系を作り、之を改造の哲學として提供したのである。彼が如き一元的體系を作れるもの、前にホッブスあり、後にスペンサーあるのみ。其の計畫は巨大にして其の着想は非凡である。之を貫くに一縷止みがたき公共奉仕の熱誠を以てする、百年後の社會的變動に處する後人、之を緝いて無限の感慨なきを得ないのである。彼の學説を難ずることは易い、しかしそは唯彼の肩にあつて彼を難ずるが如きものである。吾等は既に彼によつて開かれたる地盤の上に立ちつゝあるからである。彼の思想の内容は廢たる時があるであらう、されど社會哲學は何を基礎とすべきか、如何なる方法を探らるべきか、何所に解決を要する困難があるか、を示すに表はれた其の態度と其の着眼とは永く研究に値する。すべて徹底せる事物の研究は自他の立場を明にする。かくの如くして始めて思想の進歩は之を期待し得るのである。嘗てコムトは云つた¹⁾「吾等が複雑な

1) Edward Caird: Social Philosophy and Religion of Comte, 1893, p. 210.